
弟は真田幸村

ボン太郎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弟は真田幸村

【Nコード】

N5770M

【作者名】

ボン太郎

【あらすじ】

神様のミス「お館様あ！」で死んでしまつ「幸村あ！」た僕——
—真田雪が、「お館様あ！」転生先の戦国時代で「幸村あ！」弟の
真田幸村や個性豊か「お館様あ！」な武将たちと一緒に「幸村あ！」
成長していく物語。……二人とも、うるさいです。 現在全国行
脚編！

プロローグ（前書き）

戦国BASARA式を見ていたら書きたくなって書いてしまいました。

後悔はしていません、これからたっぷりする予定です。

不定期更新になると思います。それでも良いという方は先へどうぞ！

プロローグ

「ごめんなさい！ 私のミスであなたを殺しちゃいました」

背中から白い翼を生やした金髪の美女が、右手で頭をコツンと叩き、舌をペロツと出しながら謝って来た。

殺しちゃった？

「僕、死んだの？」

「はい！ 本当にごめんなさい」

「はあ……とりあえず語尾に、付けるの止めてください。ウザいんです」

「ごめんなさい、これ癖だから無理」

どうしよう、凄いム力つくんだけど。この……天使？ 神様？

「はい、神様です」

「あ、やっぱ神様なんだ……」は？

「
♪」

付け足した！ 付け足したよ、神様！ とういか心読まれた！？

「当然です、神様ですから♪」

「……そんな神様が、どういうミスで僕を？」

「私のくしゃみで車線外れたトラックが公園の木にぶつかって、倒れた木があなたをプチッと潰しちゃったんです♪」

「それはミスというよりドジじゃない！？」

もつとちゃんとした理由が欲しかった！

「まあ、良いじゃないですか。お詫びに転生させてあげますから。
20年間独り身の真田雪さん^{さなだゆき}♪」

「……転生って、どこに？」

「戦国時代です♪」

無駄にでかい胸を張って高らかに宣言した神様（♪）。

戦国時代か……。そんな戦いばかりの時代に生き残れるのかな？

というか戦国時代って、過去だから転生って言わないんじゃない？

「大丈夫です！ 並行世界ってやつなので！ それと命の心配はしなくて良いですよ？ 私がいくつか好きな能力をあげますから」

おお、太っ腹。でも戦国時代だしなあ。あんまり強力な能力貰っちゃうと、偉い人とかに目を付けられちゃうかもしれないし……。

「じゃあ身体能力を常人の五倍にして、ソードアートオンラインの二刀流スキルが使えるようにしてくれない？ それとキリトが使ってた双剣も欲しい」

カッコイイよね、キリト。双剣使ってみたかったんだよね。

「うん」

あれ、神様悩んでる。やっぱり欲張り過ぎたかな？ っ付け忘れる程悩んでる。

「それだけで良いんですか？」

「え？ もう大分チートだと思うんだけど。だって行く場所戦国時代なんでしょ？」

戦うとしたらただの人だろうし。常人の身体能力の五倍ってだけでオーバーキルだと思うんだけど。

「まあ、雪さんが良いなら良いんですけどね？ それじゃあ、あつちに着いたらもう身体は強くなってるんで。双剣スキルも使えるようになってます。双剣は雪さんのお家の家宝ってことにしておきますね」

「うん。ありがとう」

色々気になることもあったけど、とにかく死なないように頑張ろう。

「じゃあ落としますね」

「あ、こういう場合ってやっぱ落ちあああああ！」

落ちる！ 落ちる……ってどこまで落ちるの、これ！

「戦国って言っても、BASARAの方なんですけどね……まあ、いつか」

落ちる間に神様が何か呟いていたが、絶賛叫び中の僕には聞こえ

な
か
っ
た。

プロローグ（後書き）

主人公はBASARAを知りません。ただの戦国時代に転生すると思っています。

どうも、真田雪です（前書き）

しばらくは子供時代です

どうも、真田雪です

皆さんこんにちわ、神様に殺されて戦国時代に転生した真田雪です。転生してから六年が経ちました。え？ 早いつて？ 僕はこれまでの六年間は思い出したくありません。思い出したくないっていったら思い出したくありません。転生前は二十歳という大人だったのに侍従さんに下のお世話をされるなんて屈辱的なこと、思い出したくありません……思い出していました。

そうそう、転生しても僕の名前は『真田雪』です。最初はこんな偶然もあるんだなあと思ってましたが、転生して二年が経った頃、僕に弟が生まれました。その弟の名前は……。

「？姉上？！」

「ん？何？」

「夕餉^{ゆうげ}の準備が出来たので呼びに来たでござる！」

「もうそんな時間？ ありがとう、？幸村？」

「礼はいらんでござるよ、姉上！」

『真田幸村』です。そう、僕はあの真田幸村の姉として転生してしまっただけです。

……え？ お前女だったのだった？ 男だなんて一言も言ってませ

んよ？ 女だとも言ってますけど。

所変わって、今は夕餉……つまり夕食を食べています。

この場にいるのは僕こと雪に、弟の幸村、そしてお館様こと……。

「幸村あ！ 食べておるかあ！？」

「はい！ 食べておりまする、お館様あ！」

『武田信玄』です。家臣のみんなからはお館様と呼ばれてます。

しかしまさか本物の武田信玄をこの目で見るなんて、生きてて良かったです……あ、一度死んでましたね、僕。

ああ、そういえば私の今の容姿は綺麗な茶色い髪を腰まで伸ばした………なんというか、ソードアートオンラインのアスナを子供にした感じです。多分大きくなったらまんまアスナになるんだろうなあ。

「雪い！ お前も食うのだぞ！ たらふく食って強くなれい！」

「分かりました、お館様」

おいしそうに焼き上がった焼き魚をつまみ、お米を食べる。夕餉の

内容は焼き魚に沢庵、味噌汁にお米という物ですが、幸村とお館様のお米の量が半端じゃありません。隣に座る幸村の顔が見えないくらいです。

ところで……僕はあまり詳しくないのだけれど、昔は幼い頃は幼名というのがあるんじゃないだろうか？ 確か徳川家康は竹千代……だったっけ？ そんな感じの名前があったと思うんだけど、僕も幸村も最初から『真田雪』に『真田幸村』だ。まあ、幼名なんてあってもなくてもいいんだけど。

「幸村あ！ 滾っておるかあああああ！」

「滾っておりまする、お館様あああああ！」

僕が考えている間も幸村とお館様は夕餉を物凄い速さで食べ続けている。どうして食事で滾る必要があるのか、幸村とは四年、お館様とは六年一緒にいるのに未だに分かりません。というかあのテンションについていけません。

そうそう、何故お館様と一緒に食事をしているのかというと、僕と幸村の父『真田昌幸』はしょっちゅう仕事で遠くに出掛けるので、普段はお館様に僕たちの世話を任せているみたいです。自分の主君に幼稚園の先生みたいなことをさせて良いのか……と思いましたが、お館様は僕たちと一緒にいるのがとても楽しいみたいなので問題は無いみたいです。

それ以前に兵士の皆さんはみんなお館様と仲が良いです。いつも朝の鍛錬で兵士の皆さんがお館様に殴られて遠くに飛んでいくのを良

く見かけます。あれが噂の『男同士の拳での語り合い』というやつなのでしょう。微笑ましい光景に思わず頬が緩んでしまうこともしばしばあります。武田は武将も兵士も侍従もみんな家族みたいに仲が良くて、とっても温かい場所です。

「む！ 姉上！ せっかくの夕餉が冷めてしまいますぞ？」

「……そうね。ありがとう、幸村」

「だから礼はいらんでござるよ！」

隣で屈託の無い笑顔で笑う幸村を見て僕も笑う。

戦国時代。これから先、何が起こるか分からないけれど、武田の人たちに幸村と一緒に楽しく生きていけそうです。

「……『真田十勇士』にちなんで、『雪十勇士』でも作ってみようかな？」

どうも、真田雪です（後書き）

誰が主人公は男だと言った

男士の…

どうも皆さん、真田雪です。

七歳になりました……え？ だから時間の経過が早いつて？ そんな細かいことを気にしていたら駄目です。お館様に殴られますよ？
で、僕が今何をしているのかというと。

「はあ！ おりゃあ！」

「幸村！ 腰が入つとらんぞ！」

「はい！ 父上え！」

久しぶりに仕事から帰って来た父さん——真田昌幸が私の弟、真田幸村の稽古と言う名のシゴキの場面を正座して見ているところです。

父さんは頭に赤い鉢巻をしていて、下半身に赤い具足を着けています。ここまでは良いんです。ここまでは極普通の武士の装備だと思っています。問題は、父さんが上半身に着ている物です。

どこからどう見てもライダースジャケットです。本当にありがとうございます。

おかしいでしょう、ライダーズジャケットって！ 今戦国時代ですよね！？ しかもこれを戦の時に着ているというのが益々僕を混乱させます！ 極め付けには赤いんですよ！？ 全身赤です！ 目立ちまくりです！ 敵に狙ってくれと言ってるようなものです！

「そらそら！ どうしたあ！？ そんなヘツピリ腰でお館様を守るなどとはざくのか、幸村！」

「む、うおおおおお！」

雄叫びをあげて幸村が両手の木槍を振るうけど、父さんが両手に持つ木槍に防がれる。

しかし二人とも良く槍を二本も使えるなあ。槍を二本なんて取扱が難しすぎて上手く使えないと思うんだけど、父さんはそれを軽々と扱っている。父さんが言うには『二槍流』らしい。二本使ってるからってなんでも二丁流みたいにすれば良いと思ってませんか？ 某弓兵の人とかに謝ってほしいです。

「ぐあっ！」

果敢に攻めていた幸村が、両手の木槍を弾かれその場に尻餅をつく。……なんで幸村も普通に二槍を扱えたんでしょう。父さんの血なん

でしょうか……いや真田の血ですかね。ちなみに僕の武器は双剣です。せっかく神様にキリトの双剣も用意してもらったんですからね……ああ、双剣はちゃんと我が真田家の家宝という形で置いてありました。でもまだ使わせてもらえません。まあ、七歳の子供に家宝を使わせるなんて、流石にどうかと思いますよね。

「まだまだよな、幸村。だが以前より腕は上がっている。これからも精進せい！」

「はいっ！ 父上！」

「うむ！ ……さて」

父さんが僕を見てきた。もう目で分かる、『来い』って言ってる。はあ、やりたくないんだけどなあ……。

横に置いていた木刀二本を持ち、構える。

「雪！ 以前よりは持つてくれよ？」

「僕も強くなってるんですから、油断してたら怪我しますよ？」

「うむ！ その意気や良し！ ……往くぞ！」

父さんが放ってきた右の木槍を左の木刀で受ける。右の木刀を父さんの腰に向けて振るが、父さんの左の木槍で受け止められる。僕は

一旦その場を離れる……が、父さんが木槍を振るって来たので、それを受ける。

またこのパターンだ、いつも父さんに攻められまくって僕は反撃出来ずに終わる。

「烈火あ！」

「くっ……！」

父さんが『二槍流』の奥義の一つ（らしい）烈火での怒涛の突きを繰り出してくる。相変わらず僕は決定打を貰わないよう、身を守ることしか出来ない。

……神様に貰った能力の一つのソードアートオンラインの双剣スキル。今まで頑張って使おうと努力してきたがサッパリ使えない。多分家宝になってる双剣じゃないと使えない設定にしたのだろう、あの神様（♪）。

というか今の僕は神様（♪）によって常人の五倍の身体能力になっている……はず。いくらまだ身体が子供とは言っても、手も足も出ないというのはどういうことなんだろうか。あの神様（♪）、身体能力上げ忘れたんじゃないのか。と最初は思ったが、父さんとの稽古を重ねる内に父さんがバケモノだという結論に達した。だって父さん素手で岩を砕けるんですよ？ あれはもう人間じゃないです。

「そりゃあ！」

「ッ！ ……あ」

考え事をしていたら双剣を弾かれ、首元に木槍が突きつけられていた。また僕の負けかあ。いつになったら父さんに一撃入れられるのかなあ。

「雪もまだまだよ！ だが、以前よりは格段に腕をばあ！」

「「あ」」

僕と幸村の呆けた声が重なる。

父さんは何かに吹っ飛ばされて、近くにあつた岩にめり込んだ。
…こんなことが出来るのは。

「……やっぱりお館様ね」

「昌幸よ！ 子供たちに稽古をつけるのも良いだろう！ ただあし！ 久しぶりに帰って来たというのに稽古しかないというのは何事じゃ！」

「ぐ……お、お館様？」

「父親ならっ！ 子供たちと共に笑って過ごせるようなことをして見せんかあ！」

お館様が父さんを殴った拳を握り締めながらクワツという効果音が入るような感じで熱弁を奮っている。それに対し父さんは「し、しかし！」と言いながらお館様に向けて走り出した。

「それがし某には子供との接し方が分かりませぬう！」

「このつ、馬鹿もんがあ！」

「ぶべらあああああ！」

お館様のアップパーカットが父さんの顎にクリーンヒットし、父さんが空の星になった。僕と幸村が星になった父さんを見上げていたら、父さんは息を荒くしながら走って帰って来た。一体どうやって帰って来たんでしょう。

「一緒に鬼ごっこでも！ 何でも良い！ とにかくお前と一緒に遊んであげることが重要なのだ！」

…… お館様。父さんにとっては稽古が僕たちとの精一杯のコミュニケーションだと思うのですが。

しかし父さんはお館様の御言葉に凄く感動したようで、握り拳をプルプル震わせている。そしてクワツと（またか）顔を上げて、お館様に殴りかかった。

「お館様あ！ この昌幸、見事に子供たちと遊んで見せますぞお！」

「その意気だ！ 昌幸い！」

「お館様あ！」

「昌幸い！」

「お館様あ！」

父さんとお館様がお互いの名前を叫びながら殴り合う。

ああ、また『男同士の名前の叫び合い with 殴り合い』が始まっ
てしまいました。これ一回始まると中々終わらないんですね…。

「幸村。向こうで僕と稽古するわよ」

「ですが姉上。父上とお館様を放っておいていいのですか？」

「良いのよ。直に飽きるから」

僕は幸村の手を引いて歩き出す。

幸村を、幸村をあんな風にさせるわけにはいきません。

「昌幸い！」

「お館様あ！」

あつ、あんな風つてあんな感じですよ。

ニンニン忍者 前編です……ニンニン（前書き）

この作品は作者の妄想九割、お館様一割で出来ています。子供時代は完璧な妄想ですのでご注意。

オリキャラ出ます。ご注意を！

最後にアンケートがあります！

ニンニン忍者 前編です……ニンニン

どうも皆さん、こんにちは。真田の紅一点（自称）真田雪です。

今日は父さんが何やら大事な話があるらしいので、武田邸……でいいのかな？の庭に幸村と一緒にいます。縁側には父さんが座っていて、その大事な話とやらを話し始めたのですが……。

「「忍者？」」

「うむ、忍者だ」

僕と幸村の疑問に対して、うむうむと頷いて肯定した父さん。忍者なんてそんな、戦国時代じゃあるまいし……ん？

「戦国時代じゃない……」

「どうしたのですか？ 姉上」

「いえ、何でも無いわ……」

そうですね、戦国時代だから忍者の一人や二人、いてもおかしくないですね……。しかし忍者か……。

「姉上！ 忍者とは一体どのような者たちなのでしょうか？」

幸村が無邪気な笑顔で聞いてきた。かわいい弟にお願いされては仕方ありません、僕の転生前の忍者についての知識を愛しの弟に授けてあげましょう。

「良い？ 忍者と言うのは、二足歩行で歩く四匹の緑色の亀たちのことよ。彼らは刀、サイ、ヌンチャク、棒術を見事に操り、悪を打ち倒すの」

「おおっ！ 忍者とはそのような勇ましき者たちなのでござるか！ 会ってみたいでござる！」

幸村が目を輝かせ興奮している。ふふ、僕もそうでした。ある日たまたまテレビを点けた時にやっていたのを見て、僕は忍者という者を学んだんです。そう、あれは夏の暑い日でした……。

「雪、何を言ってるんだ？ 忍者とは主君のために対立する勢力の情報を集めたり、敵を暗殺したりする者のことだぞ？」

回想を始めようとしたら、父さんが訳が分からんと言ったような顔で訂正してきた。

なんと。この時代にミュータントな亀さんたちはいないようです。雪、ガッカリです。

「何故頂垂れているのだ……？ まあ、良い。佐助！千歳！」

「はっ！ 昌幸様！」

父さんが誰かの名前を呼んだ瞬間、父さんの後ろに人が二人現れた。一人は少年、もう一人は少女だ。少年の方は迷彩柄の忍装束のような服に身を包み、両頬と鼻の頭に刺青のようなものを入れている、僕よりは年上っぽい濃い茶髪の少年。少女の方は、少年と同じ迷彩柄の忍装束のような服を身に着け、濃い茶髪を後ろで纏めている、やっぱり僕より年上っぽい少女。……忍者ですか？

「こやつらは猿飛。我が真田家に代々仕える忍者一族だ。こやつらはまだ見習いだがな。ほれ、お前たち。挨拶せい」

「お二方、お初にお目にかかります。自分は猿飛佐助です」

「私は猿飛千歳です。そこにいる佐助の妹です」

少年の方は佐助、少女の方は千歳と言うらしい……あれ？ というか猿飛佐助って…真田十勇士の、猿飛佐助？猿飛って最初から真田に仕えてましたっけ？ああ、分かりません。こんなことなら歴史を勉強しとけばよかったです……いや、詳しくなくても確実な事実がありましたね。

「おお！ そなたらが忍者か！ 某は真田幸村！ 佐助に千歳であ

つたな？ よろしく頼むぞ！」

「はっ」

「は、はい！ …… 幸村様をこんな間近で見れるなんて…！」

猿飛佐助に妹はいなかったはずです……！ 猿飛千歳なんて聞いたことがありません。ああ！ 何故幸村を見ながら頬を赤く染めてるのですか、千歳！ まさか…… いや、まさかとは思いますが。

「うむ。雪に幸村よ。こやつらはお前たちに仕える者たちだ。家臣と親睦を深めるのも主の務め。遊んで来なさい」

父さんがイイ笑顔でそんなことを言った。多分数日前のお館様とのやり取りを気にしてたんでしょう。自分じゃ上手く僕たちと遊ぶことが出来ないから、同じ年頃の佐助たちと遊ばせようと……。でも父さん。それじゃ結局お館様のお言葉を果たしたことになるんじゃないじゃ…… あ、地響きが。

「昌幸いいいい！」

「お館様！ この昌幸、見事に子供たちと遊んで見せまぐぼおおお
お！？」

突然現れたお館様が父さんを殴って壁に激突させた。お館様はどう

してすぐに現れるんでしょうか、これは謎です。

突然現れたお館様に対して、幸村と佐助は慣れた様子で、千歳はアワワしながら見ています。幸村は稽古の時に毎回見ているから分かるんですが、佐助が慣れているのはどういことでしょうか？千歳は初めて見るみたいですし……。

「僕の言葉を忘れたかあ！ 僕はお前自身が子供たちと過ごせと言ったのだ！ だというのに佐助たちを使うというのは何事じゃあ！」

「で、ですがお館様「問答無用おおお！」げぶらあ！」

父さん死ぬんじゃないでしょうか。お館様の拳に炎が見えます。

ふむ、しかし父さんは僕たちのためと思ってやってくれたことなんでしょう。そういうことならば無碍にするわけにはいきません。それに個人的にも忍者は気になりますしね。

「幸村！ それと佐助に千歳！ ちょっと良いかしら？」

「何でござるか？ 姉上」

「はっ」

「な、何でしょうか？ 雪様」

……さつきから佐助がはっ、しか言ってないんですけど。はっはっ

はっつて繋げると犬みたいです。……いや、どうでもいいんですが。

「これから四人で山に狩りに行くわよ！」

僕がそう言ったら、三人は呆然とした表情で僕を見返してきた。

……僕、何か変なこと言いましたか？

ニンニン忍者 前編です……ニンニン（後書き）

SWORD SUMMITがカッコよすぎて、アニメを無限リピートのボン太郎です。

そして、前書きで言った通りアンケートを。

アンケートの内容は、ヒロイン（誤字にあらず）を誰にするか。です。

一番票が多かった人は、出番も多くなるし、見せ場も増えるという寸法です。

以下、選択肢

- ？真田幸村↓お館様あルート
- ？伊達政宗↓Let's Partyルート
- ？片倉小十郎↓野菜ルート
- ？前田慶次↓恋をしようぜルート
- ？長宗我部元親↓宝探ししようぜルート
- ？毛利元就↓オクラルート
- ？猿飛佐助↓俺様ルート
- ？かすが他女武将↓百合百合ルート
- ？武田信玄&上杉謙信↓何が起きるか分からないよルート
- ？その他↓正直ザビーとか書くの無理でしょルート

という、十個：いえ九個の選択肢の中からお選びください。票が来なかった場合は問答無用で？に行く可能性があります。慶次大好きです。

投票は感想かメッセージでお願いします。

来るかなあ。来なきゃ慶次ルート一直線…あれ、タイトル弟は真田幸村なのに…あれ？

追記 アンケート期間書き忘れました、すいません！

アンケート期間は子供時代が終了するまでです！よろしくお願いします！

ニンニン忍者 後編です……ニンニン（前書き）

筆頭カッコよすぎだろう……（昨日の戦国BASARA弐）

佐助の口調これで合ってますかね？分かりません。

ニンニン忍者 後編です……ニンニン

どうも皆さん、真田の紅一点（自称）真田雪です。そろそろ自称を外しても良いかなと思ってます。

僕たちは今甲斐の山の中に狩りに来ています。ええ、来ているんですが……。

「おおおお！ デカい獲物を狩り！ お館様に褒めてもらってござるううう！」

「幸村様！？ 千歳の背に隠れていてください！ 何が現れるかわかりませんから！」

四人でゆっくり歩いて、ゆっくり話して親睦を深めようと思ったら、早速二人が離脱してしまいました。おかしいですね、まだ山に入ってから十分も経っていないんですが。そして今この場にいるのは僕に佐助の二人だけ。はあ、仕方ありませんね……。

「あの二人を追いかけるわよ」

「はっ」

「……………」

僕はそろそろ怒っても良いと思うんです。……というのは冗談として。

「佐助、無理しなくて良いのよ？ 普通に喋りなさい」

「どういう意味でしょうか？」

「そのままの意味よ。あなた絶対普段そんな喋り方じゃないでしょう？ それにいつまでもそんな堅苦しい喋り方されたら、こっちが参っちゃうわ」

「……はあ、困ったお姫様だ。これでいいですか？」

佐助は大きな溜息を吐いて、態度を崩した。やれば出来るじゃないですか。

「ええ、そっちの方が断然良いわ。なんで最初からそう喋らなかったの？」

「何言ってるんすか、雪様。昌幸様がいたんですよ？ 俺はまだ死にたくないっす」

「……なるほど。もつともな理由ね」

僕たちの前でそんな碎けた喋り方すれば父さんなら『無礼物があ！』

とか言つて二槍で突かれそうですからね。お館様なら別に気にしないんでしょうけど。

「ところで雪様。さつきから気になってたんすけど、どこからその脇差を？」

佐助が僕の両腰に一本ずつ提げてある脇差を指差す。ああ、これですか。

「兵舎にいた兵士に涙目で迫ったら貸してくれたわ。幸村の槍も同様に」

「今頃その兵士、昌幸様にボコボコにされてんじゃないですか？」

「佐助、覚えておきなさい。戦いに犠牲はつきものよ」

「いやこれ戦いじゃないですよね？　というかなんで俺は年下に人生論を教えられなきゃいけないんですか」

これは中々良いツッコミ役が手に入りましたね……年下？

「年上だとは思ってたけど、あなた何歳？」

「俺は十一っすね。千歳は八つですよ」

四つも上ですか。で、千歳は一つ上。幸村とは三つ差、ですが先程の千歳の幸村への熱い視線は……。

「千歳は……幸村に……？」

「おつ、勘が良いっすね？ そうなんすよ、あいつ今日ついに幸村様に会えるからってテンション高くて……どうしたんです、頭抱えて」

くう！ やはり千歳は幸村にホの字というわけですか……！ はっ、しまった！ 今幸村は千歳と二人きり……もしかしたらもしかしているかもしれません！ い、いや、ですが幸村はちよこつと……いえ、大分女が苦手なシャイボーイ。そんなことになるわけは……いえ！ 油断はなりません！ やはり僕が幸村を守らなくては……！

「良し。ちよつと殺^ヤってくるわね」

「誰を！？ ちよつと雪様、勘弁してくだ、さ……」

佐助の声が次第に小さくなっていく。む、どうしたんですかね？ 佐助が見ている方向を向く。そこには二槍を振り回す幸村を引き摺って走る千歳。……何やってるんです、か……？

「……佐助？」

「……………何ですか？」

「あれは……………何かしら？」

ギヤーギヤー叫びながらこちらに向かって走って……………いや、逃げてくる幸村たちの後ろには、右手に金棒を持ち、まるで鬼のような姿をした武田の鎧を着た巨漢の男がいた。

佐助は額に汗を浮かべながら僕の質問に答える。

「あれは甲斐の山中で極秘裏に養成されたっていう鬼兵です！ ですが、そいつ……………暴走してやがる！」

「きゃー！ー！？ あっ、兄さん！ 雪様！ 助けてくださーい！」

「うおおおお！ 千歳よ、離せ！ 某が奴を！」

「駄目ですよ！？ 私たちじゃあんなバケモノに敵う筈ありません！」

……………武田はなんてもん育ててんですか！ というかどうかという育て方をしたらあんなデカさに！？ あんな図体なのに足も速いですし！
って、幸村と千歳が追いつかれて……………！？

「やばいー！」

「ちよつ！？ 雪様！？」

咄嗟に幸村たちを庇う位置に立ち、鬼兵が振り下ろした金棒を両手の脇差で受ける。

お、重い！ 滅茶苦茶重いです！

「姉上！？」

「大丈夫、よ……！ 千歳！ あいつの、目を狙いなさい！ あそこなら、鎧も何も無い！」

「は、はい！ ……ていつ！」

千歳は懷から十字架のような形状の、先が尖った剣を……つて、それ確かステイレットつてやつですよ！？ なんで戦国時代に！？

僕の疑問をスルーしながら放たれたステイレットは、見事に鬼兵の右目に刺さった。

鬼兵は少しよろめいたが、すぐに持ち直す。目を潰されても動けるつて、バケモノですか！

「はっ！」

佐助が放った大型の手裏剣が鬼兵の左目に刺さる。おお、佐助！ ナイスです！

両目を失ったことで怯んだ鬼兵の金棒を弾く。重かった！ すつこく重かった！

「姉上え！ うおおおお！」

「幸村！？」

すぐさま態勢を立て直した鬼兵が放った金棒を幸村が二槍で受ける。助かりました、幸村！

……さて、あとはこいつをどうやって倒すかですけど。

「今なら、出来る！」

鬼兵の胸に向けて右の脇差を振るい、左の脇差を振るい、右を振るい、左を振るい、右、左、右――！
十五撃目を振るった瞬間、右の脇差が折れた。けど、次で！

「最後、よ！」

僕が最後の左の脇差での十六撃目が鬼兵を切り裂いた。瞬間、僕が握っていた左の脇差が折れた。荒い息を整えながら全てを叩きこんだ鬼兵を見る。鬼兵はゆっくりグラリと後ろに傾き、ドシンと大きな音をたてて倒れた。ふう、ソードアートオンラインの双剣スキル

……いえ、二刀流スキルの上位剣技。

「スターバースト・ストリーム。連続十六回攻撃……初めて出来たわね」

「お、おおおおお！ 姉上！ 流石でござるうううう！」

「ゆ、雪様凄い！」

「こりゃあたまげた。鬼兵を脇差でブツ倒しちゃうなん、て……？」

僕たちが喜びを分かち合っていると、佐助が僕たちの後ろを見て呆然としている。そしてみるみる顔色が悪く……何ですか、まさか鬼兵が立ち上がったなんてこと、は……。

後ろを見たらなんか赤いオーラ出しながら立ち上がっている鬼兵がいました。……ふう。

「佐助。短い間だったけど、楽しかったわ」

「雪様あ！？ 俺を捨て駒にする気ですか！？」

「捨て駒じゃないわよ。ほら『ここは俺に任せて先に行ってください！』って言えば生き残れる可能性も上がるから」

「そんなんで生き残れるのは昌幸様だけです！ 俺には無理っすよ！」

「むう……皆の者！ ここは某に任せて、先に行けえ！」

「幸村様！？ いや幸村様が言う必要は……って、キャー……！」

鬼兵が僕たちに向けて金棒を振り下ろす。ああ！ ゴチャゴチャ言ってる間に逃げときゃよかったです！

「でええええい！」

炎を纏った拳で鬼兵がぶっ飛んだ！ あ、あれは！ あの戦場で真っ先に狙われそうな赤いライダーズジャケットは……！

「父さん！」

「まったく……。どこに行ったのかと思ったらこんなところまで。俺が来なければ危ないところだったぞ？」

く……！ 普段馬鹿な父さんがまともなこと言ってる！ 反論出来ません！

「だ、だけど父さんが遊んで来いと言ったのよ？　僕たちはそれに忠実に従っただけよ」

「……………そういえば、そうか」

あ、反論出来ちゃいました。やっぱり父さんは馬鹿みたいです。

「とにかく戻るぞ！　夕餉の時間だ！」

「まだ昼時よ？」

「……よし、雪。このあと俺と稽古だな」

なんですと……………！？

「姉上！　某も共にやりまするぞ！」

「幸村様がおやりになるなら、私も……………！」

「俺は眠いんで。雪様、頑張ってくださいねえ」

「なっ、佐助！　あなたも一緒にやるわよ！　絶対！」

「嫌ですよ！　大体俺は忍者「やるわよね？」……………仕方ないっすね、今回だけっすよ？」

折れた脇差を首元に突きつけたら言うこと聞いてくれました。ふふ、
僕は良い部下？を持ったものです。

ニンニン忍者 後編です……ニンニン（後書き）

鬼兵は強いと思うんだ。あの金棒に何回吹っ飛ばされたか（ゲームの戦国BASARA）

只今アンケート中。選択肢置いときます。

- ? 真田幸村↓お館様あルート 0
- ? 伊達政宗↓Let's Partyルート 4
- ? 片倉小十郎↓野菜ルート 0
- ? 前田慶次↓恋をしようぜルート 1
- ? 長宗我部元親↓宝探ししようぜルート 0
- ? 毛利元就↓オクラルート 0
- ? 猿飛佐助↓俺様ルート 0
- ? かすが他女武将↓百合百合ルート 1
- ? 武田信玄&上杉謙信↓何が起きるか分からないよルート 1

横のは現在の票数です。筆頭が大幅リード中。筆頭ヤバイです。

ニンニン忍者……あっ、終わってましたっけ（前書き）

戦国BASARA弐の一話と二話をリピートして見てたら、秀吉が
ちっちゃくなってることに気づいたボン太郎です。

今回はほのぼのです。当社比三倍（？）のほのぼのです。

ニンニン忍者……あつ、終わってましたっけ

どうも皆さん。真田の紅一点、真田雪です。

ついに（自称）を外してしまいました。でも問題ないですよ、テヘツ。

……何か上から笑いを噛み殺すような声が聞こえたんですけど。まあ、良いです。今日の僕は優しいんです。お仕置きは明日にしておいてあげます。

「ふう……お茶が美味しいわね」

今僕は縁側で昼餉のあとの息抜きのお茶を飲んでいます。松岡。造並に熱い父さんが仕事で出掛けたので、武田邸は静かで過ごしやすい空間となっていて、とてもお茶が美味しいです。

『どうしたあ！ 気合いだ、気合いいいいい！ 気合いで立たんかあ！』

『『うおおおお！ 気合いいいいい！』』

……訂正。とても暑苦しい空間でした。というかもう夏だということにお館様に兵士みんなは何故あんなに暑苦し……元気なんですよ、見てるこっちが暑く……不思議です。

「姉上っ！」

僕が武田の神秘について考えていると、幸村が縁側を走って僕の元にやって来た。

一体どうしたんでしょう……なんで二槍持つてるんでしょう、あの子。まさかとは思いますがこの暑い中稽古しようなんて言い出すんじゃない……。

「姉上！ 稽古しましょうぞー！」

まさかのまさかでした。

……こんな暑い中稽古なんてしたくないです。どうにかして回避しなくては……そうです。

「幸村？ いつも僕とばかり稽古しては、二刀使いに対しては上手く立ち回れるだろうけど、他の武器を使う者と出会ったらどうするの？ どう攻撃が来るか分からないでしょ？」

秘技・口八丁。これで乗り切るしかありません。

「む。た、確かにそうでござるな……ですが、姉上の他に相手がいません」

「兵士のみんながいるじゃない」

「先程まで相手をしてもらっていたのですが、もう皆倒れてしまっただござる」

なんということでしょう。武田軍の精鋭の兵士たちが、僕の可愛いかわいい弟にボッコボコにされたらしいです。流石僕の弟……いやいやちよつと待ちましようよ。

「幸村？　ちなみに何人の兵士と稽古を？」

「十人でござる」

なんという（ry

この子は兵士十人と稽古して全員倒してきたというのに、疲れた様子を欠片も見せていません。幸村、恐ろしい子！……いや、そうじゃなくて。

不味いですね、このままでは幸村と稽古することになってしまいます。別に嫌というわけではありませんが、くつろぎムードに入った今ではやる気が起きません。さて、どうしましようか。木刀を取りに行くと言ってそのまま逃げましようか……？

「ああ、姉上！　姉上の二刀なら持って来てありますぞ」

退路を封じられた！……くっ、どうすれば……そうです、屋根の上にいる俺様忍者に相手をさせれば……！

「……と、見せかけて縁側の下にいる千歳。出番よ」

「ええっ！？　なんでバレたんですかぁ！？」

驚きながら縁側の下からズルズル這い出て来た千歳。

いや、幸村が来てからずっと下からハアハア聞こえたんで。というか人の弟で何想像してたんですか。

「まあ、とにかく頑張りなさい」

「無理です！　いくら幸村様が大好きで大好きでしようがない私も、幸村様と稽古なんて無理です！」

ちい、往生際が悪い。

「……もし抱きついたりしても稽古だからで済ませられるわよ」

「不肖、猿飛千歳！　やらせて頂きます！」

先が丸い刺さらない仕様のステイレット（何だそれ）を取り出し、幸村に向かって駆け出していった千歳。ふう、良い仕事しました…

…あ、言い忘れてました。

「幸村は見ての通り二槍使いだから、抱きつく前に吹っ飛ばされるだろうけど……頑張りなさいね？」

「……ゆ、雪様の人でなし……！」

「むう、千歳！ 避けてばかりでは稽古にならんぞ！」

幸村が振るう二槍から庭中を走り回って逃げる千歳。
よし、上手く回避することが出来ました……ああ、もうお茶が無いですね。

「俺様忍者。お茶」

「何すか？ その呼び方。あと俺は侍従じゃないっすよ」

「と、文句を言いつつも素直に出て来る辺り……僕は本当に良い家臣を持ったわ」

「本当にそう思ってますかねえ……よっこらせ」

屋根の上から降りてきた佐助はブツクサ文句を言いながらも僕の横に座り、お茶を入れる。

何気に自分の分も用意している辺り、侮れません。

「しかし千歳は頑張るわね……ズズッ、美味いわ。やるわね、佐助」
「あれは頑張るといっか、死に物狂いといっか……ズズッ、そりや
どうも」

二人でお茶を飲みながら千歳の勇姿を見守る。それにしても……。

「平和ね」

目の前で幸村と千歳が遊ぶ（誤字にあらず）姿、稽古場の辺りから
聞こえてくる気合いの声。
確かに騒がしいですけど、これが武田の日常です。

「こんな日々が、何時までも続くと良いわね」

「そっすね……」

この何てことのない、いつも通りの日常が。

「あつ、佐助。お仕置きは何が良いかしら？」

「オチつきましたよね!？」

ニンニン忍者……あつ、終わってましたっけ（後書き）

雑賀孫市は出した方が良かったのだろうか。でもPSS3持っていないから戦国BASARA3やれないんだよねあ。

アンケート続行中！

只今アンケート中。選択肢置いときます。

？真田幸村	0
？伊達政宗	5
？片倉小十郎	0
？前田慶次	1
？長宗我部元親	0
？毛利元就	0
？猿飛佐助	0
？かすが他女武将	1
？武田信玄&上杉謙信	0

筆頭圧倒的人気。確かにアニメの筆頭はかつこよかった。あの回転斬り。そしてWAR DANCE。筆頭はかつこよ過ぎると思うんで（ry

兄は猿飛佐助（前書き）

サブタイ通りの、あの人が主役です。ネタ多し！注意！……いや、この小説自体がネタみたいなモノですけど。

兄は猿飛佐助

どうも皆さんこんにちわ。幸村様を護る剣、猿飛千歳です。

……え？ 誰だつて？ 私ですよ、猿飛佐助の妹の猿飛千歳ですよ！
……これでも分らないんですか！？ 私どれだけ印象薄いんですか！ あれです、幸村様Loveの猿飛千歳ですよ！

ああ……つてやっと分かったんですか！ 遅すぎです！ というか幸村様Loveで分かるなんて相当ですよね！？

はあ……仕方ないですね。こうなったら皆さんが私のことを嫌でも忘れられないようになる衝撃の事実を教えてあげます！

え……つて、そこ！ 嫌そうな顔しない！ 聞いたらビックリしますから！ すごくビックリしますから！ ようし、それじゃあ言いますよー！

実は私、転生者なんです！

……あれ？ なんか物凄く反応が薄いような気が……なんですか、その頭がアレな子を見ちゃったみたいな目をして！ 本当ですよ、本当なんですからね！？ 神様が……間違えた、神様（ゝ）がミスして私を殺しちゃったらしくて、戦国BASARAの世界に転生さ

せてやるって言うから喜んで……ゴホン、仕方なく！ 転生してあげたんです。

なんか生き残れるように好きな能力をやるって言われたけど、どうせB A S A R Aだから強さは勝手にチートになるかなーって思ったから、『幸村の近くに生まれたい！』って言ったら……何故か猿飛佐助の妹に生まれちゃったんですよー。アハ、アハハ、アハハー。

とりあえずもし会えたらあの神様（♪）、二度と♪が言えないようにしてやる。

……… すいません、取り乱しました。それにしても転生してからは大変でしたよ、毎日毎日修行して修行して。とても大変でしたけど、幸村様に会うことを心の支えにして頑張ってきました。え？ なんて様付けかって？ そりゃー色々叩きこまれましたからね。様付けを違和感無く出来るようになったちゃいました！ 転生前は幸村幸村言ってたのが嘘みたいですよ。

そうそう、そういえば神様（♪）が言うには私の他に転生者が二人いるらしいです。と言っても会ってどうこうするつもりは無いですし、それ以前に転生者かどうか見分けつけられないですしね。それに私、今の生活を気に入ってますしね。幸村様がいて、雪様がいて、兄さんがいて、お館様がいて……まあ、雪様の相手をするのはちょっと、いや少し疲れますけど、楽しいですしね。

「千歳、どこ？ 昼餉の時間よ」

噂をすればなんとやら。雪様が来ました。雪様は綺麗な茶髪を腰まで伸ばし、七歳とは思えない程大人びていて、とても綺麗なお方です。まあ、先程も言った通り雪様の相手は疲れますけど、良い人です。良い人ですよ？

「千歳？ ここにいたのね。ほら、幸村たちが待つてるんだから、さっさと行くわよ」

「はい！ すいません、今行きます！」

雪様の横に並んで縁側と一緒に歩く。しかし最初雪様を見た時はビツクリしましたよ。なんせ戦国BASARAに真田雪なんてキャラはいませんでしたからね。まあ、それを言うなら私もイレギュラーなんですがね！ アハハハハ……イレギュラー？

私は横を歩く雪様を見つめる。……あれ？ あっれー？

「ん？ どうしたのよ、そんなに見つめて。僕の顔に何か付いてるの？」

あ、あ、あ……。

「ああああああ！」

「……だから何よ？」

あのあと、私は何とかあの場を誤魔化し、昼餉も平静を保つので精一杯でしたが乗り切りました。
そして今は私、幸村様、雪様、兄さんの四人でいるんですが……。

「それじゃあ幸村。次はこれを叫んでみて？」

「えーっと……一緒にっこうぜえ！ 君島ああああ……これ
で良いでござるか？」

「ええ、もう完璧よ。完璧過ぎるわ」

雪様、完璧な転生者なんですけど！ 幸村様で遊んでるんですけど
！ まずいですよ、なまじ知ってるぶん、色々ときついです！

「次、佐助ね。何が良いかしら……」

「あのー、雪様？ 何なんすか？これ」

「気にしたら駄目よ。それじゃあ佐助は……これ叫んで」

「はあ……月光蝶でああああある！……何故か口が勝手に……？」

ああ、佐助さんが御大将に！　キャラぶっ壊しです！　雪様があの意味外道です！

雪様は悩む兄さんを見て、満面の笑みを浮かべ、

「……ふふつ、楽し♪」

……可愛い……はっ！？

くつ、卑怯です、雪様！　これがギャップ萌えってやつですか！
……いや待て落ち着け、千歳！　私は幸村様一筋、そっちの気はありません！

「さて、と……」

キヤー！？　雪様が私を見たー！　すっごい見てる、穴が空くぐらい見てきてる！　狙われてるー！？

「それじゃあ千歳は……コレね」

「嘘だっ！……はっ！？　口が勝手に！」

なんということでしょう。どうやら雪様には私の声は、某嘘だっ！の人や某だんご大家族の人や某パンツめくれえの中の人の声に聞こえるみたいです……自分じゃ分からない新事実。

し、しかしどうしましょう。雪様に私も転生者だと教えた方が良いでしょうか？　雪様もあの神様（♪）に転生させられたんでしょ、お互い転生者仲間（？）ってことが分かってた方が……。

「千歳？」

「ひゃい！？　な、なんですか？　雪様？」

「いえ、さつきからボツーとしてるみたいだから……どうしたの？　佐助にお尻でも触られた？」

「雪様！？　何言ってるすか！　俺そんなことしてないっすよ！」

「佐助え！　お主、自らの妹にそんなことをしておったか！　破廉恥でござるううう！」

「旦那あ！？　大声で変なこと叫ばないでくれる！？」

幸村様がどこからともなく二槍を取り出して、兄さんに襲いかかる。逃げる兄さんを雪様が笑いながら見守る……そっか。

私と雪様は転生したんだ。新しい人生を歩んでいるんだ。なのに転生前のことを持ち出すなんて、相当無粋な真似かもしれない。だって雪様、あんなに楽しそうに笑ってるんだもん。だったら私は『猿飛千歳』として、一緒に笑って過ごそう。私たちは『今』を生きているんだから。

「ああ、もうあんな遠くまで行っちゃって……仕方無いわね、千歳！二人を追いかけ……なんで笑ってるのよ？」

「いーえ？ なんでもありません」

「気になるじゃない、どうしたのよ？」

せつかくの二度目の人生……ここでしかやれないことをしないと損ですよね！

「人生って、深いですよね！」

「……………そう。後で医者に見てもらいましょうね」

良いこと言っただと思ったのに！？

兄は猿飛佐助（後書き）

あと一人の転生者は子供時代には出ません。子供時代はあと五話ぐらいかな？

只今ヒロイン（誤字にあらず）アンケート中。選択肢置いときます。

？真田幸村 0

？伊達政宗 5

？片倉小十郎 0

？前田慶次 1

？長宗我部元親 0

？毛利元就 0

？猿飛佐助 0

？かすが他女武将 1

？武田信玄&上杉謙信 1

アンケート期間は子供時代が終わるまでです。投票待ってます！

シャイニングゴルドスターライトイーグルアイブレイカー！（前書き）

関ヶ原なのに織田信長って、なんやねん（戦国BASARA3）

シャイニングゴールドスターライトイーグルアイブレイカー！

どうも皆さんこんにちわ。真田の紅一点、真田雪です。

十歳になりました。月日が流れるのって早いですよね（遠い目）。

まあ、十歳になったとしても生活が大きく変わるわけではありません。最近では幸村と稽古したり、千歳をイジったり……ゴホン、千歳と遊んだり、佐助が入れたお茶を飲んだり、幸村と遊んだり、千歳をイジったりしてます……しまった。

と、今言った通り平和に過ごしています。平和過ぎて本当にもう……目の前の現実から目を逸らしたいです。

「……幸村？ その鷹、どこで拾って来たの？」

「拾って来たんじゃないでござる。稽古してたらいつの間にかいたでござる」

そう言っただけ幸村は自身の頭の上に陣取る鷹を撫でる。鷹は気持ちよさそうに目をすぼめ……ずに、鋭い眼光で僕を射抜いてくる。今にも僕に襲いかかってきそうなんですけど。

幸村はどうやらテンションが上がっているのか、少し興奮しながら話しかけてくる。

「それにしても鷹というのは気性の荒い鳥だと聞いておりましたが、実際接して見るとそうでもありません！ 逆にかわいいぐらいでござる！」

「……ええ、そうね」

「む？ どうかしたのでござるか？ 少し元気が無いように見えますが……」

「だ、大丈夫よ。なんでもないから」

くう！ あの鷹野郎、未だに僕をイーグルアイ（カツコ良く言ってみた）で睨んできます！ おそらく幸村が余所見でもした瞬間、僕に襲いかかる気でしょう。純真無垢な幸村を利用するとは……確かに戦法としては有効でしょうが、人としてどうなんですか、鷹！ ……人じゃなかったですね、こんちくしょう！

おそらく幸村はただ鷹を僕に見せたいという純粋な気持ちなんでしょう。その気持ちを無碍にして、その鷹どこかにやって？ とは言えません。これは真田雪史上二度目の危機です（一度目は鬼兵）！ ……仕方ないですね、こうなったら。

「千歳！」

「はい！ なんですか、雪様……ひう！？」

シャイニングイーグルアイが千歳を射抜く！

千歳の防御力がぐくつと下がった！

千歳は涙目になった！千歳は逃げ出した！

僕は千歳の右腕を掴んで逃げるのを止めた！

よし、鷹の攻撃対象が増えました。これで少しは生き残れる確率が……千歳が泣き出しそうな目で僕を見ている！ とりあえず見つめ返してみた。

《ゆ、ゆゆゆ雪様！ なんなんですか、あれえ！？》

《鷹よ》

《そんなの見れば分かりますよう！》

ちなみにこの会話はアイコンタクト。何故出来たのか自分でも分かりません。

《す、凄く怖いんですけど帰って良いですか！？ 手を離してくださいー！》

《駄目よ。I K E N I……仲間がいなきゃこの状況を脱することは出来ないわ》

《生贄って言いかけましたよね！？》

まったく何を言ってるんでしょうか、この子は。僕が千歳を生贄に
なんてするはず無いじゃないですか。

《あなたになるのはIKENIEよ》

《同じじゃないですか!?!》

《何言ってるの。あなたが言ってるのは生贄、僕が言ってるのはI
KENIEよ》

《だ、だから……ああ、もう!》

むう! スティレット投げて来ました! 武器は卑怯ですよ、千歳!

「旦那、お館様が呼んでるよ……って、雪様と千歳、どうしたの?」

「佐助。いや長い間見つめ合ってたと思ったら急に暴れ出して……
それで? 何の用だ?」

「ああ、そうそう。お館様が稽古の時間じゃー! だって。早いと
こ行った方が良いよ? それじゃ」

「おお、済まぬな佐助! さて、では行くか……と、お前がいたな。
流石に稽古に連れていくわけには……そうでござる! 姉上!」

くっ、千歳め! 一体何本持ってるんですか! 今僕木刀持ってな

いんですから避けることしか出来ないんですよ!?

「姉上、姉上! 疾風丸はここに置いておきますので、某が稽古中
任せてもよろしいでござるか?」

「よっ! とっ……わ、かった、わ! 任せな、さい! はっ!」

「おお、流石姉上! では頼みましたぞ! 千歳も頼んだぞ!」

「はいっ! ……って、何を頼んだって……う」

先程まで嵐のように飛んで来ていたステイレットが止んだ。
ふう、やっとですか。死ぬかと思いました……千歳はどうしたんで
しょう、石みたいに固まって。

「どうしたのよ、千歳? 何か変なモノで、も……」

千歳が見ている方向を見て僕も固まる。

僕らの視線の先には、先程まで幸村の頭の上にいた鷹。
な、何故やつが、ここに……!? というか幸村は!?

僕たちが困惑していると、鷹はその鋭き眼光……名付けるならば、
そう。

——シャイニングゴールドスターライトイーグルアイブレイカー!

「ゆ、雪様？ 流石にそれはネーミングセンスが有るとか無いとかの問題じゃ……」

「このままでは、僕たちは奴に殺される！ どうかしてこの場を切り抜けなければ！」

「あ、無視ですか」

鷹め……！ 僕たちをそう簡単に殺せると思わないことですね！

「……続くんですか、これ」

シャイニングゴールドスターライトイーグルアイブレイカー！（後書き）

これマジで続くの？と思ったそこのあなた。続きます。

アンケート続行中！選択肢置いときます。

？真田幸村	0
？伊達政宗	5
？片倉小十郎	0
？前田慶次	1
？長宗我部元親	0
？毛利元就	0
？猿飛佐助	0
？かすが他女武将	1
？武田信玄&上杉謙信	1

なんか筆頭で決まりっぽいけど、もしかしたら長宗我部ファンが一気に投票してくるかもしれないから置いておきます。四国の鬼神たあ俺のことだあ！

この世界に神はいない……いるのは_レだけ（前書き）

誰か僕に戦国BASARA3がやれる環境をください！↑PSS3持
ってない

この世界に神はいない……いるのは、じだけ

どうも皆さんこんにちわ。真田の紅一点、真田雪です。

とりあえず、今現在僕は……。

「カー」

「ひい！？ 鳴きました！ 鳴きましたよ、雪様！？」

「おつ、落ち着きなさい、千歳！ ただ鳴いただけじゃない！ とうか鷹ってあんな鳴き声！？」

命の危機に瀕しています。

簡単に状況を説明すると、幸村が鷹を連れて来て、その鷹が僕と千歳にシャイニングゴッドスチャー……イーグルアイで、僕たちはそれにガクブルってことです。もつと簡単に説明するならなんか舌が長いモンスターにずっと舐めまわしされて、半永久的に動けないって感じです。

「な、なんで幸村はこのポ。ポを置いてったの！？」

「雪様！ こいつはもうピジ。ンだと思えます！」

「それを言うならもうピジ。ットで良い「カー」「ひい！」だから

千歳！ あれ鷹の鳴き声じゃないでしょう!？」

「ゆ、雪様だつて足震えて「カー」ひううう!？」

こ、この鷹野郎！ いえ、最早鷹かどうかなんてどうでも良いです！

「このままでは奴の鋭いくちばしでの一撃——ギガくちばしブレイクで殺されてしまうわ！ どうかしてこの状況を脱出しなければ!」

「どこかで頭でも打ったんですか!？ 今日の雪様、色々とおかしくないですか!？」

「失礼ね！ パニックになつてるだけよ!」

「カー……あ、やっと喋れるようになりました！ あのーお二人とも?」

「うるさいわね！ 少し黙つてなさい!」

「あ、はい……おっと、忘れた」

突然聞こえた声を黙らせる。くっ……まさか鷹ごときにここまで苦しめられることになるなんて！ こうなったら……! !

「千歳、覚悟を決めなさい。今日の夕餉は、焼き鳥よ……!」

「ええ！？ ちょっと待ってくださいよ、雪さん！ 私なんかを食べても美味しくないですよ？」

「黙りなさい。たとえ目を抉られようとも、僕は焼き鳥を食べると決めたのよ……」って、何言ってるの、千歳？ あなたを食べるわけないでしょう？」

まったく千歳は。混乱しすぎて元々アレな頭が更にアレになったんですか？ まあ、仕方ないですよ。アレなものはアレですからね。それはそうとアレなアレはアレで……。

「アレアレうるさいですよ！？」　　というか私は何も喋っていませんよ！」

「え？　じゃあ誰が喋ったって言うのよ？　今この場には僕とあなたの二人しかいないじゃない」

「……ゆ、幽霊、とか？」

「！」

ハ、ハハハ。何を言ってるんですか、千歳は。ゆ、ゆゆゆ幽霊なんていうわけじゃないですか。

「で、でも幽霊以外にそんなこと出来るモノなんて……」

「ばつ、馬鹿じゃないの？ ゆ、幽霊なんているわけじゃない！」

「そうです、幽霊なんかいません！ 私が言っんですから間違いないです」

「ほら、鷹だつてそう言つて……………」

……………鷹？

よし、少し落ち着きましょう僕。僕は今誰と話していた？ そんなの千歳しかいません、二人しかいないんですから。では、さっき話しかけてきましたのは誰？ 千歳が幽霊かもと言つて、僕が幽霊なんているわけないと返して、そして鷹が……………いやいや、そこがおかしいんですよ。鷹が喋るわけありませんからね、あー、やっぱりちょっと体調が悪いんですかね？ これは少し休んだ方が良くもしません。

「じゃあ、千歳。あとは任せたわよ」

「待つて下さい」

僕は逃げ出した！

しかし千歳に回り込まれてしまった！ そして腕を掴まれた！

くっ、流石は忍者！ 恐るべきスピードです！ ですが僕だつて！

「神様（♪）に身体能力を五倍にもらった身！ この程度の拘束破れないと思ったか！」

「あ、そうそう！ 雪さんの身体能力は家宝の双剣持つてる時じゃないと上がりませんからね？」

「あ、そうなの……♪は？」

「♪」

……ふう、まさか。とは思いましたが、ええ。本当に……まさか。

僕は鷹の首を右手で掴む。鷹がグエツとか言ったけど無視です。

「なんでここにいるの？ 神様（♪）……！」

「わ、わお。中々シリアスっぽい台詞ですけど、後ろに付けた（♪）のせいでシリアスがぶっ壊されてますね？ ♪」

「そんなにシリアスがお好みならまずは自分が♪を外す努力をなささい……で？ 僕は何故ここにいいのか、と聞いたのよ？」

「それはですね、CMのあと……分かりました喋りますから両手で首を締めるのは勘弁してください……♪」

軽く死にかけているというのに、を忘れないという根性だけは認めてやっても良いかもしれません。というか神様って死ぬんですかね？
……間違えた、神様（♪）。

「えつとですね？ 私が転生させた三人の内、二人がたまたまお互いの近くに転生しちゃったみたいで、変なイザコザとか起こしてないかな」と思っで心配で見に来たんですけど……心配なかったみたいです！ 二人とも、とても仲が良さそうですし♪」

「ちょ、ちよつと！ 千歳に聞こえたらまずいんじゃないの？」

僕は小声で鷹……神様（♪）に小声で話しかける。普通転生者だつてこととかは隠すもんじゃないの！？

「あれ？ 雪さん、気付いてなかったんですか？ 千歳さんは気付いてたみたいですけど？」

「は？」

何を馬鹿なことを言ってるんでしょう。千歳が転生者なわけ……なんか顔背けてるんですけど。

「……千歳？ あなた、本当に……？」

「……はい。転生者です。実は三年前から気付いてました」

「とうかさつきからポ。ポやらピジ。ンやら色々言ってたのに気付かなかったんですね？」

な、なんてことでしょう。まさか僕と同じ転生者がこんなに身近にいるなんて……。

「まあ、今はそんなことより焼き鳥よね。千歳。僕がこいつ押さえてる間にこいつの息の根止めてくれない？」

「分かりました！ あっ、私ナンコツ食べたいんですけど良いですか？」

「あれ？ そんな軽く流して良いんですか？ 凄く重要なことがサラッと流された気がしたんですけど……あ、ちよつと待って下さい。さつきも言いましたが私を食べても美味しくないですよ？」

焼き鳥といっても様々な種類があります。

皮、ハツ、レバー、ネギま……間違えた、葱間、砂肝、ナンコツ……さて、どれが良いですかね？

「え？ あのー本当に転生云々はスルーなんですか？ 焼き鳥のメニュー考えることの方が重要なんですか？ あれー？」

意味が分からないといった風な感じで首を傾げる神様（♪）in鷹。

……何を言ってるんでしょう。

「別に転生者だと知ったところで関係が変わるわけないわ。僕はみんなで普段通り仲良く過ごせればいいんだからね」

「ゆ、雪様！ 私と同じことを……感激しました！ よーし！ 気合入れて捌いちゃいましょう！」

「ええ、そうね。やりましょう」

僕が神様（♪）in鷹の翼を押さえ、千歳がステイレットを振りかぶる。

ふふふ、今日の夕餉は豪華になりそうね……！

「ちょ、ちょっと本気で待って下さい！ ステイレットって刺突とかが主な使用方法であって、捌くとかは出来ないと思うんですが！？」

「「は？」」

「♪……じゃなくて！ 嫌ー！ 神様が殺されるー！」

傍目から見ると鷹を人間二人が襲ってる風に見えるんでしょうか。まあ、どうせ見ている人なんていないんですから問題は無いんですけどね！ あーっはっはっは！

「疾風丸！ 元気にしていたか……？」

「「「あ」「」」

幸村^{飼主}がログインされました。

「……姉上？ 千歳？」

「ゆ、幸村？ これには深いわけがあつて、ね？」

「そ、そうです、幸村様！ これには海よりも深いわけが……！」

「意地があんだよ……男の子にはなあ！」

「「ひい！？」「」

ゆ、幸村が怒りのあまり右腕が兵器のあの人に！？ 前に真似させたのがいけなかったんでしょうか！？

「随分自由に楽しんでるんですね、雪さん。……まあ、でも楽しく過ごしてるんなら、よかったです」

「きつ、綺麗に締めたわね！？ ちょ、ちょっと幸村！ その二槍、刃が付いて……キヤー！？」

結局僕と千歳の夕餉は抜きになりました。
あの神様（ゝ）はいずれ締め食べようようと思っています。まる。

この世界に神はいない……いるのは、[♪]だけ（後書き）

なんか幸村たちが全然出ない話になっちゃいましたね……というわけで、次回は幸村視点の一日を書いてみようと思います。幸村好きー？ 集まれー！……あ、ウザいですが、そうですか。

アンケート続行中！ 選択肢置いときます！

？ 真田幸村	0
？ 伊達政宗	5
？ 片倉小十郎	1
？ 前田慶次	1
？ 長宗我部元親	1
？ 毛利元就	0
？ 猿飛佐助	0
？ かすが他女武将	1
？ 武田信玄 & 上杉謙信	1

アンケートは子供時代が終わるまでです。子供時代はあと三・四話かな？

あ、アンケートが一番多かった武将が出番が増えると言いましたが、ちゃんと他の武将も出番はありますのでご安心を。ザビーとかは一瞬でしょうけど。

姉は真田雪（前書き）

宣言通り今回は幸村視点。滾れえ。

姉は真田雪

どうも皆様。真田源次郎幸村であります。

……と、某は^{それがし}一体誰に対して話しているのでござろうか。何故かうしないといけない気がしたからしたのでござるが、うーむ、これが以前姉上が言っていた『気にしたら負け』と言っやつなのだろうか。しかし何故気にしたら負けなのだろう？ 何度聞いても姉上は教えてくれないし、千歳は笑って誤魔化すし、佐助に聞いた時など『今の旦那の状態こそ気にしたら負けって状態なんじゃない？』と言われ、思わず納得してしまったが……結局『気にしたら負け』がどういう意味なのかは分からずじまい。

むう、やはり考え事は苦手だ。『気にしたら負け』については考えないことにしよう。気にしたら負けらしいし……む？ だとしたら某はもう何回負けているんだ？ いかん、頭が痛くなってきた。

「あら、幸村。どうしたの？」

稽古場で稽古をしてきた帰りなのだろう、某の自慢の姉——真田雪……姉上が手拭いで顔の汗を拭きながら歩いて来た。む、むう。姉上は優しいからもし某が頭が痛いなどと言ったら武田の兵や侍従たちを全員巻き込むほどの大事にしかねない。ここはどうにかして誤魔化せねば！

「いや、なんでもないのでござるよ。姉上こそどうしたのですか？」

「ああ、僕は稽古帰り……ん？ 幸村、どこか具合でも悪いの？」

そう言つて姉上は某の額に手を当てる。

ば、馬鹿な！ 何故感づかれたのだ！？ 欠片も具合が悪い様子は出していなかったはずなのに……！

「うーん。熱とかは無いみたいだから、風邪ではないと思うけど……
…やっぱり心配ね」

ま、まずい！ 姉上がやっぱり心配ね、と言つたあとは必ず周りの侍従たちを巻き込んで大事にする！ ど、どうにかして回避せねば……！

「ここはみんなで「雪様っ！」……千歳？ どうしたの？」

千歳が血相を変えて現れた。随分慌てているみたいだが……どうかしたのか？

「神様（ゝ）……じゃない、疾風丸がまた森に……！」

「なんですって！？ あのゝ……屋敷の中でジツとしてるって言ったのに！ 幸村、具合が悪いなら部屋で寝てなさい！ 僕はあのバ

神様（♪）……じゃない、疾風丸を捕まえてくるから！」

そう言つて姉上は走り去つていった。

……なんとか助かったか……つと、もしや千歳？

某の視線に気付いた千歳は、親指を立てて笑つた。

おお、流石千歳！ 姉上の扱いはお手の物でござるな！

「いや、しかし助かつたぞ。あのままでは大変なことになりそうだったからな」

「お役に立てて光栄です。まあ、疾風丸が森に行つたつてのは本当なんですけどね……コホン。しかし『あの時』みたいにならなくて良かったですね」

「うむ」

千歳が言つた『あの時』……以前某が庭を歩いている時に蚊に刺されたことがあつた。

それを見た姉上は武田の兵や侍従たち、更にはお館様と一緒に屋敷中……いや、甲斐中の蚊を駆逐した。

あの時ばかりは背筋が凍つた……。まさかたつた一日で甲斐中の蚊が全滅するなんて。

だが逆に某は武田は天下を取れるとも確信した。やはり武田の騎馬隊は日本一だ。うむうむ。

「しかし千歳には世話になってばかりだな」

「何を言ってるんですか、幸村様。主のお役に立つのが家臣の務め。当たり前のことです」

「いや、主と家臣という関係を抜きにしても、千歳にはとても世話になった。礼を言うぞ、千歳」

「えっ……」

千歳は驚いたような声を上げたあと、顔を林檎のように赤くして俯いてしまった。

む、むう。某は何か変なことを言っただろうか。ただ素直に今の気持ちだけを告げただけなのだが……おなごというのは良く分らん。

「だ、だったら……」

「む？」

「ほ、褒美を、頂いてもよろしいでしょうか？」

千歳はやつとのことと絞り出したかのような小さな声を発した。褒美か。そういえば某は今まで千歳に何もしてこなかったな……よし。

「良いぞ？　だが金などは無理だからな？」

某がそう言っと、千歳はまるで太陽のような笑顔を浮かべた。む、元気になったか？

「で、でしたら……あ」

「あ？」

「あ、あ、あ……」

あ、とは何なのだろうか？ あ……アンコか？ 千歳は団子が食いたいのか？ それとも饅頭か？ むう、食い物しか思いつかん。

「あ！ 頭を撫で「あれ？ 旦那と千歳じゃん。何してんの？」……死ッ」

「うわっ！？」

千歳が突然現れた佐助にすていれっと？ という剣を投げつけた。佐助はそれを間一髪でかわす。

……いきなりなんだ？

「ちょ、ちよっと千歳！？ いきなり何すんだ！？」

「うるさいですよ、兄さん。私はもう兄さんを許すことが出来ません。せっかく勇気を出したところだったのに、イベントが発生するところだったのに……！ 覚悟しなさい、兄さん！ 兄さんをこの世からログアウトさせてあげます！」

「待て待て！ 何本投げてくるんだ、お前は……うわぁ！」

……千歳が投げるすていれつとから逃げる佐助。その佐助を追いかけて千歳も行ってしまった。
……むう。

「千歳は何をして欲しかったのだろうか……」

「それが分かるのはお前がもう少し大きくなってからよ、幸村」

「お館様！」

背後から聞こえた声に振り向くと、そこには某の尊敬するお館様——武田信玄公がいた。

流石お館様。某に一切気配を悟らせずに背後に回り込むとは……いや、それよりも！

「お館様！ 某が大きくなってから分かるとはどういうことでしょ
うか！？」

「そのままの意味よ。幸村よ、お前は実力的にも精神的にもまだまだ

だ未熟……千歳の繊細な心を理解するのにはまだ時間がかかるだろう」

「で、ではどうすれば「馬鹿者があ！」ぐああああ！」

お館様の拳によって、某は壁に叩きつけられる。お、お館様。何故……？

「それはお前がこれから気付かなければならぬことよ！ 人に頼るなど言語道断！ さあ、立ち上がれい、幸村！」

お館様……！

「うおお！ 某、感動致しましたぞ！ お館様あ！」

「うむ！ 幸村あ！」

「お館様あ！」

「幸村あ！」

「お館様あ！」

「幸村あ！」

うおおおおお！ 滾る、滾るぞお！ 真田源次郎幸村あ！ これか
らも精進致しますぞお！

姉は真田雪（後書き）

結局最後は男同士の叫び合い。便利だね、これ……なんかすいませんでした。

アンケート続行中。選択肢置いときます。

？真田幸村	0
？伊達政宗	5
？片倉小十郎	2
？前田慶次	1
？長宗我部元親	1
？毛利元就	0
？猿飛佐助	0
？かすが他女武将	1
？武田信玄&上杉謙信	1

アンケートは子供時代が終了するまで。あと少しかな？

今日の戦国BASARA弐放映後にもう一本投稿します。絶対だぜ！

ニンニン忍者 エロ忍者……なんですか、このタイトル（前書き）

急展開過ぎるぜ！（今日の戦国BASARA弐

ニンニン忍者 エロ忍者……なんですか、このタイトル

どうも皆さん。神様（♪）のミスのせいで殺され、戦国時代に転生した真田雪です。転生する前も真田雪です。

え？ どうして今更そんな初期の説明をするのかって？ そろそろ忘れてる人もいるのではないか、と思いついて……しかし前々から思っていたんですが、僕が最初に言うどうも皆さん。の皆さん。これって誰のことなんでしょうかね？ こちらに転生してからずっと疑問に思ってます。なんででしょう。

「か、考え事をするなら、まずは私の首から手を離してくれませんか？♪」

「離したら逃げるじゃない。まったく、屋敷から出るなって言ったのにこんな山奥まで……」

今の僕は右手に神様（♪）in鷹を、左手に木刀、背中にもう一本の木刀を背負い、甲斐の山奥にいます。

まったく、この神様（♪）は隙を見せると直ぐに逃げ出すんですから。前に佐助に作ってもらった首輪でもつけてやりましょうか。

「首輪は勘弁してくださいよ……飯にも神様なんですから、下の者に示しがつきませんし♪」

「あなたの下がいることに驚いたんだけど……というか何度も言っ

てるけど早く神様界(?)に帰りなさいよ」

「え〜? せっかく下界に降りて来たんだから色んなところみたい
んですよ〜。目下の目標はあのエロ忍者さんを見ることです!」

神様(♪)が何やら興奮した様子で捲し立ててくる。

どうもこのバ神様(♪)は僕と千歳が変なイザコザを起こしていな
いか確かめることのついでに下界観光に来たらしい。いや、おそら
く観光の方が主な目的だろう。もう帰ってくれないですかね、この
神様(♪)……というかエロ忍者ってなんですか?

「ご存じないのですか!? 彼女こそ、胸元が大きく開いたとつて
もエロい忍者スーツを着て、誰が見ても『エロい』と言わせるほど
のエロ忍者! かすがちゃんです!」

「どこぞの緑色の参謀の真似で紹介されても分からないわよ。誰よ、
かすがって?」

「え〜? ……あ、そういえば雪さんはBASARAを知らないん
でしたね。千歳さんともう一人の方は知ってたんですけどねえ……
ハア」

……前々から思ってたけどBASARAって何よ? というか仕方
ないなあ、もう。みたいな感じで溜息を吐かないでくれませんか?
物凄くウザいんですけど、神様(♪)。

「良いわ。そんなに死にたいのなら最近覚えた新技の餌食にしてあげる。スウーパァーイナズマァー」

「雪さん！？　あなたがどうやって双剣でその技を放つのか大変興味はありますが、それを食らったら確実に私消し飛びますよね！？　流石にそれは勘弁……あれ？」

「キツ……あら？　どうしたの？　」付け忘れてるわよ」

「あ、はい、」つと……じゃなくて！　向こうの方で誰が襲われていますよ！」

「なんですって？」

神様（♪）が見ている方向を見ると、黒い忍者服のような——な　んで胸元開いてるんでしょう——物を着た僕と同じ年ぐらいの金髪少女がクナイを構えていた。その少女の目の前には斧や刀を構えた薄汚い男が三人いた。山賊ですかね？　この辺りはお館様のおかげで治安は良いと聞いていたんですが……まあ、どんな場所にもああいうのはいくらかはいますよね。

しかし、あの少女は忍者ですかね？　あの年で……ってうちにも千歳がいるじゃないですか。……というか良く見たら足を怪我してますね。おそらくあの足の怪我のせいで追い詰められたのだろう、あの少女の实力は見た感じでも千歳クラスだろう。だが、何かの任務中に怪我をして、山賊どもに見つかった。と言ったところですかね。

「ゆ、雪さん頭の回転速いですね。多分それで合っていると思います

よ……しかしまさかこんなところですか？ ちゃんに会えるなんて……驚きです」

「なんで興奮してるのよ……まあ、いいわ。さてどうやって助けようかしら」

「えー？ 雪さんならあんな山賊程度、デコピン一発で倒せるんじゃないですか？」

「そんなの無理よ。お館様なら出来るでしょうけど……というか僕の身体能力、家宝の双剣持っていないと五倍にならないんでしょう？ なければ今の状態で出来るのは奇襲しかないわ」

まったくなんでこの神様（♪）はそんな変な設定にしたんでしょうか。

「とか言っても雪さんの身体能力はB A S A R A 補正入ってるから今のままでも半端ないですよー？ 今の雪さんが身体能力五倍になったらもう雪さんとともにやり合えるのは……あれ？ 結構いますね？ 恐るべきB A S A R A 武将！ ♪」

「うるさいわよ。……ハア、仕方ない。速攻で終わらせましょう」

そう決めるや否や僕は右手に持っていた神様（♪）in鷹を地面に捨て、背中に背負っていたもう一本の木刀を抜く。そして二本の木刀を構えて山賊たちのいるところへ走る……というより、跳んだ。

どうも真田の血というのは凄いモノらしい。凄く身体軽いから十メートルぐらい軽く跳べる。

確かにこれに身体能力五倍が入ったら中々のチートですね……っと、そろそろ落ちるか。

僕が落ちてきていることに気付いた少女が僕を見た。それに引かれて山賊たちも上を見ようとする。まあ、でも。

「遅い！」

「ぐえっ!？」

「兄者!？ てめえ、何もん……あふん!？」

斧を持っている男の顔面に着地という名のキックを食らわせたあと、近くにいた槍を持った男の股に目掛けて右の木刀を振り上げる……なんかキモい声出したんですけど、こいつ。

「お前……ガッ!？」

刀を持った男が刀を振り上げた瞬間、男の眉間にクナイが突き刺さり、男がそのまま後ろ倒れた。

クナイが飛んできた方向を見ると、先程まで山賊に囲まれていた忍者少女。うわぁ……。

「中々にグロいことするわね」

「……敵は一撃で殺す。忍者の鉄則だ」

忍者少女は鋭い視線を携えながらクナイを僕に向ける。

……あれ？ 助けてあげたのに。もしかしくても警戒されてる？

「一応僕はあなたの敵じゃないつもりだけど」

「信用出来ると思うか？ さっきの山賊どもとグルで、助けたと思わせて油断させたところで私を殺すつもりかもしれん」

あちゃー……ものすごく警戒されてます。そこまでマイナス思考ですか？ さてさて、どうしましょうかね？ どうやったら警戒を解いてくれ「うおおおおお！」ん？

「食らえ、雪さん！ ギガくちばしブレ「てい」逝くう！？」

「……は？」

何故か叫びながら僕に突っ込んできた神様（♪）in鷹を左手の木刀で叩き落とす。

……いきなり何するんですか、この♪。忍者少女が呆然としてるじゃないですか。

神様（♪）は地面で軽く痙攣したあと、ノロノロと起き上った。あ、しぶといですね。

「いつつ……何するんですか、雪さん！♪」

「それはこっちの台詞よ。反射的に叩き落しちゃったじゃない」

「だっていきなり地面に叩き付けるもんだから、ちよつと仕返ししようと思つて……♪」

「ちよつとつて。あれは人を殺せる回転量だったわよ？ 今のあなたなら天を突けるわよ？」

「私のくちばしは！ 天を突くくちばしだああああ！ ……なんかすいませんでした♪」

翼を使って器用に土下座する神様（♪）in鷹。

実にシユールな絵ですね……ん？ 忍者少女が信じられないモノを見るような目でこちらを見ているんですがどうしたんでしょう。喋る鷹でも見たんですかね？

「た、鷹が……喋った？」

……いましたね、ここに。現在進行形で土下座してますね。

「あの〜」

「な、なに？」

「この鷹……見なかったことにならない？」

「……衝撃的過ぎて忘れることが出来ないわよ」

「う〜……雪さん、雪さん！ そろそろ顔を上げてても良いですか？」
「」

土下座をしている神様（♪）がチラツと顔を上げて僕を見ってくる。
……このバ神様（♪）。気付いてないですね？ さて、どうしましょうか。正直神様（♪）のことでどう説明すればいいか分からないし、それ以前に全部神様（♪）^{このバカ}のせいだし。なんでこのバカの尻拭いを僕がしなきゃいけないんでしょう。

「なんか考えてたらムカついてきたわ。蹴るわよ？」

「え？ 雪さん何言つて……あつ、エロ忍者のかすがさん！ どうも初めまして、私は「酢ー羽ー威奈逗魔！ 鬼ーツ苦！」きゃあああああ！？」

とりあえずムシャクシャしたから神様（♪）を星にした。後悔はしていない。

忍者少女は飛んでった神様（♪）を少し見たあと、視線を僕に向け

た。

「……お前、真田雪だな」

「あら？ 僕のこと知ってるのね」

どうやら神様（？）のことはスルーしてくれるらしい。
優しいです、忍者少女…… さすがでしたっけ？

「色々と有名だ、お前は。女の身ながら武術の腕前は父親の真田昌幸に迫り、日の本随一の美貌を持つことから諸国の大名から『虎の姫』と呼ばれている……」

……なんか僕はえらい評価を受けているみたいです。虎の姫で。日本一の美貌で。過大評価過ぎませんか？

「信じられない、といった顔をしているな。お前は全国の有力武将たちから警戒されている。有名どころを上げると織田に毛利、北条といったところか。これからは夜寝ている時も気をつけた方が良いでしょう？」

「……それなら、優秀な護衛が付いてるから心配ないわ。というかどうして教えてくれたの？ あなたもどこかの武將に仕えてるんでしょう？ 今ここで未来に強大な敵になるかもしれない種を摘み取っておかなくて良いの？」

「……私は命を助けてくれた相手に恩を返しているつもりなのだが……殺して欲しいのなら殺してやるつか？」

「謹んで遠慮するわ」

それなら良い。と言い、顔を背けるかすが。

……… なんていうか、忍者に向いてないですね、この子は。忍者なら敵は殺せる時に殺すべきじゃないんですかね？さつき敵は一撃で殺す。忍者の鉄則だ。とか言ってたのに。忘れてるんですかね？ いや、忘れてるんなら良いんですけど。死にたくないですし。

「それでは、私は行く。………礼は言わんぞ？」

「さっきのは礼じゃなかったのかしら？ …… ああ、そうだ。これあげるわ」

「………ん？ なんだ、これは？」

僕が投げたモノをかすがが受け取り、不審そうに見詰める。ふふふ、それは！

「ある忍者に製作してもらった、首w………腕輪よ！ 腕に着けて相手の武器を防御する時などに使えるわ！」

本当は神様（♪）in鷹専用だったけど、サイズの腕輪にピッタリだからせつかくだからあげる！　こういう贈り物は良く死亡フラグを回避するのに役立つって聞いたことがあるしね！　僕がかすがが気に入りましたから死んでほしくないですし。

「……果てしなくいらないが、何かの役に立つかもしれないな。せつかくだ、貰っておこう。……だったら、ほら」

かすがは渋々左腕に佐助謹製金属首w……腕輪を着けたあと、僕に何かを放り投げてきた。

僕はそれを受け取る……クナイ？

「取っておけ。双剣が使えないほどの狭い場所での戦闘や、超近距離での戦いの時に使えるだろ？」

顔を背けながらそんなことを言うかすが。

……ツンデレ？　うん、多分これ言ったら殺されるからやめときましょう。

「ありがとう。大事にするわ——かすが」

「……なんだ」

「僕はあなたが気に入ったわ。直にあなたを奪いに行くから……死んじゃ駄目よ？」

「なんだか、急に死にたくなった……達者でな」

そう言い残してかすがは去って行った。ふう、欲しいモノが増えちやいました。

「さて、では帰りますかね……って」

僕は周りを見渡す。……あれ？

「……どこでしたっけ？」

マヨイまいまい……違った、迷いました。

ニンニン忍者 エロ忍者……なんですか、このタイトル（後書き）

かすがを出して見た……大分無理矢理ですけどね。

只今アンケート中。選択肢置いときます。

? 真田幸村 0

? 伊達政宗 6

? 片倉小十郎 2

? 前田慶次 1

? 長宗我部元親 2

? 毛利元就 0

? 猿飛佐助 0

? かすが他女武将 1

? 武田信玄&上杉謙信 1

アンケートは子供時代が終わるまで。あと少しです。

変わらぬ日々が一番です（前書き）

もうすぐで戦国BASARA3発売ですね。雑賀孫一に惚れました。誰か分からない人は戦国BASARA3の公式サイトへ。カッコイイです、雑賀衆。

でも、PS3持っていないんだよね。

変わらぬ日々が一番です

「平和ね……」

「平和でござるな……」

「平和ですねえ」

縁側でのほほんとしながら、お茶を飲む。うん、美味い。

あつ、どうも皆さん。虎の姫（らしい）、真田雪です。

十六歳になりました。ちなみに明日が誕生日なので、明日にはもう十七歳です。

別に僕は永遠の十七歳とかいつまでも言うつもりはありませんけどね。

……え？ 突っ込みどころが多すぎる？ どこにそんな突っ込む要素があったと……ああ、分かりました。一個ずつ答えていきますから、落ち着いてください。

「姉上。団子はいかがですか？」

「あら。ありがとう、幸村」

「団子と言えば三兄弟？ いいえ、私的には大家族の方が……」

「少し黙りなさい。あと」

「あつ、すいません。よし、……あつ、この台詞の分の、も言わなきゃ……」

相変わらず、うるさいですね……あつ、この団子美味しい。

「モグモグ」

「モグモグ」

「モグモグ……突然ですけど雪さんはユイにちゃんとマジ天使はどっちが好きですか？ 私はユツサ遊佐です」

「僅差でマジ天使ね……とりあえずあなたは選択肢を守りなさい。というかいきなり過ぎるわ」

「いえ、神としては天界と下界の間に死者を勝手に取っちゃう世界があるのどうかと思ってましてね。もし今の質問を雪さんが無視したら滅ぼそうと思ってました。一旦保留ですけどね」

なんか僕、地味に一つの世界を救ってしまいました……ああ、すいません。質問に答えるの忘れてました。で、何でしたっけ？

まず一つ目……ふむふむ。お前、前回山で迷わなかったっけ？ ですか。

あのあと途方に暮れた僕は駄目元でかすがの名前を叫んだです。もしかしたら来てくれるかなあ、と思つて。で、体育座りしながらずっと叫んでたら、『うるさいぞ!』という声と共に戻って来てくれたんです。

もうね、泣きましたよ。転生してから初めて泣きましたね……あつ、生まれた時は除外です。

人ってこんなに暖かいんだなあ、と思いましたよ。で、かすがに、迷ったから帰れない。と言ったら、

『仕方ない。私が連れてつてやる。これはさっき助けてもらった分の残りを返すだけだからな、勘違いするなよ』

と言ってくれました。

ツンデレ乙……と一瞬口に出してしまいましたが、鋼の意志で止めました。

だって言ったら捨てられそうだったんですもん。

「モグモグ……幸村？ ほっぺにあんこ付いてるわよ」

「む？ どこでござるか？」

「ジツとしてなさい。取ってあげるから」

「カップルか！ ……」

何を言ってるんでしょう、このバ神様（ゝ） i n 鷹。
姉弟^{きょうだい}なんだから当たり前じゃないですか。

……ああ、二つ目の質問ですか。えーっと、お前、前回十歳じゃなかったか？ ですか。ふむ。

月日が経つのは早いですよね（遠い目

さて、次の質問は……なんで神様（ゝ） i n 鷹が喋ってるのに幸村は何も言わないのか、って？

「疾風丸よ。お主、団子食べていいのか？ 鷹なのに」

「私は鷹を超えた存在……ストライク鷹 E z 8 なのでモーマンタイです」

「すとりいく、いーじーえいと？ なんだ、それは？」

何故か武田の皆さんは鷹が喋るくらいでは驚かないみたいで……以下、みんなの反応。

『流石某の疾風丸！ 喋るなんて凄いでござる！』 ↑ 幸村

『最近の鷹は喋るのか。凄いな』 ↑父さん

『ふむ。敵を混乱させるのに使えるかもしれぬのう』 ↑お館様

『いやいや、みんなおかしいでしょ？ 鷹が喋るなんて絶対おかしいって』 ↑佐助

『私、ナンコツ好きなんですよね……』 ↑千歳

『こいつ……喋るぞ！？』 ↑小山田信繁っていう人。ガン。ムに乗ってそんな声してました。

とまあ、みんな何故か鷹が喋るのを普通に受け入れ……え？ 一人受け入れてないって？ 気にしたら負けです。僕が負けて言ったら負けなんです。

「けど……本当に、平和ね」

しみじみと思う。神様（♪）のミスで殺されて、戦国時代に転生させられた時はどうなるかと思ったけど、今では転生して良かったと思ってる。幸村や父さん、お館様と佐助に千歳。みんな良い人ばかりだ。

……だけど、忘れてはいけない。今僕がいるのは戦国時代。いつ戦いが起きてもおかしくない時代。

もしお館様が死んだら

もし佐助が死んだら

もし千歳が死んだら

もし父さんが死んだら

もし……幸村が死んだら。

そんな？もし？が僕の頭の中を駆け巡ってる。そんな縁起でもない想像をしてはいけないのは分かってる。けど、どうしても考えてしまふのだ。その？もし？が起きた時、僕はどうするのか。

殺した相手に復讐するのか、それとも失意の底に落ちて何もしい生きているだけの人形になってしまふのか。それは分からない……けど、一つだけ確かなことがある。

「私は天界一のガン。ンゲーマーと言われた神……じゃない、鷹です！ 愛機はEz8です♪」

「むう……。良く分からぬがそれは凄いのか？」

——幸村だけは、僕の意地を、命を懸けて、護る。

いいえ、幸村だけじゃない。みんな護る。この平和な日常……いつもみんなで馬鹿して、笑って過ごすこの楽しい日常は必ず護る。そのためにも、僕は強くならなきゃならない。

ひとまずは、全国行脚の旅にでも出ようかと思う。全国の強い人たちと戦って、腕を上げる。西には西海の鬼に示現流、北には軍神に独眼竜。全国には強い人たちが一杯いると聞いています。全国行脚の途中と言えは殺されることもないでしょうし。

「そうと決めたら……明日にでも出発しようかしら。千歳も連れて」「む？ どこに行くというのですか？ 姉上」

「いえ、全国行脚にでも「雪様！ 幸村様！」千歳？」

千歳が血相を変えて走って来た。どうしたんでしょう、また神様（♪）が逃げ出しでも……って、ここにいましたね。

「雪さん酷い！ 私そんなに逃げ出してませんよ！？」

「心を読まないでよ……それで千歳。どうしたの？」

「そ、それは……その」

どうしたんでしょう、そんなに言いにくいことなんでしょうか。

「どうしたのだ、千歳？ 何が「雪様。旦那」佐助？」

佐助も現れた。心なしか佐助の表情が暗い気がする。なにかあったんですかね？

「千歳。俺が話す」

「で、でも兄さん！」

「こついつ役目は俺が適任だ。任せろ」

佐助がそう言うと、千歳は俯いて佐助の後ろに下がった。むう、なんなんですか。

「雪様、旦那。落ち着いて聞いてくれよ？」

「なによ、そんなに勿体ぶって。さっさと話さない」

僕がそう言うと、佐助は表情を苦悶の表情に変え、告げた。

「昌幸様が……死にました」

変わらぬ日々が一番です（後書き）

次で子供時代終わりです。ちょっと早いかな、とも思っけど、そろそろ他の武将たちも出したくて。長宗我部とか慶次とか筆頭とか。直江兼続……は出さなくて良いか（え

最後のアンケートです！選択肢置いときます！

？真田幸村	1
？伊達政宗	7
？片倉小十郎	2
？前田慶次	1
？長宗我部元親	2
？毛利元就	0
？猿飛佐助	0
？かすが他女武将	1
？武田信玄&上杉謙信	1

次の話を投稿するまでを投票期間とします。明日中には投稿出来ると思います。

決意そして旅立ち（前書き）

子供時代最終話！

シリアス苦手過ぎるわ！

決意そして旅立ち

父さんが死んだ。

たかが十文字にも満たない言葉。たったそれだけの言葉でも僕たちを動揺させるのには充分だった。

「とか言いつつ落ち着いてますね？」

「昨日あんなに泣いたんだから落ち着いていて当然よ……今日は、
付けないのね」

「こんな時にふざける方がどうかしています」

それもそうね、と僕は呟き、前を見る。僕の目の前にあるのは墓。
父さん——真田昌幸が眠っている墓。

今は佐助から父さんが死んだと聞かされた翌日。

葬式が終わり父さんを埋めたあと、僕と神様はここに残っている……と、もう一人いましたね。

「心配しなくても自害なんてしないわよ、千歳」

「……そんな心配はしていません」

どこからともなく現れる千歳。その表情は暗い。当然だろう、仕えていた主が死んだのだから……いや、最早主以上か。僕に幸村に千歳に佐助に父さんにお館様に武田の皆。決して誰一人欠けてはいけない、家族のような関係になっていたのだから。落ち込まない方がどうかしている。

「幸村は、寝た？」

「はい。今はお館様と兄さんが傍についています。……相当荒れていましたからね。お疲れになったんでしょう」

「……そうでしょうね」

昨日の幸村は酷かった。なんせ混乱して泣きながら佐助に殴りかかったぐらいなのだから。おそらく佐助はそうなると分かかって千歳を下がらせ、自分が言うことにしたのだろう。まったく、いつもは飄々としてるくせにそういう時にはかっこつけちゃって。今時そういうのは流行らないんですかね。

つと、少し話が逸れましたね……そのあと佐助に殴りかかった幸村を僕と千歳で何とか押さえた。
え？ お前は泣かなかったのかって？ 不思議なことにその時は大分落ち着いてたんです。多分実感が無かったんでしょうね、父さんが死んだってという実感が。

幸村を落ち着かせたあと、佐助が父さんがいるという部屋に行くかと聞いてきたので行くことにした。佐助は『辛いなら無理をしない方が良い』と言ってくれましたが、僕は『見なくてはいけない』と言って押し切りました。未だに安定していない幸村を千歳に任せ、父さんがいるらしい部屋へと向かい、そこで僕が見たモノは、

左目を潰され、左腕は肘から下が無く、胸には斜めに切り裂かれた傷跡があり、身体中には矢が刺さった最早人と言っているのか分からない状態の父さん。

けどいくら傷ついていてもそれは父さんで、同時に父さんが死んだという実感が僕にやっと押し掛かってきた。そして、僕は泣いた。父さんの亡骸の前で、泣いた。涙が涸れるまで、泣いた。

泣いて、泣いて、泣いて……安心しました。僕は親が死んだら泣けるんだって。だってちよつと前まで幸村が荒れてるのを前にしてもただ止めなきやぐらいにしか思わなかったんですよ？ 自分は血も涙も無い冷血人間か、と軽く思ってしまったが……良かったです、泣けて。大切な人の前で、泣けて。

「千歳。父さんを殺したのは、誰？」

「……兄さんに、雪様には言っな。と言われてますので」

……佐助め。

「雪様が昌幸様を殺した相手を知ったら何をするか分からないから……と。何をするつもりですか？」

「今すぐそいつのところに行ってボッコボコに」止めた方が良いです、雪さん」……なに？ 神様」

僕の言葉を途中で遮った神様。止めた方が良いつて……一体どういうこと？

「今の雪さんが行ってもお父さんの二の舞になるだけです。なんせ相手はあの織田軍の明智光秀なんですから」

「ッ！ 神様、何故知って……」

「私は神様ですよ？心を読むことを忘れましたか？」

神様の言葉に千歳はグツと言葉を詰まらせる。明智、光秀……か。

神様は僕が考え始めたのを一瞥してから話し始める。

「あのお父さんの身体を見たでしょう？ 明智光秀はああいう男です。人を殺すことに快楽を覚える異常な男……。おそらく雪さんなら勝てるでしょうが、同時に沢山のモノを失うことになるかもしれません。明智光秀はそういう男です」

「私も明智光秀のことは知っています。だからこそ、雪様。私はあの男と関わって欲しくありません。雪様が望むのなら、今すぐにでも織田の領地に忍び込んで、明智光秀の首を「黙りなさい！」ッ！？」

何を言ってるんですか……。！ あの織田の領地に入って生きて帰れるわけがありません！

「僕にッ！ また家族を失う悲しみを味合わせるつもりなの！？」

「ッ！ ……すみません、雪様」

千歳は自分が口走っていたことの意味が分かったのか、シュンと身体を縮こませる。分かってくればいいんです。

……明智光秀、織田軍……織田信長。彼らの戦力は近年増大を始めている。もし武田が正面から挑んだとしたら……負けるでしょうね、確実に。僕は武田は強いとは思いますが戦いは結局は数。一騎当千

の武将がいたとしてもその上をいく数の兵がいたら意味がありません。

おそらく近い内に織田は日の本一の軍となるでしょう。その脅威に對するには……。

「……よし。千歳！ 明日、武田を出るわよ！」

「はい！ ……つて、何を言ってるんですか！？ 頭おかしくなっちゃいましたか！？」

「失礼な！ おかしくないわよ！」

「で、ですけど……ねえ？」

「でも雪さんってこんな感じ……あたたたたた」

何か言おうとした神様in鷹の首を締める。空気を読むんじゃないかな？

「ちゃんと話を聞きなさい！ 武田を出るってことはね、全国行脚の旅をするってことよー！」

「えーつと……なんでです？」

「全国の武将たちと会って、織田と戦うために協力してくれないか頼みに回るのよー！」

「「……………え？」」

千歳と神様がまったく意味が分からないといった風な顔をする。あれ？ 何か変なこと言いましたかね？

固まっていた千歳が口を開く。

「ほ、本気で言ってるんですか？ そんなこと出来るわけが……」

「やって出来ないことはない、よ。最初から無理だつて決めつけてたら何も出来ないわよ？」

「で、ですが「ふふふ……」え？ か、神様？」

「あっははははは！ さ、流石雪さん！ 破天荒なことを思いつきましたね！ ひーひー、腹が痛い……」」

か、神様が急に笑い始めちゃいました！ ついでに、も復活してしまいました！ しかしこいつに笑われるとムカつきます！

神様は満足するまで笑ったのか、涙を翼で拭いたあと、真剣な表情（鷹）で僕を見た。

「雪さん。そういうことならまずは西から行った方が良いでしょう」

「西？　なんで？」

「四国の長宗我部……そこに三人目の転生者がいます。とっても大きい大剣を持っていて、その上馬鹿みたいに強いのですぐ分かるはずです。あの人なら協力してくれるはずです」

「……なんで教えてくれるんですか？」

千歳が神様に訊ねる。いきなり最後の転生者の話をされても、意図が掴めないしね。

「私はただ、あなたたちが心配なだけです。おそらくこれから日本^{こく}ではとんでもない戦が起きるでしょう。そのためには雪さんが言った通りみなぎ協力しなければいけません。神様が出来る最後の手助けみたいなモノですかね」

なんか神様が消えるみたいなことを言い始めた。いきなりそんなこと言われてもなんとも言えないんですけど。

「……神様？　あなた、天界に帰るの？」

「ああ、はい。そろそろ帰らないと上に怒られちゃうんで。……雪さん、千歳さん。死なないでくださいね？　もう一人の方にも言うておいてください……それでは」

そう言い残して神様in鷹は空に飛び立って行った。……えー。

「最後までマイペースな人……じゃないか。神だったわね」

「そうですね……って、雪様！ 全国行脚って本当に明日から行くんですか！？ 幸村様はどうするんですか！ 凄い落ち込んでるんですよ！？ こんな時こそ雪様が傍にいてあげないと……」

随分と心配性なのね、千歳は。

「あの子は、そんな弱い子じゃないわ」

翌日、僕と千歳は旅支度を整え、屋敷の扉の前にいた。

ちなみに僕の服はまんまソードアートオンラインのアスナの服で、所々に赤のラインが入っている。

そして背中には真田の家宝……キリトの双剣だ。黒い方が鉄虎^{てつこ}、白い方が白虎^{ひゃっこ}というらしい。

どうやら父さんは昨日の僕の誕生日にこの家宝を渡すつもりだったらしい。

全く、僕の誕生日を自分の命日にするなんて、はた迷惑な人ですよ

ね。

「雪様。本当に行くんですか？　せめてもう少し時間を置いてから……」

「ありがとう、佐助。でも少しでも時間が惜しい。だから行くわ」

僕がそう返すと、佐助は両手を上げて降参のポーズをした。心配かけてすみませんね、佐助。

「千歳。雪様を頼んだよ？　見た目お嬢様でも何するか分からないからな」

「充分承知してますよ、兄さん」

……随分な評価を受けてるみたいです。

「雪よ」

「はい。お館様」

「出来るだけやってみせろ。儂が言えるのはそれだけじゃ」

「……はいっ！」

僕が返事をするとお館様はうむ、それで良い。と満足そうに頷く。
出来るだけ……そう、僕に出来ることを精一杯やるんです。

「さて、あとは……」

「ま、待つてください雪様。まだ幸村様が「姉上！」幸村様っ!？」

「来たわね」

声が聞こえた方に振り向くと、屋敷の方から幸村が走って来ていた。
そして幸村は僕の前で止まり、右手を差し出してくる。これは……。

「六文銭？」

「を半分の三つにした物でござる。父上の、形見でござる」

なんでそんな大切な物を……と言いかけたところで気付く。
幸村は不敵に笑っている。まったくこの子は……。

「その半分に分けられた六文銭を持つ限り、姉上は死ねません。も
ちろん某も死ねません」
それがし

「……なるほどね。つまり僕と幸村は」

そこまで言いかけて、一旦区切る。そして幸村と同時に言う。

「「一蓮托生！」」

僕と幸村の声が武田邸に響き渡る。……まったく、これじゃ意地でも死ねないじゃない。まあ、でも。

「安心しなさい、幸村。僕は不死身だから。……それより、幸村こそ僕と千歳がいない間、お館様を頼んだわよ？」

「任せてくだされ！ この真田源次郎幸村！ 姉上と別ったこの六文銭に誓って必ずやお館様を御守りしましょうぞ！」

「ふふ、頼もしいわね。……千歳。行くわよ」

「はい！」

僕と千歳は馬を走らせ、屋敷を出る。さて長い旅の始まりですね。

「姉上ー！ ご無事でー！」

後ろから聞こえる幸村の声に、左手を上げて応える。まったく心配性ですね。

「僕は不死身だって、言っただけじゃないですか」

決意そして旅立ち（後書き）

はい。というわけで子供時代終了。次からは全国行脚編です！まずは西から行きます！

そして皆様アンケート御協力ありがとうございました！アンケートの結果……8票という圧倒的票数を獲得した、奥州筆頭伊達政宗に決定いたしました！

……と言っても西行ってから東に行くので筆頭出るの大分先になっちゃ……本当にすいません、石は投げないでください。

とにかく全国行脚編は筆頭はもちろん他の武将たちも活躍するので、楽しみにしておいてください！

P・S

本日の12時に全国行脚編……というか二部の予告を載せます。本編ではないのでご注意を！

一部予告（前書き）

はい、前話で言った通り予告です。

二部予告

時は群雄割拠の戦国時代。

「互いの全力を以てやり合おうではないか！謙信！」

「びしゃもんでんのかこのもとに……かいのとら、あなたをうちた
おします」

歴戦の武將はぶつかり合い、

「大人しく引いてくれないかなあ。俺様、本気出しちゃうよ？」

「謙信様には、指一本触れさせん……！」

主君を護る忍同士が火花を散らす。

「我は第六天魔王！うぬら如きが我に敵うとも思ったか！愚か者めらがあ！」

「クフフ……嬉しい、嬉しいですねえ！虎の姫え！」

魔王は日の本を闇で覆い、

「ぬうあああああああ！」

「少し勿体無いけど……潰すしかなさそうだ」

「秀吉様に仇名すモノは、全て斬滅する！」

霸王は純粹なる暴力を振るい、天下を狙う。

闇と暴力に立ち向かうは、未来を支える若き力。

「某、^{それがし}真田源次郎幸村あ！姉と別ったこの六文銭砕けぬ限り！心に滾る炎は消えぬう！」

「戦なんてくだらないよ。なんでみんな恋に生きられないのかなあ？」

「西海の鬼たあ俺のことよ！この長宗我部元親を恐れねえってえふてえ奴はかかってきな！」

揺るがぬ意志を背負いし者は自身の信念を貫き通す。

「某、徳川家康！絆の力で天下を統べる！」

「我らの生き様は我らが決める。文句は無いな？虎の姫」

「我が名は毛利元就！天下分け目の勝利者よ！」

二度目の生を受けし者たちは、己の信じる道を突き進む。

「例え相手が誰だろうと……私が引く理由にはなりません」

「てめえら全員！ぶっ飛ばしてやらあああああ！」

虎の姫が出会いしは、独眼竜とその右目。

「政宗様を——頼んだぞ」

「オレの背中是小十郎に任せてるが……お前の背中はどうなんだ？
真田雪」

蒼い三日月を背負った竜と、輝く双月を振るう虎の姫が出会いし時、

「Let's party……派手に行こうじゃないの、政宗！」

日の本を巻き込む吹雪が、巻き起こる。

二部予告（後書き）

本編がちゃんと予告のようになるとは限りませんのであしからず。

それと自分はPSS3を持っていないので戦国BASARA3が出来ないので、買った方は新しく出て来た新キャラ（特に雑賀孫一）の詳細を教えてください！……一応受験生だからPSS3買えないし出来ないんで。

それとこれから先は大分手探りで進んでいくんで超不定期更新になります。そのところをご理解お願いします。

それでは！これからも弟は真田幸村をよろしく願います！

かつこいい台詞は死亡フラグ（前書き）

市キターー！松永生きてたー！？小太郎も生きてたー！？！？
↑今日の戦国BASARA弐

はい、展開が思いつかなくて更新が遅れてしまいました。すいませ
ん！これからも更新は不定期になると思いますので、気長に待つて
くれるとありがたいです。

とりあえず今回はあの仲良しカップル（？）登場です。上手く書け
てるか不安……。

かっこいい台詞は死亡フラグ

どうも皆さんこんにちわ。虎の姫こと真田雪です。

全国行脚の旅に出てから……何日経ったかは忘れました。あれです、時間なんて気にしてたら大きくなれませんか？

まあ、ともかく。何日か経ったんです、ええ。推測ですが十日ぐらい経った気がします……え？ さっき時間なんか気にすんなって言ったばかりじゃないかって？

あー、それはヤバイですね。それはもう頭がアレになってます。千歳レベルのアレではありませんが相当アレですね。某そげぶの人にそげぶしてもらって幻想をぶち殺してもらうのが良いでしょう。はい、ここテストに出ます。忘れずにメモしてくださいね、メモはリ○ンの生み出した文化です。

「……雪様。意味が分からないこと考えないでください。それと私はアレじゃありません」

「……千歳。地味に心を読まないで欲しいわ。それと今考えてたことは無駄じゃないわ」

僕がそう言つと千歳は眉をしかめ、

「……じゃあ何だって言うんですか」

それにしてもテンション低いですね。まあ、低い理由は分かっているんですが。

「それはね——現実逃避よ」

「カッコ良く言っただつもりでしょうが欠片もカッコ良くありませんよ。むしろダサいです。馬鹿ですか？ 死にますか？ それともいっぺん死んでみますか？ 二度死にますか？」

無駄にカッコ良く言っただつもりが、千歳には通じなかったみたいです。まさか三回も死ぬかどうか聞かれるとは思いませんでした。この子、僕の家臣ですよ。少し自信無いです。

「まったく……もう三日も何も食べていないというのに恐ろしく元氣ですね……」

千歳は、死ぬば良いんじゃないですか？とつけ加えて、盛大な溜め息を吐いた……辛辣過ぎる！

……えーっと、とりあえず今の千歳の一言で今の僕たちの状況は理解出来たと思います。まあ、簡単に言うと僕たちは……。

全国行脚十日目（推測）にて、食糧が尽きました。

いやー、旅立つ時は逆に多すぎるかなーぐらいに思ってたんですが、いざ蓋を開けてみるともう減るわ減るわで。僕が食べて千歳が食べて千歳が食べて僕が食べて千歳が食べて千歳が食べて千歳が食べて千歳が食べて……一体誰が原因でこんな状況に……ん？ 何か僕は重要なことを見落としているような……気のせいかな。

「大体ですねー雪様は無計画過ぎます！ 本来ならこういう旅は準備をもっとしっかりさせてから行くべきなのに、まさか十日目で食糧が尽きるなんて……ガミガミ」

実際にガミガミ言いながら起こる人なんて初めて見ました……といつか何でしょう。

理由は分かりませんが、千歳に怒られるとムカついてきます。ええ、理由は分からないんですが。なんかこう、理不尽じゃね？ 的な……いや理由は分からないんですが。

「それとですねえ……」

「あーもう分かったわよ！ もうこれからは極力喋らないようにしましょう！ 馬にもたれかかって、馬に行く末を託しましょう！ そうしましょう、そうするわよ！」

「え？ いやそういうことじゃ……って、もうもたれかった!？」

もうなにもかもが面倒なので馬（名前はまだ無い）にもたれかかるもたれかかったと同時に馬がヒヒーンと鳴いた。これはあれですね、俺に任せときな、嬢ちゃん!」ってことですね。軽く涙目にも見えませんが気にしません。

「あーっ。楽ねー」

「何やってるんですか、はしたない！ 仮にも真田の姫という立場なんですからシャキツとしてくださいよ！」

「大丈夫よ、千歳。こんな辺境の道に人がいるわけ……ん？」

「あら？」

頭に緑のバンダナをかぶり、背中に美味しそうな野菜を入れた籠を持った綺麗な女の人が目の前に現れました。女の方は口に手を当ててこちらを見ている。……しまった、見られた!？」

「でも別に良いか。大して問題は無いしね」

「問題大有りです！ 変な噂が広まっちゃったらどうするつもりですか!？ ？真田の姫は馬にダラーっともたれかかってる情弱姫だ?とか言われちゃいますよ!？」

「よし、とりあえずあなたから消すことにするわ」

馬から降りて背中に背負っていた双剣を抜く。主のことをそんな風に思っていたなんて……お仕置きです。

「ひい！？ や、やめてください、雪様！ 人がいるですよ？
見られてますよお！？」

「……なんかその言い方だと僕があなたを襲ってるみたいね。でもね？ 元はと言えばあなたが食糧を食い過ぎるから……ああ、さっき何か見落としてると思っただらこれだったのね。全部千歳のせいだったと。もういいわ、あなたを食糧にしてやる！」

「わ、私が大人しく食われると思ったら大間違いです！ 反撃しますよ！ しますからね！？」

僕と千歳は互いに武器を構え、警戒し合う。

ふふふ、身体能力五倍状態——長いから略してユキンザムと名付けましょう——の僕にただステイレットを投げるしか能が無い千歳如きが敵うと思っっているんですか！ それは大きな思い違いですね！ その思い違いごと食ってあげます！

「あなたたち。そんなにお腹が空いているの？」

「ええ……！ 空腹過ぎて馬にもたれかかったり、食糧を全部食い

切った目の前の家臣忍者を食べてしまおうかといつぐらい空腹よ…
…！」

緑のバンダナの女の人聞いてきたので素直に答える。

「それじゃあちょうど夕餉の時間なのでご馳走してあげましょうか？
犬千代様も大勢の方が楽しいでしょうし」

「良いの！？ それではご一緒させてもらっわ！ 行くわよ、千歳
！」

なんか知らないけれど勢いに任せてたら夕餉をご馳走してもらえ
ることになりました！ 本当に何があっただんでしょね！ 何も考え
ずに返答してたから何が起きたか分かりません！

「え？ 今のやり取りの間に何が……犬千代様？ ってことは……
あ」

「あつはつはつは！ それは災難だったな、雪殿！ まつ、おかわり！」

「ええ、本当に。何故か食糧の減りが速いと思ったら……忍者なのだから素早く動けるように身軽じゃないといけないんじゃないかしら？ あつ、まつさん。僕もおかわりいただけますか？」

「はいはい。お二人とも、少々お待ち下さいね」

僕と利家さんが差し出したお茶碗をまつさんが受け取り、美味しそうなほかほかのご飯をよそっていく。いや、助かりましたね。まさかまつさんが加賀の国の領主、前田利家さんの奥さんだったとは。しかも料理もこんなに美味しい。いやー、利家さんは本当に良い奥さんを持ちましたね……沢庵美味しいです。ポリポリ。

「どうだ、雪殿！ まつが作る飯は美味しいだろう！」

「ええ、とっても！ この漬け物も味噌汁も全て絶品。最高の奥さんじゃないですか！」

「当然だ！ まつの料理は日の本一、そしてまつ自身も日の本一だ！」

「いやですわ、お二人とも！ お恥ずかしいじゃないですか」

アハハハ八という僕たちの笑い声が部屋に響き渡る。

楽しい場所ですね、前田は！ 武田もいつも賑やかな場所でしたが、前田も賑やかで良い場所ですね！ …… だというのに。

「千歳。さっきから元気無いわね。こんな美味しい料理が目の前にあるっていうのにどうしたの？」

「い、いや、私からしたら雪様がどうしたのかって感じなんですけど…… って、雪様は戦国時代もB A S A R Aも詳しくないんでしたね…… ハア」

「？」

どうしたというんでしょう、千歳は。

城に入った辺りからずっとこんな感じなんですけど…… まあ、気にしなくていいですかね、千歳ですから。

あつ、そうです。僕は全国の武将たちに対織田信長連合を作るためをお願いする旅をしていたんです。利家さんは優しい人ですから、おそらく織田の所業を快く思っていないはずですよ。お願いしたら喜んで引き受けてくれるはずですよ！ よし、そうと決まれば……。

「利家さん。お話…… といつかお願いがあるんですが、よろしいですか？」

「ん？ なんだ、雪殿？ それがし 某に出来ることなら何でもやるぞ？」

「あつ、そうですか？ それじゃあ……」

「つて、雪様！？ 待ってください！ タンマ、タンマ！」

ああ、もう千歳うるさいですねえ。人が話をしようとしている時にまったくもう。まあ、気にしないでいいですかね、千歳ですし。

「前田軍に、対織田……」

「いやー、腹減ったなあ！ まつ姉ちゃん、飯ある？」

「連合……ん？」

僕の言葉を遮って部屋に入って来たのは、なんかド派手な服を着て肩に小さな猿を乗せた男。

僕たちはお互いを指差す。えーっ……。

「誰？」

かつこいい台詞は死亡フラグ（後書き）

はい、ギリギリのところ（前田は一応織田の傘下）で我らが色男、前田慶次登場。よっ、色男！↑作者は頭がアレになってます。

ちなみにこれから展開はぶっ飛んだモノになると思うので、「ここ
でこいつ出るのかしいだろ！？」などは勘弁してね！これから全
部作者の妄想で進んでいくので！あまり期待せずに読むのが吉、で
す！

その幻想（シリ阿斯）をぶち殺す！……です（前書き）

ネタが思いつかなくて超遅れた上に残念クオリティ。誰か助けてください。

前田家キャラ崩壊注意！

その幻想（シリ阿斯）をぶち殺す！……です

どうも皆さんおはようございます。虎の姫こと真田雪です。現在位置は加賀の前田家です。

主に千歳……いえ、全部千歳のせいで食糧が尽きて、空腹で死にかけている時に偶然通りかかった加賀の前田家の領主——前田利家さんの奥さん、まつさんに助けてもらい、生き残ることが出来ました。

で、夕餉を頂いた際に、対織田連合について切り出そうとした時に、突然ド派手な服を着て肩に小さな猿を乗せた男が現れました……はい。ここまでが前回のあらすじですね。相変わらず誰に説明してるのか分からないんですけど……まあ、いいです。今私は……。

「はははは！ やっぱ雪ちゃん面白いなあ！ もっと聞かせてくれよ！」

「そう？ だったら……千歳が馬に追いかけられた時の話でもしましょうか？」

「おっ！ それ良いねえ！ 話してくれよ！」

「こら、慶次？ 食事中なのでから慎みなさい！ 行儀が悪いですよ？」

「いいじゃないか、まつ！ 楽しければ全て良し、だ！」

「もう！ 犬千代様まで！」

前田家の皆さんと仲良く朝餉を食べています……え？ 色々すつ飛ばしてないかって？ そんなことないですよ、あのあと慶次……あ、あのド派手な服着て肩に小さな猿乗せてたのは前田慶次でした。ビックリです。実物ってこんななんですね、パ○ンコとかでしか見たことないから知りませんでしたよ。あ、パチンコはCMで見ただけです。

「……と、言う風に最後は千歳が馬に食われかけたところを僕たちが助けたの。あの時は焦ったわ……」

「なんだい、千歳ちゃん食われかけたの？ よく無事だったねえ！」

「何が、何が起きてこうなったの……？」

朝餉を摘みながら何故か愕然としている千歳。何がどうしたんでしよう。

あ、そうそう。気になってる人もいるかと思うので昨日の会話をダイジェストで。

『トシ！ まつ姉ちゃん！ この可愛い子たち誰？』

『あら。可愛いだなんてお世辞上手ね』

『はは。俺は本当のこと言っただけだぜ？ キミたちの名前はなんていうんだい？』

『僕は真田雪。こつちが猿飛千歳よ。行き倒れそうなところをまつさんに助けてもらってね……あなたは？』

『俺？ 俺は前田慶次！ こいつは夢吉だ。そっか、雪ちゃんと千歳ちゃんか。良い名前だな！』

『ふふ、褒めても何も出ないしあげないわよ？』

『そんなもんいらないよ。俺が褒めたいから褒める。それだけさ』

……と、言った具合に……って、会話だけ見ると若い男にナンパされてそれをあしらう若奥様みたいですね。こほん、まあ、色々あって仲良くなって。

「雪さん、おかわりはいかが？ まだまだ沢山ありますからね」

「あ、じゃあお願いします」

「まつ姉ちゃん、俺も！」

「それがし某もだ、まつ！」

「はいはい、ちょっと待っててくださいね？」

三人一斉にお茶碗を差し出し、それをまつさんが受け取る。

……信じられますか？ これ、まだ出会ってから一日も経ってないんですよ？ 不思議でしょう？ どんだけ和気藹々としてるんだっていうね……という環境の中で。

「千歳はどうしたの？ さっきから黙って」

「千歳ちゃん。具合悪いなら寝てた方が良いんじゃないのか？」

「いえ……それは大丈夫なんですけど、いつくるか、という重圧が……」

千歳は軽く胸を押さえる……もにゅ。ええ、擬音で表現するとそんな感じです。ああ、恨めしい。

「そんなに重圧が嫌なら斬り取ってあげるわよ？」

「へ？ いや、これは精神的な……なんで剣振り上げてるんですか？」

「気にしないで食事を続けなさい。大丈夫、痛みは一瞬よ」

「え、え？ 私何かフラグ立てましたっけ？ おかしいな、全然心当たりが……きゃああああー!？」

右に握った鉄虎を千歳のπに振り下ろす。
しかし千歳は身体を擦ってそれを避ける。ええい、小癪な！デカ
πの癖に随分とすばしっこい……！

「大人しくしなさい……！　あなたもペタπにしてあげるわ！」

「なんでですか！？　唐突過ぎて何がなんだか分かりませんよ！」

「千歳ちゃーん！　良く分かんないけど頑張れー！」

「助けてくれないんですか！？」

僕が鉄虎を振り回し、千歳が逃げる。そしてそれをワイワイキャツ
キャしながら観戦する前田家の皆さん……どこからどう見てもシュ
ールです、どうもありがとうございます。

「ハア、ハア……ひ、酷い目に遭った……！」

「流石は忍者。πがでかくても素早いわね……チッ」

「だからπってなんなんですかぁ!？」

まだしらばつくれる気ですか、このデカπ忍者め。もう一試合逝きますか？

「まあまあ、雪殿。そんなに走りまわっては腹が減っただろう。まだまだたんまり飯はあるぞ？」

「あ、はい。頂きます」

「素直!？」

ご飯の誘惑には勝てません。白菜美味しいです。もきゅもきゅ……あつ、そうだ。

「利家さん。対織田信長連合に入ってくれませんか？」

「すまん、雪殿。前田は織田の傘下。確かに某も信長様の所業には業を煮やしているが、某はまつや慶次、加賀の民たちを護らなければならぬ……すまん」

ふむ、やはり駄目ですか。まあ、仕方ないですね。

「いいえ、いいんですよ。一応聞いただけですから。それでは僕たちはこの朝餉を頂いたら旅立つことにしましょう」

「遠慮せずに泊まってくれていいんだぞ？」

「そこまでお世話になるわけにはいきま「ちよつとタイムお願いします」…… なによ、千歳？」

今大事な話してるんですから邪魔しないで欲しいんですが。

千歳は何回か深呼吸すると、よし。と言って僕を見て、

「じゃあ一つずつ聞いていきますね？ 雪様は前田が織田の傘下だ
つてこと知ってたんですか？」

「何当たり前のこと聞してるのよ。常識でしょ？」

転生前だったら分からなかったでしょうけど。勉強大変でした。

「あ、そうですか。当たり前ですか。だったらなんで対織田連合に入ろうなんて利家殿に聞いたんです？」

さつきから千歳はどうしたんでしょう。食中りでもしたんでしょうか？

「利家さんなら織田の所業を快く思っていないと思って。一応聞いてみたのよ。まあ、駄目元だったけどね。護るものがあるんじゃないわ」

「……あの、雪様は殺されるかもしか考えなかったんですか？」

「ん？ どういうこと？」

「いや、だって織田に表立って敵対するぞ。って言ってるようなものだったから……」

食事を再開していた利家さんと慶次の箸が止まる。ご飯をよそまつさんの手が止まる。……………。

「……ああ！」「……」

「ええええ！ 気付いてなかったんですか！？ 利家殿たちまで！？」

そ、そういえばそうでした！ 今の僕は良く考えたらいつ殺されてもおかしくない立場！ なんでゆっくりご飯食べてたんでしょう！……まあ、利家さんたちなら平気か。

「いや待て、雪殿！　もしやしたら信長様の密偵がいるやもしれん！　もしここで雪殿を逃がしたことが知れれば……！」

「ハッ！　前田の民が危機に……！？」

「ど、どういたしましょう、犬千代様！」

「ぐ、ぐぬう……」

た、大変です。このまま僕たちが行ってしまったら前田の民に被害が及ぶ可能性がある。ですが僕たちは死ぬわけにはいけない……くっ、どうすれば……！

「あの……」

「あ！　じゃあさ、じゃあさ！　雪ちゃんたちが俺を人質にとつて逃げたつてことにすればいいんじゃないか！？」

「「「それだあ！」「」」

慶次って天才ですか！？　超画期的なアイデアじゃないですか！　よし、そうと決まれば……！

「前田慶次は頂いて行くぞー。ではさらばだー！」　↑棒読み

「うわー。トシー、まつ姉ちゃん！」 ↑ 棒読み

「「慶次ー！」」 ↑ 棒読み

「……あの、屋根裏に密偵がいるんですけど……殺^やつときますよ？
……えい」

一時間後、僕たちは前田城からかなり離れた場所にいた！ え、かなりってどれぐらいだって？ あれです、かなりはかなりです。いや、しかし……。

「中々の名演技だったわね、慶次」

「ああ、そうだな！ うーん、しかし久しぶりに家に帰ったのにまた流浪の旅か。まあ、楽しくなりそうだから良いんだけどな！」

そう言って二カッと笑う慶次。あらやだイケメン……なんか電波受信しちゃいました。

「……結局密偵倒したの私ですよ。皆さんの棒演技は意味無かったですよ」

「千歳。今度は食べ過ぎないでね？」

「私をなんだと思ってるんですかぁ……異様に疲れた」

バキューム。

「ああ、そうそう。二人に言いたいことがあるんです」

「ん？」

僕と慶次は千歳を見る。……あれ？　なんか千歳の身体から黒い何かが出てるんですけど……。

「何あの茶番」

……家臣が怖くなってきた今日この頃でした。

その幻想（シリ阿斯）をぶち殺す！……です（後書き）

うわ、ひどい。作者は頭がイッちゃったようです。

すいません、遅れたうえにこんな駄目クオリティで……次は！次こそは！

というわけで次はみんな大好き（？）、ロケランをぶっ放すあの人が出ます。期待しないで待っててください！

パーティー更新

【天覇衝刃】真田雪

【?????】猿飛千歳

New！【絢麗豪壮】前田慶次

仲間が増えることに更新されてくパーティー表。雪のやつは適当。千歳はまだ秘密です。

吹雪と鴉 出会う二人（前書き）

筆頭、やっぱカッコいいなあ……↑昨日の戦国BASARA弐

はい、お待たせしました！皆さんお待ちかね（？）のあの人です！
作者の妄想が大量に入っているので、読む際はご注意ください！キャラ崩壊があるかもしれません！

吹雪と鴉 出会う二人

どうも皆さんこんにちわ。虎の姫こと前田慶次を誘拐（演技）した犯人、真田雪です。

個人的には中々の名演技……いえ、世界に通じる演技だと思ったんですが、僕の家臣（のはず）の千歳に一時間ぐらい怒られてしまいました。あ、慶次も一緒に怒られました。

しかし何故千歳はあんなに怒ってたんでしょう。今も慶次と一緒に考えてますが、全然分かりません。

「やっぱり自分を混ぜてくれなかったから怒ってんじゃないかな？」

「そうかしら？ だったら悪いことしたわね……」

「後で謝っとうござい！」

「そうね、謝りましょう」

「……お二人って、馬鹿ですよ」

二人で千歳に謝ることを決めた瞬間、何故か千歳の機嫌が更に悪くなりました。

くっ、一体私たちが何をしたと言っんです！ ただ華麗な演技をし

ただけじゃないですか！

「あれが華麗だとしたら、世の中の全ての演技は華麗になりますね」

おかしい、心を読まれた。しかも異様に冷たいし。やめて、そんな冷たい目で僕を見ないでください！

「ハア……で？ 次はどこに向かうでしたっけ？」

「次は、というか前田に行ったのはどこかの誰かさんが食糧を食べ過ぎたからで……」

「はい？」

「待ちなさい。流石にこれは千歳に非があるでしょ……」

「はい？」

「……なんか、ごめん」

理不尽です。これだけは確実に言えます、理不尽です。

「今向かってるのは……というか最初から言ってたじゃない、四国に行くって」

「言ってませんよ?」

「いや、言ったわよ……あれ?」

待てよ……? よくよく考えたら、僕はただ全国の武将に対織田連合に協力してくれないか、頼みに行くとしただけで、どこに行くかは決めてないような……ふう。

「慶次。四国の長宗我部ってどんな人が知ってる?」

「……逃げましたね」

千歳がジーっとジト目で睨みつけてくる。ええい、そんな目で僕を見るなあ!

「うーん、俺もあんまり知らないけど……豪快で、気っ風の良い男だって聞いているぜ? あ、あと……」

「あと?」

「メチャクチャでかい大剣を軽々振り回すっていう男がいるって聞いたこともあるなあ。噂じゃあの戦国最強、本田忠勝と互角に渡り合えるとか。まあ、噂なんだけどな?」

ふむ、そいつが神様の言っていた最後の転生者かもしれないね。

ちょっと確認してみますか。

《千歳。戦国BASARA……だったかしら？ それにそんな大剣を振り回すっていう武将はいた？》

Let's アイコンタクトタイム。

《ええと……島津義弘っていうのはいますけど、四国にいるのは長宗我部元親だけのはずなので、十中八九！ 転生者で間違いないと思います》

《そう。だったら快く協力してくれそうね》

慶次が言ってた長宗我部元親の近くに生まれたのなら、ちゃんと育つてるでしょうし。よし、これで目的地は決まった！

「それじゃあ、改めて！ 僕たちの目的地は四国！ 長宗我部に協力を仰ぎに行くわよ！」

「へへっ、四国かあ。楽しみだな！」

「ず、随分楽しそうですね、慶次さん」

「そりゃそうだよ、千歳ちゃん！ 四国には長宗我部の要塞があるんだけどさ、それがまたでかいらしいんだ！ 今まで四国に行く機

会が無かったからさ、楽しみで楽しみで！」

なんか慶次って子供みたいですね……ああ、そんなにハシャぐと夢吉が落ちますよ……ッ！？

「……銃声？」

「え？ 何を言ってるんですか、雪様。こんな場所で銃声なんて……」

「いいえ、今確かに……あっちか！」

「ちよつ、雪様！？」

千歳の声を見捨て、僕は銃声が聞こえた方向に馬を走らせ、森の中に入る。

銃声……しかも複数？ なんだってこんなところで……見えた！

森を出る直前で馬を止め、様子を窺う。

銃を持った五人程度の集団を、刀や槍を持った五十人ぐらいの集団が囲んで……って、あの旗は織田の旗じゃないですか！ 一体何が起きてるんですか……？

「追い詰めたぞ、雑賀衆。壊滅寸前まで追い込んだというのに、随分としぶとい」

織田軍の方のリーダーらしき人物が、銃を持った集団に語りかける。雑賀衆……？ 聞いたことが無いですが……どうやら修羅場のようですね。

「素直に織田に協力しないからこうなる。それを理解しているか？ 雑賀孫市……ああ、すまん。もう死んでいるか。わざわざ頭領の亡骸を運んで逃げるとは、ご苦労なことだな？ 死んだ者はもう役立たずだというのに」

「貴様あ！」

ニタリと嫌らしい笑いを浮かべて笑う織田リーダーに、右足の太股に銃を引つ提げ、首まで伸ばした茶髪の女性が、怒りを露わにしながら叫ぶ。

……彼女の後ろで倒れている男の人が、雑賀孫市という人でしょうか。全身に切り傷、更に突き刺さった矢……もう死んでいるみたいですね。

「貴様等に、頭領の魂を汚す権利は無い！」

……おそらく彼女たちは頭領の亡骸をちゃんと弔ってあげたいんでしょう。その一心でここまで逃げてきたと……。

さて、どうする？ 個人的には助けたい。けど、僕が加わったとしても六対五十。更に雑賀孫市という人をこれ以上傷つけないよう守りながら戦わなければならない。いくらなんでも不利過ぎますね……

…。

「今からでも遅くはない。我々に降れ」

「黙れ……！ 我らは我らの信ずる道を行く！ それを邪魔する権利は貴様には無い！」

女性が銃を突きつけながら叫ぶ。

…… かつこいいじゃないですか。ふう、戦力差がどうこうとか考えてた自分が馬鹿みたいです…… 行きますか。

「ならば仕方がない。全員突げ……！？」

「はい、ストップ……って、通じる？」

神速で近づき、右に握った鉄虎を織田リーダーの首に突きつける。
ちゃんと左に白虎も握っているので絶賛身体能力五倍状態です、フイーバーです。

「……何者だ？」

「とりあえず詳しいことは後で。その頭領って人、護りたいんでしょっつ。」

女性が銃を突きつけながら聞いてきたので素直に答える。すると女性
性は少し考えて、

「……腰まで伸びた茶髪に、黒と白の双剣。そうか、お前が……」
っただけ聞く。お前は敵か？」

「少なくとも敵じゃないつもりだけど、ね」

「……そうか」

どうやら納得してくれたようで、女性は銃を下ろしてくれた。
……自分でやっというて何ですが、地味に僕凄く怪しい気がしてきました。
あ、織田リーダーが無視されて顔を赤くしてる。

「くう！ 貴様、何者だあ！」

「え？ 何者かって？ うゝん……」

やっぱりここは虎の姫……と見せかけて。

「通りすがりのチート剣士よ。クソ野郎」

「か、金山殿ッ！ 貴様あ！」

首に突きつけていた鉄虎を振り抜き、織田リーダーの首を刎ねる。
周りの織田の兵士たちが叫び、僕に向かって突撃してきた……金山
っていうんですか、こいつ。まあ、心底どうでも良いですけど。

「はあっ！」

「ぎゃあ!？」

近づいてきた兵士の胸を切り裂く。
さて、今気づきましたが、マトモな戦闘初めてですね。まあ、問題
無いでしょうがね！

「くらえ……がつ!？」

「ん？ ……ああ、ありがとう」

背後から僕に切りかかっていた兵士を、女性が撃ち抜いた。
女性は僕に近づいてきて、背中合わせに立つ。

「背中がから空きだぞ……虎の姫」

「ごめんなさいね、普段優秀な家臣に任せてるものだから……任せ
ていいかしら？」

「初対面の相手、しかも素性も分からない相手に背中を任せるのか

？ 噂通り、随分変わった女だな」

女性と話している間に、僕たちの周りを兵士が丸く囲む。

……噂というのが少し気になりますが、後で聞くことにしましょう。

「不思議とあなたなら任せられる気がしたのよ……名前は？」

「さやかだ。虎の姫……いや、真田雪。味方してくれるか」

「勿論」

周りを囲んでいた兵士たちが、雄叫びを上げながら、一斉に襲いかかってくる。

……不思議と、負ける気がしませんね。

「さて……行くわよ、さやか。背中任せたわよ」

「ああ、承知した！」

さあ、嵐の始まりです！

吹雪と鴉 出会う二人（後書き）

出したかったんです、雑賀孫市…… ああ、まださやかでした。

今回の話は、完璧な作者の妄想なので、厳しいツツコミ等はご勘弁を。最終的には「BASARAだから」で納得してくれると幸いです。（え

次回も雑賀衆編です！

吹雪と鴉 誓う二人（前書き）

待っていた方々……いるか分かりませんが、お待ちさせて申し訳ありませんでした！中々文が浮かばず……しかも駄文です。台詞ばかりです。それでもいい、という方はどうぞ！

ちなみに作業中はNaked armsとSWORD SUMMITを無限リピートしながらやってました。時々寝落ちすることもある……あ、だから更新遅いのか。

吹雪と鴉 誓う二人

どうも皆さんこんにちわ。虎の姫こと通りすがりのチート剣士、真田雪です。

シャキーン！

……すいません、調子乗りました。心からお詫び申し上げます。いや、マジで「「「うおおおおお！」「」「……」」と。

「えい」

「「「ぐああああああ！」「」「」

織田兵が近づいて来たので、右手の鉄虎を一振りしたらなんか黒い衝撃波（月。天衝みたい）が出て、四人纏めて吹き飛ばした。

人が謝ってる時に近づいてくるとか卑怯です。こういうのはアレですよ、仮面。イダーの変身しかり、レンジャーの最後の怪人へのトドメの時の技の準備しかり、リリカルな魔砲少女の変身しかり…… あ、あれは一瞬で済むんですけど。…… まあ、とにかくアレですよ、人が何かしている時は手を出さない。というのは暗黙の了解のはずなんです。それを無視してくるなんて…… ショッ。ーの風上にも「「「おらあああああ！」「」「……」」むう。

「てい」

「「「ぎゃああああああ！？」」「」」

また暑苦しく叫びながら迫ってきたので、左手の白虎を一振りしたら、なんか吹雪が起こつて織田兵四人を星にしました……もう一度言います、星にしました。……おお！

「遂に僕はマ。ヤドを習得したのね！」

「……何を言っている？」

僕がマヒ。ドを使えたことに歓喜していると、さやかが両手に持つリボルバーを撃ちながら近づいて来た。おお、さやか！

「聞いて！僕は遂に吹雪が出せるようになったの！」

「奥州には雷を出す奴がいるぞ？」

「なっ……！？」

なんですって……？奥州には雷を使える者がいるんですか？で、ですが！

「精々ライ。インクラス……！」

「……そのらい。いんとやらは知らんが、確か落雷を出していた気がする」

「まさかのギガ。インクラス!？」

僕は地面に四つん這いになって蹲る。

馬鹿な……！ 前々からこの時代おかしいとは思っていましたが、まさかギガ。インクラスを使える猛者がいるとは……よし。

「西を回り終えたら奥州に行きましょう。必ず行きましょう」

「何を言ってるんだ……おっと」

「「「「ひでぶう!？」「「「「」

さやかがどこからともなく取り出したマシンガンで、織田兵を文字通り蜂の巣にする。

……本当にどこから出したんでしょう、あと戦国時代にマシンガン？

「いくらなんでもおかしいでしょう……やあ」

「「「「びゃあああああ!？」「「「「」

鉄虎と白虎を同時に振り下ろしたら、なんか虎っぽいのが出て、残っていた織田兵を全滅させました……ふう。今まで気づかないようにしてましたが……。

「どうやら僕は、バグキャラのようね」

「今更気づいたんですか？　そして何してるんですか？」

「おー、派手にやったねえ」

「千歳、慶次。ちょっと人助けをね」

やっと来た千歳と慶次に状況を説明する。

うん、多分これで合ってる。人助け：ストレス解消で、8：2ぐらいだけど、言わない方が良いでしょう。最近千歳怖いし。

「……雪。こいつらは？」

さやかが千歳と慶次にショットガンを向ける。

警戒するのは分かるんですけど、ショットガンは止めましょうよ……
…というかどこから出しました？

「大丈夫よ。信頼出来る？家臣と、信頼出来る人質よ」

「今？付けましたよね？」

「あはは、信頼出来る人質ってなんだよ？」

ダブルツッコミです。地味にアウェイ感が漂います。慶次は笑って
ますけど。

さやかは、そうか。と言うと、ショットガンを下げてくれた……ど
う仕舞うか分かるかと思ったんですが。

「そう言えば、さやかの仲間たちは？確か頭領——雑賀孫市の遺
体を守ってたわよね？」

「……ああ。頭領の遺体は無事だ。既に死んでいるのに、無事とい
うのもおかしいと思うがな」

そう言い、さやかはフツと笑う。

……そうですか。他の人たちは、頭領を守って死んだんですね。だ
ったら……。

「手厚く、弔ってあげなきゃいけないわね。どこで弔うの？」

「もう少し歩いた所に我ら雑賀衆の里がある。そこで、頭領と皆を
弔おう……共に来てくれるか？ 礼もしたいからな」

「喜んで。それじゃ道すがら雑賀衆のことを教えてくれない？
…どうして、織田に追われていたのかも」

そう言うのと、さやかは少し言葉を詰まらせる。

当然でしょうね、敗戦のことを語れと言ってるんですから。でも、いくら辛くても話さなければならぬ。そうしなきゃ……。

「……ああ。全て話そう。何があつたかを」

乗り越えられませんから、ね。

「——それでは、ここで待っていてくれ。里の皆に話をしなければならぬ……前田慶次。頭領たちを運ぶのを手伝ってくれるか？」

「ああ、任せろ」

さやかは慶次と一緒に頭領たちの遺体を入れたリヤカーを引いて、里の中に入っていった……森の中って、見事に里って感じがしますね。あ、ちなみにリヤカーは千歳がどこからともなく出しました。千歳は「……って、剣以外も作れるんですね」とか言ってたんですけど、何のことでしょう？

……それにしても。

「雑賀衆。主君を持たない傭兵集団。ただ純粹に雑賀衆を高く評価する者と契約を結ぶ」

「そして、雑賀衆を手に入れた者は戦に勝利することが出来る、ですか」

「そして織田がその力を手に入れるために、雑賀衆を城に呼び寄せた」

僕と千歳は先程さやかに聞いた情報を整理する。
そんな集団がいるなんて、知らなかったです。確かにそんな集団がいるなら織田が欲しがるのも分かります……が。

「織田が自分たちを無理矢理従えるつもりだと知った雑賀衆は、契約を拒否。城を去ろうとしたところを……」

「織田が攻撃、ね。自分に従わない者は殺す。織田のやりそうなことでだわ」

気に入らないモノは殺し、壊し尽くす。まるで子供ですね……そんな幼稚な子供に、お父さんは……っと。

「いけない、少し気持ちが高ぶっちゃったわね」

「勘弁してください。雪様の周りに吹雪が起きてましたよ？」

千歳が周りを指差す。そこには雪が積もって白くなった木が……ああ。

「僕もつくづく人外ね……雑賀衆か。さやかたちが味方になってくれたら、頼もしいのだけど……」

「ですが、雑賀衆は織田によって壊滅状態です。そんな状態では……」

「我らを望むか？ 雪」

「……さやか？」

里の入り口の方を見ると、さやかが立っていた。後ろには慶次がバツが悪そうに笑いながら立っている……なんですか？ というか我らを望むか、って……？

「どついつ意味？」

「そのままの意味だ。我ら雑賀衆を望むか？」

「だ、だって雑賀衆は今壊滅状態じゃ……」

僕の言葉にさやかはフツ、と笑うと、太股のリボルバーを抜き、高々と掲げる。

すると、さやかの後ろに鎧を着込んで、腰に刀を提げた人たちがぞろぞろ現れた。

僕と千歳が状況についていけず呆然としているのを無視して、さやかは続ける。

「里を守っていた者たちだ。そして、私が雑賀孫市を継いだ。死した者の志を継ぐ者がいれば……我らの命の炎は消えない」

雑賀孫市……めんどくさい、さやかの後ろにいる人たちが一斉に刀を抜く。……もしかして。

「……織田への復讐？」

「いや、違う。織田に負けたのは我らが甘かったからだ。それをとにかく言つつもりは無い……が、前田慶次から聞いたぞ？ お前、対織田連合なんて面白いものを作ろうとしているらしいな」

「……慶次」

「いや、ごめん！ 綺麗な女に詰め寄られたら、ねえ？」

ねえ？ じゃないです。確かに僕も雑賀衆を仲間に出たとは思いましたが、さやかが復讐が目的ではないと言っても、他の人がどう思ってるか「個は全、全は個」は？

「我らの信条だ。我らの想いは一つ。心配しなくていい」

……普通に心読まれたんですけど。なんででしょう。顔に出てるんですかねえ？

「……と、まあ、長々と喋ったわけだが」

僕が顔をムニムニ触っていると、さやかが真正面から僕を見つめてくる。その目は例えるなら……。

——鴉。

「先程から聞いているだろう？ お前はただそれに答えるだけでいい。

我らを望むか？雪」

……ふふ、そんなの答えは一つしかないじゃないですか。

「僕の銃となってくれる？雑賀衆」

「ふつ……我ら、誇り高き雑賀衆！」

さやかは叫ぶ。

「只今より、契約の赤い鐘を執行する！」

さやかは銃の引き金を引き、銃声が辺りに響き渡る。

「響け！」

我らが炎の音を打ち鳴らせ！」

さやかがそう叫んだ瞬間、鐘の音が響き渡る。

そしてさやかは銃を太股のホルスターに戻し、僕に向き直る。

「覚えておけ。これは我らの心、我らが炎、我らが誇り」

そこまで言っ、さやかは右手の拳を僕に突き出す。

「命の炎尽きるその瞬間まで、お前の力となろう」

「尽きさせないわよ？　僕は、誰も死なせない」

右手の拳を、さやかの拳と合わせる。契約成立……ってやつですか？

「……黙って見てましたけど、一気に大所帯になりましたね」

「良いじゃん、大勢の方が楽しいぜ？」

「食糧はどうするんですか？」

「千歳が自重すればいいじゃない」

「失礼な！　私はそんなに食べてませんよ！」

千歳が顔を真っ赤にして反論する。
どの口が言っんですか、このバキューム。

「大丈夫だ。食糧なら里にあった食糧を全て持っていくからな。一ヶ月は持つだろう」

さやかが救いの手を差し伸べてくれた。この場の全員で計算して一ヶ月ですか？

……まあ、それならなんとか持つでしょうね。多分。いや、おそらく。絶対？

「さて、それじゃあ行きますか。食糧が尽きる前に……長宗我部に」

「……長宗我部に行くのか？」

「？ 何か問題でもあるの？」

そう聞き返すとさやかは「い、いや、なんでも無い」と言って、黙ってしまった。

……どうしたんでしょう？ まあ、いいか。

「それじゃあ行きますよ！ 食糧が！ 食糧が尽きる前に四国の長宗我部に！」

「食糧食糧連呼しないでくださいッ！」

「四国♪ 四国♪ 楽しみだねえ〜！」

「四国か……ハア」

「おまけ 雪が奥州に行くと決心した頃の筆頭」

「ッ!？」

突然身体中に寒気が走ったので、周囲を見渡す。だが周りは普段と変わらないオレの部屋。

「……気のせいかな？ なんだってんだ、まったく……ッ!？」

茶に手を伸ばそうとしたら、ピキッという音と共に茶飲みに罫が入った。……ああ？

「さっきからなんなんだ？ まさか部屋にGhostでもいたりしてな。ま、そんなもんを恐れるオレじゃねえがな」

「政宗様！ 大変ですッ！」

「Ah？ どうした、小十郎」

オレの最も信頼出来る家臣であり、俺の背中を護る右目——片倉小十郎が慌てた様子でオレの部屋に駆け込んできた……なんだ？
どっかの国が攻めてきたのか？ だったら戦の準備……。

「ふ、吹雪です！ 吹雪がきました！」

「……What？ もう一度言ってみろ」

「だから吹雪です！ このままでは、手塩にかけて育ててきた野菜たちが……！ くそ、何故この時期に……！」

小十郎が怒り心頭といった様子でいきり立つ。誰に怒ってんだよ……
しかし。

「今日は変な日だな。雨でも降るんじゃないか？」

「雨より厄介なものが来てるんです！ 政宗様も畑を護るのを手伝ってください！」

「Ha？ ちょ、ちょっと待て、オレは……おい、腕引つ張んな、小十郎！」

なんでオレが畑を……引つ張んな、小十郎！　くそ、これも全部吹雪のせいだ、ちくしょう！

——まだこの時、伊達政宗は、本当に厄介な吹雪に目を付けられたことを知らない。

吹雪と鴉 誓う二人（後書き）

なんかもう雑賀孫市（さやか）が別人な気がするけど……そこは作者の文才の無さが齎したものです。ここの雑賀孫市はこうだと割り切ってくれたらありがたいです。

……ちなみに契約の時の言葉は動画見て確認しました。カッコイイですよ、やっぱ。

あ、あと千歳も神様にチート能力貰ってます。大体の人は分かっていると思いますがね？

パーティー更新

【天覇衝刃】 真田雪

【?????】 猿飛千歳

【絢麗豪壮】 前田慶次

New! 【煙鳥翔華】 雑賀孫市（さやか）

三人揃って……何レンジャー？（前書き）

めっさ遅くなりましたすいません！

これから長宗我部の話に入るのに、アニメで兄貴が……タイミング
悪いです（汗）

三人揃って……何レンジャー？

どうも皆さんこんにちわ。忘れているかもしれませんが、真田幸村が弟の、真田雪です。

今僕たちは、対織田連合に入ってくれないかどうか聞くために、【西海の鬼】長宗我部元親の治める四国に向かっています。

慶次の話によると、四国には『良く分からないけど多分、いやメチャクチャ凄いつて噂の要塞』があるらしいです……こんな情報じゃどんな要塞か分かりません。

「そういう訳だから千歳。長宗我部の要塞がどんな要塞か説明しなさい」

「また無茶振りですね……。記憶が曖昧ですけど、良いですか？」

「ええ」

千歳は目当ての情報を記憶の底から引っ張り出すように、うーんと唸り始めた。

ふむ、まあ千歳もこちらの世界でもう十八年生きてますからね。転生前の記憶も曖昧になってるんですね。戦国BASARA？を知ってるのは千歳だけなんですが「思い出しました！」お？

「確か……要塞【富岳】って名前でした!」

「へえ……それで? 外観はどんな感じ?」

「……え、えーっと」

千歳は再び悩み始めた……どうやら外観は覚えていないみたいね。

「まあ、気紛れだから。無理して思い出さなくていいのよ?」

「もう少し、もう少しなんです……。出掛かってるんですけど……
……あっ!」

む? 思い出したんですか?

「確か……もの凄く大きい船で、船の至る所に大砲が設置されてて、船首の辺りには巨大な大砲があるんです!」

「ダウト」

「えええ!?! 嘘じゃないですよ!」

大声を上げて反論してくる千歳。何を言ってるんですか、もう。

「そんな船あるわけじゃないじゃない。どこの白い木馬？ それだったら慶次の説明の方が分かり易かったわ」

「……ちなみに慶次さんはなんて？」

「良く分からないけど多分、いやメチャクチャ凄いつて噂の要塞」

「おかしいじゃないですか！ 私の説明の方が絶対信憑性高いですよ！」

耳元で戯言を言っている千歳を無視して、目の前の海を見る……ああ、言い忘れてましたけど、僕たちは四国までもう少しというところまで来ています。今は砂浜で休んでますけど。

あ、なんで僕と千歳の二人きりかと言うと、慶次とさやかは近くの村に食糧を貰いに行つて、雑賀衆の人たちはなんか森の中で訓練してます。たまに『ガンホー！』とか『サーイエツサー！』とか聞こえ「立て、このウ。虫どもがあ！」てき「サーイエツサー！」ます……聞こえてきましたね。

「ふう……それにしても、二人遅いわね」

「慶次さんがさやかさんにちょっかい出してるんじゃないですか？」

「そんなことしたら慶次、身体中に穴空けて帰って来るわよ？」

「……有り得ますね」

なんか二人を一緒に行かせたのは失敗な気がしてきました。
もし本当に慶次がさやかにしつこく迫ってたら、さやかのことだから……ふむ。

「千歳。少し様子見てきてくれない？」

「一人は嫌です。一緒に逝きましょう」

「嫌よ、まだ死にたくないわ」

「雪様はチートですから死にませんよ。逝ってください」

こ、このデカπ忍者……！ 主に対してなんて物言いを！ という
かさつきから行けじゃなくて、逝けって言ってますよね？ いいで
す、こうなったら意地でも逝かせてやります。

「いくら僕がチートでも、流石に銃は死ぬわよ。千歳なら平気でし
よう？ 忍者だし」

「雪様、忍者について何か大きな誤解をしていませんか？ 忍者は
そんな万能じゃありません」

「さやかがマシンガン撃ってきたら、いつもみたいにステイレット
投げまくればいいじゃない」

「あれやると疲れるから嫌です。雪様なら剣振り回せば銃弾弾けますよね？」

「疲れるからって……そんなんで良いんですか、忍者。大体剣振り回して銃弾弾けるわけ……案外弾けるかもしれません。だ、だからといって！」

「危険だと分かっただけで逝く馬鹿はいないわよ……！早く逝きなさい、千歳」

「今雪様が言った言葉、そのままお返しします、よ！」

「む！」

千歳が投げてきたステイレットを、白虎で弾く……良いでしょう、飽くまでも逝かないというならば！

僕は右手で鉄虎を抜く。ふふふ……。

「無理矢理逝かせてあげるわ……！」

「上等です。今日こそ決着を……」

「あつ、やつぱ……おい、その二人！」

「「あん！？……は？」」

若い男が呼ぶ声が聞こえた方向に、二人揃って振り向く。
その先には、大きく盛り上がっている水の塊……というか津波。え、
ちよ、ま……。

「嫌あああああ！」

「え、私泳げな……きゃあああああ！」

「ちよつと津波起こしちゃった……って、遅かったか」

ちよ、ちよつと津波起こしちゃったって何よおおおお！

「いや、ごめん！カジキと戦ってたらマジでやっちゃって、津波起こしちゃってさー……剣、収めてくれね？」

津波を起こしたらしい上半身裸のツンツンの黒髪の男が、首に添えられた鉄虎を指でツンツンつつく。

「嫌よ。あなたのせいで服がビショビショのスケスケよ。ついでに千歳も溺れかけて死にかけよ」

「死にかけたのに、ついでは無いんじゃないですか……？ げふ」

千歳が砂浜に倒れた……まさか泳げなかったなんて、知りませんでした。

あ、なんか服が透けて胸が……。

「ふんっ」

「痛い！　なんで踏むんですか!？」

「いや、ちょっとムカついて……。で？　あなた誰？　死ぬ前に名前ぐらいは聞いてあげるわ」

「俺死ぬの？　あ、ごめん。言うから。言うから剣下ろして」

仕方ないので鉄虎を下ろす。それを見て安心したのか、男は大きな溜息を吐いて、話し始めた。

「あー、俺は長宗我部直親^{なおちか}って言うんだ。あんたらは？」

「僕は真田雪。このデカ^πは猿飛千歳……長宗我部？　今、長宗我

部って言った？」

「ああ、俺は【西海の鬼】長宗我部元親の弟……真田？猿飛？」

お互いの名字を呼び合う。千歳の話だと、長宗我部には弟なんていないはず……それに、神様が四国の長宗我部に三人目の転生者がいるって言ってましたね、確か。

「……あなた。物凄く大きい大剣とか、持ってない？」

「……ああ、持つてる。あんたと、そっちの千歳だったか。あんたら、兄か弟はいるか？ 例えば……真田幸村に猿飛佐助とか」

「ええ、いるわ。僕の弟は真田幸村、千歳の兄は猿飛佐助よ」

それを聞いた直親は、やっぱりか……。と呟く。これはもう、確定ね。

「「転生者ね（か）」」

僕と直親の声が重なる。まさか長宗我部の元に辿り着く前に、出会えるなんてね……。

直親も同じように思ったのか、しきりにはあー、とかほおーとか言ってる……何故に？

「まさか、こんなところで会うなんてな……あんたはBASARA知ってるのか？」

「いいえ、僕は知らないわ。知ってるのはこっちの千歳よ」

「どうも、直親さん。私は猿飛千歳です……雪様、足どかしてください」

千歳の要望は無視してグリグリ足を動かす。千歳が下であうあう呻いてるけど無視です。

「しかし神様に聞いた通りだな」

「え？ 神様に会ったんですか？ 何を聞いたんです？」

「あー、戦国時代に異常にマッチしない僕ツ娘と、デカπ忍者が直に四国に来るから協力してやってくれって……おい、二人してどこ行くんだ」

無言で白虎を抜く僕と、ステイレットを構える千歳を見た直親が聞いてきた。

どこに行くって？ そんなの……。

「「バ神様（♪）を殺しに行くに決まってるじゃない（ですか）」」

「……お前らさ。神様がどこにいるか知ってんだろ？ 天界だぞ、天界。人様が行けるような場所じゃねーよ」

「だったら！ このまま負けを認めるしかないの！？ そんなの嫌よ！」

「どんだけムカついたんだよ！？」

あ、地味にツツコミが増えました。嬉しいです。

「ったく……で？ 神様が言っただけで、対織田連合を作ろうとしてるんだって？」

「ええ。長宗我部は、どう？」

「聞いてみなきゃ分からねえが……多分兄貴なら快く了承してくれるはずだぜ」

「おお……！ やりましたね、雪様！」

千歳の言葉に頷いて同意する。そうですか、それなら安心です。

「それじゃあこのまま四国に……あ、慶次たちがまだだったわ」

「……慶次って、前田慶次？ それに、たち。って……」

「慶次は途中で誘拐したの。でもう一人は「雪」あ、さやか」

森の中からさやかが何かを引き摺って出て来た。あれは……少し焦げてるけど慶次ですね。案の定ちよっかい出してたんですか。まあ、蜂の巣になってなくて良かったです。

「食糧はどうだった？」

「ああ、分けてもらえた。慶次が案外働いてくれてな……ん？」

慶次をブラブラ揺らしながら、さやかは直親を見る。

ああ、説明してませんでしたね。

「こちら、長宗我部の……」

「さやかさん？」

「直親か？」

直親がさやかを、さやかが直親の名前を呼ぶ……え？

「……はい？」

三人揃って……何レンジャー？（後書き）

長宗我部元親こと兄貴の弟にして三人目の転生者、長宗我部直親登場！

とりあえず津波を起こせるぐらいには強いです……アニメの秀吉見たからどこまでが強いのか分からなくなってきたwww

次回には兄貴が出ます！

何でもデカけりゃ良いって問題じゃありません（前書き）

随分待たせてしまいました！すいません、ネタが浮かばず……九日も放ったらかしでした。

ですが！今日のBASARAのおかげで一気にテンションが上がり！一気に書き上げることが出来ました！

これも全部兄貴のおかげだ！ナイスタイミング！兄貴iiiiiiii！
↑テンションがおいしいのでご勘弁

何でもデカけりゃ良いって問題じゃありません

どうも皆さんこんばんはー……調子乗りました、こんにちは。

仲間が猿飛佐助の妹に前田慶次、雑賀衆という色々と奇跡おかしな集団の
大将張っている【虎の姫】真田雪です。

今僕たちは目的地の四国まで、目と鼻の先という距離まで来ていま
す……今思えば長かったですね。

武田を出た直前に、どっかのデカデカ忍者に大量にあつた食糧を食い
散らかされたせいで、死にかけて。

まつさんに拾われて前田家でご飯をご馳走になったと思つたら、す
ぐさま慶次を誘拐（演技）。

適当に道を歩いてたら織田軍に襲われてた雑賀衆を助けるために織
田軍をデストロイ。

その後、良く分からないまま話が進んで、いつの間にかさやかたち
雑賀衆を仲間にし。

そして、今は……。

「あ、それじゃあさやかさんと直親さんは幼馴染なんですね？」

「ああ、そうだぜ。子供の頃、兄貴と一緒に三人で良く遊んでたなあ」

「私はあいつを幼馴染とは認めた覚えは無い」

「そんなこと無いだろ？ 昔はいつも兄貴兄貴って「黙れ。殺すぞ」……ロケットランチャーは勘弁してください」

長宗我部元親の弟、長宗我部直親とともに四国に向かっています。その道中で分かったことなんですが、さやかと長宗我部兄弟は幼馴染だったらしいです。さやかは否定していますが……バレバレですね！ あはははは。

「あはははは。僕に銃は通用しないわよ、さやか」

「……チツ」

さやかは舌打ちして、僕に向けていたりボルスターをホルスターに戻す。

ふっふっふ、ああは言いましたが……銃は正直無理だと思っています！ ですが僕のチートさを知っているからこそあのようハツタリが通じるわけですよ！ あーっはっはっは！

「……」

「ごめんなさい、僕が悪かったわ。だから無言でライフルを向ける

のはやめて」

咄嗟に土下座して謝る。ライフルは……ライフルはもっと勘弁です。

「雪様って学習しませんね。あそこに前例があるっていつのに」

「ん？ 千歳ちゃん、俺の顔に何かついてる？」

ジト目で睨む千歳にキョトンとした様子で返す慶次。
さっきまでブランブラン引き摺られてたのに、復活早いですね。流石は前田の一族です……何言ってるんでしょう、僕。

「しかし運が良いですね、僕たちは。こんなところで偶然長宗我部に関係……というか長宗我部に会えるなんて。なんでここにいるんですたっけ？」

「ああ、カジキと戦ってたらいつの間にかこの辺りの海に……」

「「ダウト」「」

「だから本当だって！　せめて最後まで聞けよ！？」

「「いや、だって……ねえ？」」

「ねえ？　じゃねえよ、てめえら！」

顔を真っ赤にして抗議してくる直親を冷めた目で見下……見つめる僕と千歳。

まあ、大方神様（♪）にチート能力を貰ったんでしょうが……どんな能力を貰ったんでしょうかね？ 聞いてみましょうかね。

《ちなみにどんなチート能力貰ったの？》

Let's アイコンタクトタイム！

「……あ？」

失敗！ ……あれ？

《千歳、千歳！ どうして通じないのかしら！？》

《普通は通じないと思いますよ……というか寧ろ私たちはなんで出来るんです？》

《多分友情・努力・勝利のおかげよ…… P S Y。E Nの続きが気になるわ》

もうヒリユーは帰って来たんでしょうか……ああ、気になります。

「随分と懐かしいですね、ジャ。プ……プ。ーチはどうなったんでしょうか。ヨ。様……間違えた、愛。編は終わったんでしょうか？」

「多分また修行編に入っているはずよ。僕はもう諦めてるわ」

「……二人とも、何の話してんだい？」

「ああ、一護。何でも無いわ」

「一護？」と言って悩み始めた慶次。

「というか途中からアイコンタクトタイムじゃ無くなってましたね……失敗です。」

「で、直親。要塞……【富嶽】だったかしら？ まだ着かないの？ もう随分歩いた気がするけど」

「ん、ああ。そこを曲がったらもうだぜ……ほら、あれが俺たちの家、要塞【富嶽】だ」

「へえ………は？」

曲がった先には、大海原の向こうに浮かぶ島に巨大な戦艦があつて、その上に城。

……それだけでもの凄く驚きましたが、一番驚いたのは……。

「何よ、あのでつつつつつかい大砲……」

船首の辺りにあるとてつもなくでかい大砲。なんですか、アレ。尾張ぐらいには届くんじゃないですか？

「ね？　ね？　だから言つたでしょう！？　私の言つた通り……踏まないでくださいよおおおお」

「あれが俺ら長宗我部の要塞^家！　【富嶽】だ！」

「あれが、【富嶽】ねえ……凄いじゃない」

今からあそこに行くんですね……楽しみです。

「まずは足をどかしてくださああああい！」

「おおっ……近くで見ると……」

「またでつかいなあ！ 夢吉、お前が何匹入れば足りるかねえ？」

「キッー！」

【富嶽】の真下で、僕たちは感嘆の息を漏らす。というか僕、初めて夢吉の鳴き声聞いた気がします。

「ちょっと兄貴呼んでくる……さやかさん。とりあえずマシンガンしまつて」

「ああ、すまん。つい」

「ついでマシンガン出すのは止めてください……」

直親と千歳に咎められたさやかは、渋々マシンガンを海に放り投げる……何故放り投げるんでしょう。というかさやかは色々謎が多いですね。どこからともなくロケットランチャー持ち出すし、弾薬は無限だし……いつ段ボールを出すかワクワクしている自分がいます。

「まったく、危ねえなあ。とにかく俺は「おう！ 帰ってきたか、直親！」「兄貴！」

上から聞こえた声に振り向くと、上の甲板に人が立っていました。紫色のジャケット？のようなものを肩にかけて、でかい碇を持って

いる、左目に眼帯を着けた銀髪の男。あれが長宗我部元親ですかね？ いかにも、って感じです。良く分かりませんが、そんな感じがします。

「よ——つと。お前、カジキを獲って来るって言ってた癖に、こりやまたカジキ以上に面白そうなもんを……ん？」

「……チッ」

元親さんがさやかに気付く。瞬間、さやかは舌打ち……怖いんですけど。

「よう！ さやかじゃねえか！ 久しぶりだなあ！」

「煩い寄るな喋るな撃つぞさやかと呼ぶな撃つぞ」

二回撃つぞって言いましたよ！？

「何言つてんだ、お前はさやかだろ？ ……ん？ 頭領はどうした。……って、さやか。まさかとは思うが……」

「……今は私が現雑賀孫市だ。だからさやかと呼ぶな」

「……まあ、どうなるうとお前がさやかってことは変わんねえからよ……おっと危ねえ」

至近距離から放たれた弾丸を元親さんは碇で防ぐ……あ、やっぱり防げるんですね。

今度やって……みるのは怖いから千歳にやらせましょうそうしましょう。

「ッ！？ 殺気……！？」

「で？ そっちの嬢ちゃんたちはどのどいつだい？」

「ああ、僕たちは武田軍の使いと言ったところですかね……僕は真田雪。一応はこの集団の大將です」

「真田雪ってえと……【虎の姫】か。遠路遙々ご苦労なこった。何の用だい？ ここに来たからには何か理由があるんだろ？」

「ど、どこから！？ どこから殺気が……？」

ええ、本当に遠路遙々でしたよ。どっかのデカπ忍者に食糧……つて、これ最初に言いましたね。とりあえず用件を言うことにしますかね。

「ええ。長宗我部に、対織田連合に入って欲しいの」

僕がそう言つと、元親さんはほう？と息を漏らし、ニヤリと笑った。

「中々面白そうな話じゃねえか。良いぜ、詳しくは中でだ。着いて来な！」

碇を肩で担ぎながら歩き出す元親さん。

その後ろを歩き出す僕、慶次、雑賀衆のガンホーたち、マシンガンを構えているさやか……危ないです。

「え？ ちょっと待ってください、私これから死亡フラグひっ付けたまま行くんですかぁ!？」

くおまけ とある半兵衛の直感く

「ッ!？」

何か懐かしいような声が聞こえ、周りを見渡す。
だが、何もいないし感じない。なんだ、気のせいか……。

「どうしたのだ、半兵衛？」

前を歩いていった秀吉が訊ねてくる。

ああ、いけない。心配させてしまったかな？

「いや、大丈夫だよ。なんともない」

「そうか」

そう言って前を向く秀吉。

そうだ、キミは前だけ見ていれば良い。キミの歩みを邪魔するモノは僕が取り除くよ……しかし。

さっきのは何だったんだろうか？ なにかこう、上手く言い表せないが、仲良くなれそう……そんな感じがした。

そして同時に頭に浮かんだけど……死亡フラグ、とは何のことだろう？ 確かに僕は病を持つてはいるが、まだ死まない……いや、死ぬわけにはいかない。なのに……。

この言葉が死神みたいに見えてくる。一体どういうことなんだ……？

「……さっき微かに聞こえた声。あの声の主もこの言葉に苛まされているのか……？」

……もし出会えたならば、少し話してみたいね。

何でもデカけりゃ良いって問題じゃありません（後書き）

さやかと長宗我部兄弟の関係は自分の妄想です。こういう関係も良いと思います！

千歳と半兵衛に良く分らないフラグが立ったのは秘密www

うーみーは広いーな……大戦争！（前書き）

どうやら作者は自重を外した模様です。

ネタが過去最大、分量も過去最大？なのでご注意ください。

ちなみに作者は元好きです。けどオクラは食べられません（え

うーみーは広いーな……大戦争！

どうも皆さんこんにちはったらこんにちは。

最近知名度が鰻登りな気がする、【虎の姫】真田雪です。

今、僕たちは、やっと辿り着いた四国の、四国を治める長宗我部の要塞【富嶽】の中の一室にいます。

その部屋の上座にある座布団に、交渉相手である長宗我部元親さんが豪快にドカツと座り、その横には元親さんの弟であり、僕に千歳と同じ転生者でもある長宗我部直親が立っています。

それに応じて僕たちは、各自が持つ武器を自身の横に置いて正座する。

交渉に来てるわけですから、そうしないと失礼ですよ。

僕は鉄虎と白虎、以前にかすがから貰ったクナイを。

千歳はステイレットを五十本以上……多すぎです。

慶次は超刀【朱槍】とついでに夢吉……夢吉は別に良いんじゃないんですか？

さやかは右の太股に下げたりボルバー六丁、ショットガン、マシンガン、ライフル、段ボール、スナイパーライフル、ロケットランチャー、マグナム以下省略……段ボール持ってたんですか！？

雑賀衆の皆さんは……って。

「道理で狭いと思ったわ！ 一部屋に五十人以上も入ってたら当たり前よ！ ほら、僕たちだけで充分だから外で待ってなさい！」

僕は部屋を圧迫している原因である雑賀衆の兵たちに叫ぶ。
すると左頬に十字傷がある黒髪のざんばら切りの男の子が、手を後ろで組みながら僕の前に出る。

「しかし少佐殿！ 我々は少佐殿たちをお守りするという任務を遂行中であります！ プロの傭兵として、任務を途中で放棄するわけには参りません！」

「誰が少佐殿よ！？ とうかなんで僕がツツコミなの！？ 暑苦しくて堪らないから、部屋の外に出て扉を守ってなさい！ 何も無いと思うけど！」

「しかしそれでは少佐殿が……」

ええい、しつこい！

「上官命令よ！」

「ッ！ 了解しました！ お前たち、行くぞ！」

「ハッ！ 軍曹殿！」

僕が命令すると、男の子は大きな声を上げ、他の兵たちを連れて部屋の外へと出て行った……なんかガチャガチャ聞こえるんですけど。

「全く……さっきも言ったけど、なんで僕がツッコミなの？ ツッコミは千歳の役目……どうしたの？ そんなに震えて」

「いえ……やっぱりステイレット一本ぐらい持つてて良いですか？ 色々と不安なので……」

千歳は正座をしながらも何故かガクガク震えていた。

そして震える左手を山積みになされているステイレットに……おっと。

「てい」

「きゃあああ！？ な、なんで駄目なんですか！ というか何故クナイを突き立てるんですか！？」

「それはこっちの台詞よ。交渉に来てるのに武器を持つなんて……恥を知りなさい」

「今の雪様にだけは言われたくないです！」

む、心外です。このクナイが武器に見えるんですか？
かすがから貰った大切な物を武器として使うわけが無いじゃないですか。

「これは千歳お仕置き用の道具よ」

「武器より質が悪い!？」

「あー、そろそろいいか？」

千歳といつもの漫才(?)をしていたら、直親が呆れた様子で笑いながら話しかけてきた。

ああ、交渉しに来たんです。忘れるところでしたよ。

「——では。話をしてもいいかしら？」

「おう。詳しく聞かせてくれよ。その、対織田連合ってやつのことをな」

元親さんは膝に手を置いて、ニヤリと笑う。

……では。これまでのことと、対織田連合の目的等を話しますかね。

千歳はっ、デッカッパイ！

「……ということがあったんです」

「ほう、成る程なあ」

「待ってください」

元親さんが話を理解した直後に、千歳が何故か手を上げて待ったをかけてきた……なんなんですか、もう。

「いやいや。さっきの音、なんですか？ 某竜のクエストのレベルアップみたいな音が……」

「何って……良くあるじゃない、アイキャッチみたいなものよ」

「随分悪趣味なアイキャッチですね！？ というか最近……いえ、前から雪様は私に頼りすぎです！ いつか私をオチに使えない時が来るかもしれないんですよ!？」

「いや、どんな心配だよ」

「やっぱ千歳ちゃんは可愛いなあ。特に怒ってるところが」

「前田慶次が汚染されてやがる……！」

直親が地味にツッコミをこなしてくれていますね。

流石（？）長宗我部一族です……いえ、今はそれよりも！

「千歳、諦めるのよ。あなたは一生イジられキャラとして生きていくしかないの。それが嫌なら今すぐにそのデカπを切り落としなさい。さあ！」

「嫌ですよ！ それとデカπデカπ言わないでください！ 結構気にしてるんですよ！？ 動くのに邪魔だし……きゃあ！？」

傍らに置いておいた鉄虎と白虎で千歳に斬りかかる。

ふ、ふふふ……。

「あなたは今、全世界のまな板を侮辱した！ 良いわ、良いわよ、良いでしょう。」

——戦争をしましょう、千歳」

「くっ……良いでしょう、受けて立ちましょう！ あいあむざぼーん……」

「ここで喧嘩するんじゃない？ さやかさん、どうにかしてくれよー」

「こうなったら止まらんから諦めろ」

「さやかさん！？ そんなこと言わずに「大変だ、兄貴！直坊！」あ？ どうした！」

僕と千歳が臨戦態勢に入ろうとした瞬間、長宗我部の兵らしき人が、慌てた様子で部屋に駆け込んできた。どうしたんでしょう？

「も、毛利が攻めて来ました！」

「んだと？ あの野郎が？ なんだって今……」

元親さんが顎に手を当てて考え始める。

毛利……確か長宗我部のお隣さんでしたか？ 神様に長宗我部に行けって言われたからスルーしてましたが……。

「……まあ、考えても仕方がねえな。盛大にお出迎えしてやろうじやねえか！ 大筒の準備は出来てるな？」

「い、いえ。それが……」

「あん？ ハッキリ喋りやがれ」

「お、大筒が原因不明の動作不良で稼働しねえんでさあ！」

「……ああ？」

長宗我部兄弟が二人合わせて呆けた声を……全然呆けてませんね、
凄みが滲み出てますね。

確か大筒って……あのとんでもなくデカい大砲のことですよ。
あれが動作不良って……整備で失敗でもしたんですかね？

「じ、実は、今日の整備担当の奴の姿が見えねえんでさあ！ 多分
そいつが……」

「馬鹿野郎！」

「がっ！ あ、兄貴？」

元親さんが報告に来た兵を殴り飛ばした。
……なんか口を出せない雰囲気ですね。

「もしそいつがやったんだとしてもなあ、俺は仲間を信じるぞ！
仲間を疑うなんて言語道断！ それが俺たちだろうが！ それが長
宗我部だろうが！」

「兄貴……すいませんっした！」

「分かれば良いってことよ……しかし、負ける気は毛頭無いが、先
手が取れねえってのは……」

ふむ、ではここは僕たちが行くべき「我らが行こう」さやか？

さやかが床に降ろしていた武器たちを拾い上げ、元の場所に……一瞬で消えた！？ 一体どこに仕舞ったんです！？

「我らが毛利の奴らに先手を打つ。その間に大筒を直せ」

「はあ？ さやかが強いのは知ってるし、【虎の姫】たちの噂も聞いているが、お前らだけじゃ……」

「負けるつもりなど毛頭無い。まあ、そんなに心配なら直親を借りていくぞ。それとさやかと言うな……雪、行くぞ」

そう言つと、さやかは早足で部屋から出て行つた。

さやかに続いて部屋の外にいた雑賀衆の兵たちがガチャガチャと音を立てながら続く……さっきの軍曹って呼ばれてた男の子が僕に敬礼して去って行っただんですけど。あの子どこまで出しゃばる気ですか。超キヤラ濃いんですけど。本当に勘弁してほしいんですけど。

「あんまりキヤラ濃かったら僕の出番が減るじゃない！」

「雪様ほど濃い方は早々いないと思うので、安心してください」

——と言つ訳で。やってきました船の上。

元親さんが貸してくれた船の上に、僕たちは乗っています。
ちなみに雑賀衆の皆さんは【富嶽】の上から銃で援護です……やっ
ぱりあの子、凄く濃い。

「うわーお。船が一杯ね」

僕たちの視界一杯に広がる船、船、船。

船一つにどれだけ兵が乗ってるんですかねえ……軽く鬱になります。

「というかさやか。僕たちだけで大丈夫なの？ 戦力差がありすぎ
ると思うけど」

「……いや、お前だけであれの半分は殲滅出来るんじゃないか？」

あはははは、そんなわけ……無い、ですよ？

「大丈夫かい？ 千歳ちゃん」

「あ、ありがとうございます、慶次さん。うう……さっきから感じてた死亡フラグはこれだったんですね。まさか海に出ることになるなんて、迂闊でした……」

視線を横に向けると、千歳が船酔いしています。そつえば水苦手でしたね、忘れてました。

「まあ、これで千歳の胸に流れ矢でも刺さってくれれば僥倖ね」

「お前、どんだけ胸に恨みがあるんだ……？」

「ヴァ。が。爪の男を恨むぐらい」

「それは相当だな」

「一部の人にしか分からないネタで、私の死亡フラグを拡張しないでください！」

転生者でしか分からないネタで漫才を披露する僕たち。

見事なまでに慶次とさやかは置いてきぼりです。逆に知ってたら怖いですが。

「——よし。射程距離に入った。一発大きいのを飛ばすから、お前たちはそれに乗じて突入しろ」

「……って、さやかさん。一発でかいのって、何を飛ばすんだ？
さやかさんなら、撃つ、とかそっち系だろ？」

「いいや、飛ばすで合ってるぞ？」

「は？ それってどういう……ぬおおおおお！？」

さやかは一瞬で直親の背後に回り込んで、直親の背中を蹴り飛ばして、海に叩き落した……一発って、直親のことですか。

「くっ……ちくしょう！」

直親は海に堕ちる直前に背中に背負っていた大剣——完全にとある。術の後方さんの剣なんですが。神様に何の能力貰ったか丸分かりです——を抜き、その上に乗る……サーフィン？

「ああ、もう！ こうなったら——やけだ！」

直親が大剣に乗ったまま毛利の船に突っ込み、船を粉々に破壊する……ば、馬鹿な！

「チーフ！ チーフじゃないの！」

「黙れえ！ どうせス。ロボ仕込みの俄か知識だろうが！ ……俺もだよ！」

「千歳ちゃん。あの二人はさっきから何を話してんだい？」

「知らない方が幸せです」

千歳が遂にツツコミをしてくれないようになってしまいました。職務怠慢というやつですね。

「まあ、良いわ。慶次、行くわよ」

「おう……千歳ちゃんはどうするんだい？」

【朱槍】を一振りした慶次が、船酔いでふらふらしている千歳に訊ねる。

千歳は込み上がって来てる（っぽい）吐き気を抑えながら、こちらを向く。

「……私はここでチマチマやってます。海に落ちたらお終いなので」

「……ヘタレ。出番が減るわよ」

「出番と命なら、迷わず命をとります……というかメタ的発言はそろそろ控えましょう、今回は既に許容量オーバーです」

……確かに今回は少し調子にノリまくっている気がしないでもないですが。

「そんな小さいこと気にしていたら人生どうにもならないわよ！
行くわよ、慶次い！」

「おう！」

「……毛利軍の皆さん。生き残ってください」

僕と慶次はその場から飛び出し、毛利の船に乗り込む。
ふっふっふ、いるわ、いるわ、雑兵共が！

「せい！」

「「「うわああああ！？」」」

乗り移るや否や、速攻で鉄虎を振り下ろし、船の甲板に叩きつける。
瞬間、船が真つ二つに割れて、乗っていた兵たちが海に落ちる……
つと。

船が沈む直前にジャンプして、近くの船に移動する……ふう。

「自分まで落ちたら世話ないわね……危ない危ない」

「……で？ 何故俺の肩の上に乗る？」

近くから不機嫌そうな声が聞こえたので、周囲を見渡……す前に下を見たら、頬をひきつらせながら僕を見る直親がいました。
ああ、今僕がいるの直親の肩の上ですか。

「まあ、楽だから良いわ。さつさと片付けなさい」

「なんで俺が命令されなきゃいけない——だよっ！」

一拍の気合いの声と共に放たれた大剣の一撃が、荒れ狂う風の衝撃波を生み出し、振るわれた先に浮かんでいた船を全て叩き潰した……
わーお。

「師匠。次はあつちよ。早く早く」

「師匠ってなんだよ？ てか命令すんな……そんな早く終わらせたいなら自分で終わらせてこい」

そう言うのと直親は、左手で僕の首根っこをむんずと掴み、大きく振りかぶって……ゑ？ ちよっと、待つ……！

「ほい」

「投げるんならもつと気合い入れて投げなさいよおおおお！」

なんか軽い感じで投げられたのに、凄い勢いで飛んでます！ 鳥になった気分です……なんでこんな状況でそんな思考が浮かぶんでしよう、僕。

ふと下を見ると、慶次が【朱槍】を鞘に入れたまま振り回し、毛利の兵たちを海に吹き飛ばしている……慶次も大概みたいです。

更に横を見ると、さやかがロケットランチャーをぶっ放して……容赦ないですね。

千歳？ ゲロってました。

あー、そんなことをしてる内に地面が……うおおおお！？

「ッ！ ……ナイス、着地！」

地面に鉄虎と白虎を突き刺して衝撃を無くし、見事に着地。100点100点100点の高得点だと自負「ほう？ 単身で突っ込んでくるとは、良い度胸ではないか」ん？

前から聞こえた声に顔を上げると、全身緑色の服をして、フラフープみたいな武器を持ったイケメンさんが、僕を見ていた。イケメンさんの後ろには、弓を構えた兵たちが沢山います……ここ、どこです？

「…………茶の髪と輝くような美貌、そして黒と白の双剣…………そうか、貴様が…………」

「あの、ここどこ？　そしてあなたは誰？」

なんかブツブツ呟いてるイケメンさんに訊ねる。状況が良く分かりません。

「知らずにここに来たのか？　我は毛利元就。一度会って見たかったぞ…………【虎の姫】」

どうやらイケメンさんは毛利元就というらしいです…………毛利元就？
落ち着け、K O O Lになりなさい、雪。もう一度状況を確認しましょう。

後ろを向くと、度々起こる衝撃波っぱいもので吹っ飛ぶ船。

再び前を向くと、イケメンさん——毛利元就に、弓を構えた兵たち。

…………ふむ。

「直親コロす」

「……？」

首を傾げる元就さん、可愛いです。

うーみーは広いーな……大戦争！（後書き）

戦争！そして何故か出会ってしまった雪と元就！雪の運命や如何に！

……とか言ってますが、のらりくらりと生き延びる気がしてなりません。もう雪は作者を無視して勝手に動きます。

あ、今回はおまけはお休みです。次回はやります……キーワードは
小山田殿（え

うーみーは広いーな……お茶が美味しい！（前書き）

昨日のアニメBASARAに遅ればせながら投稿！

何故かアニメBASARA見た後はグングン書けます。これは良い兆候ですね……ア・ニ・キ！ア・ニ・キ！ア・ニ・キ！

注意！

今回の話には大幅なキャラ崩壊が含まれています！分かりやすく言うとおくら……毛利元就がキャラ崩壊です。オクラって感じになってます！ご注意ください！

うーみーは広いーな……お茶が美味い！

「てやあ！」

目の前の毛利軍の船目掛けて、大量のステイレットを投げる。

私が投げたステイレットは、船を完膚無きまでに貫いて、破壊した……ふう！

「おえ……うえっぷ」

気持ち悪い！ 船酔いするのに無理してカッコつけたのがいけなかった！

吐きそうです……というかもつ吐いていいですかね！？ よーし、吐いちゃいますよー！

「せーの「吐くな」あだあ！？」

蹴られた！ さやかさんに蹴られゲボゴボガバゲバゲエビユビャ………。

「む。死んだか」

「いや、死んだか。じゃないでしょ、さやかさん」

「おーい、千歳ちゃん。生きてるかー？」

……ガボグエ。ツクアもどき死ねグバア。

「……アック。もどきって俺のことか？ 俺のことなのか？」

「何の事を言ってるんだ？ おい、前田慶次。引き上げてやれ」

「ああ、分かった……よつと」

……慶次さんが朱槍の先っぽを私の服に引っかけて引き上げてくれました。

外から見たらシュールな光景なんでしょうね……なんか複雑です。

「ハア、ハア……死ぬかと思いました」

「船の上で吐こうとするお前が悪い……ふっ」

さやかさんは私を咎めながらも、ロケットランチャーで毛利の船を沈める……これはもうパワースインフレですね、恐ろしいほどのインフレです。

まあ、私も神様からチート能力は貰いましたが……制限がありますからねえ。

……ん？　そういえば、チートの代名詞のあの方がいませんが……どこでドンパチやってるんでしょう？

「慶次さん。雪様を知りませんか？」

「ん、雪ちゃん？　そういえば見てないなあ、最初は俺と一緒にいたんだけど……」

「いなくなっただと？」

慶次さんはうんうんと言いながらしきりに頷く。
うーん、それじゃあ次は……。

「さやかさん。雪様「知らん」すいません」

お取り込み中でした。デストロイ的な意味で。
さて、それじゃあ残るはあのアツ。アもどきですか。あまり期待は出来ませんね、なにせもどきですから。

「で、もどき。雪様見ませんでした？」

「俺にはお前をぶっ叩く権利があると思う」

「はいはい、後で遊んであげますからさっさと雪様の居所を吐いてください」

まったく。もどきの癖に生意気です。

「後で殴るかな……で、雪だったか？ あいつなら投げた」

「……は？ すみません、もう一回」

「だから、投げた。確か……あっちの辺りに」

直親さんが指を指した方向を見る……毛利の船が一杯ですね。

……HA？

「ま、まさかあの船の大群の中に投げたんですか！？ いくら雪様が超絶チートで軽く不死身っぽくても人間なんですよ！？ なんてことするんですか！」

「お前全然心配してないだろ！？ 流石の俺もそんなことしねえよ！ もっと先に投げたんだ！」

「いや、それも投げ過ぎでしょう！ ……もっと先？」

私は再度毛利の船が密集している方向を見る。

え、あの先って……毛利の船がやってきてる所ですよ？ それはつまり毛利の本陣……。

……お、落ち着け、私。くーる、くーるになるんです。落ち着いて状況を整理しましょう。

1・直親さんはチート能力『ア。クアもどき』の力で雪様を投げた。

2・雪様は毛利の船を超えていった。

3・その先にあるのは毛利の本陣。

4・本陣とは？ 大将がいる場所。大将を護るために兵も一杯いる。

……。

「何やってんですか、直親さん！ 流石に本陣はマズイでしょう！
？ 雪様でも流石にヤバいですよ！？」

「だ、大丈夫だ！ 多分あいつなら逃げられるはずだ！ 多分！
おそろく！ 絶対！」

「この馬鹿！ 会ったばかりですけど馬鹿！ くそ。そこに溺れて溺死しろ！」

「……想像しちまったじゃねえか、くそっ！」

想像力豊かなのも考えものですね……じゃなくて！

「一応、一応私は雪様の家臣！ 主を護るのが一応の私の使命！
私は雪様を一応助けに行きますから、皆さんはここで私の道を切り
拓いて下さい……頼みましたよ！」

そう言い残して私は船を飛び去った。
あれ？ なんか私カツコ良くないですか？ ヤバくないですか？
これは来てますね、私の時代が来てますね！ 後は英語を出来るよ
うにして詠唱が完璧に出来るようになれば……ふっふっふ、夢が広
がります！

「……あいつは本当に心配してんのか？」

「やっぱり面白いなあ、千歳ちゃんは」

「いいから働け」

「「「ぎゃあああああ！？」」「」」

「む！？」

何か邪な気配を感じました。何でしょう、この感じ。良く分かりませんが無性に腹が立ってきました。

「どうした？ 虎の姫」

「ああ、なんでもないわ。ちょっとね……ズズ、このお茶美味しいわね」

「安芸の最高級品だからな。当然だ」

元就さんが湯飲みを両手で持ちながら答える。
はあ……最高級品ですか。なんだか畏まっちゃいますね……ズズ。

あ、どうも皆さんこんにちは。
遅ればせながら【虎の姫】真田雪です。

ま、正直説明するの面倒なのでこのままいきます……え？ 色々とおかしい？ どこがおかしいと言っんです、僕は至って正常です。全く失礼ですね。ズズ……あ、お茶無くなった。毛利兵さん、お茶ー。

どうもありがとうございます……あ、やっぱり美味しい。安芸は良い場所ですね、今まで旅してきた場所で良かった場所ランキングTOP3に入りますね。

あ、ちなみに一位は加賀です。まつさんの料理は絶品ですからね、武田に帰る途中に立ち寄りましょう。人質交換とか言って慶次とご飯を交換すれば織田軍に怪しまれないですよ……おお、我ながら完璧な作戦です。そこに痺れる憧れズズー。

「……ふむ」

「ん？ どうしたの？」

元就さんが何故か分かりませんが見つめてきます。
まさか惚れちゃいました？ あらあらまあ。それは困っちゃいますね。

「駄目よ？ 僕が欲しいならまずは千歳を倒して、次に佐助、幸村、最後にお館様倒さなきゃ駄目だから。正に無理ゲー」

「……いや、何。噂に違わぬ美貌だと思ってな。見惚れてしまった」

ふ、普通にスルーして気障な台詞をサラッと！？ 侮れません、このイケメン！

……え？ だから説明しろって？ 全くもう、仕方ないですね。それじゃあどうして僕が元就さんとゆっくりお茶を飲んでもかを簡単

に説明してあげます、感謝してください。

直親に投げられて、僕は毛利の本陣まで来ちゃいました。そこは本陣ですから当たり前ですが、元就さんがいました。

で、周りの兵たちが僕に弓を向けてきたんで、『あ、こりゃヤバいな』と思ったわけですよ。まあ、僕は逃げようと思いました。そうしたら元就さんが僕を呼び止めて『我と茶でも飲まぬか？』って言うてきたんです。で、その結果が……。

「はあー。やっぱり美味しいわ」

「それはなにより」

コレというわけです……は？ 説明が適當？ これでも精一杯説明した方です、文句は言わない方向でよろしく願います。文句言った人は秘剣・燕返しでバラバラにしてあげます、使えませんが……。

「虎の姫。一つ聞きたいことがある」

「何かしら？ お茶のお礼代わりに、なんでも答えるわよ」

ま、流石に武田の兵はどれぐらいだとか、長宗我部の戦力はどうかとかは答えられませんが……ああ、そういえば今って戦いの最中でしたね。何故か呑気にお茶飲んでますけど。忘れるところでしたよ、アハハ。

……え、僕何してるんですか？
戦いほったらかして、敵の大将とお茶飲んでるって……実は凄いく
としてるんじゃないですか？

「対織田連合とやらのことだ」

これは千歳に滅茶苦茶に怒られるかも……ん？

「対織田連合？」

「ああ。お前が何故そのような連合を作ろうとしたのか、教えてく
れぬか？」

……何故そんなことを？
元就さんの意図が知りたいですが、無表情過ぎて分かりません……
んー、とりあえず真面目に答えてみますかね。

「織田の所業が気に入らなかったから……っっていうのがまず一つね」

「ふむ。まあ、それはあるだろうとは思っていた」

あちゃ、読まれてました……ってことは、元就さんも織田の所業に
は不満があるってことですかね？

「で？ 他には無いのか？ まさかそれだけではあるまい？ あの織田と正面から対抗すると言っのだから、それ相応の理由があるのであらう？」

「……なんか過大評価されてません？ そんな大層な理由なんか無いですよ。復讐はいけないことだからお父さんの敵討ちは理由にはしませんし……あ、でも明智光秀は一回殴ります。一回で三発殴ります……ペガサ。流星拳。」

「……と、そのことは置いておいて。ふむ、理由ですか………
……うん。」

「無いわね」

「……無いだと？」

「ええ、無いわ」

自分でも驚きましたが、本当に無いですね。

あつれー、なんで僕は対織田連合を作ろうと思ったんですっけ……

……ああ、そつだ。

「……それは有り得ぬであらう。確固たる信念が無ければ、そのよ
うな大それたことは出来ぬ」

「あつたわ。信念」

「何？」

なんかさっきからコロコロ意見を変えてるから、元就さんが少しキレ気味な気がします。怖いから気のせいにします……べ、別に怖いってわけじゃ、ないんだからねメツチャ怖いです。超怖いです。さっさと言っちゃいましょう。

「笑って生きたいからよ」

「……どういう意味だ」

「どう、って……そのままの意味なのだけれど……あー」

いざ言おうとすると地味に恥ずかしいです。

ま、まあ、言わなきゃいけないですからね！　ここはど真ん中ストリートですよ！

「千歳、佐助、お館様、幸村……それとこの旅で出会った人たち。みんなが笑って過ごせるようにしたい、ただそれだけよ」

「……この戦乱の時代でそれを為そうと言うのか？　そのようなことのためだけに、魔王に正面から刃向かうと？」

「充分よ、僕にはそれだけで充分。天下とかそういうのには興味無

いしね……みんな笑って、幸せに過ごす。それで良いじゃない」

……あれ、なんか元就さんの目が点になってるんですが……やっぱ理想論過ぎましたかね？ いや、でもこれが僕の正直な気持ち「く、ふふふ……」……はえ？

「ハハハハハハ！ 面白い、実に面白いぞ、虎の姫！ お前が大事した信念も持たぬ小物であつたならば、対織田連合とともに利用してやろうと思つていたが……計算違いであつた」

急に笑い出してなにやら物騒なことを言い出した元就さん……へ、利用？ 理容？ 里謡？ さあ、どれが正解……利用ですね。

「あ、あの……利用ってどういう……」

「良いだろう、虎の姫。我はお前が気に入った。我が毛利軍も対織田連合に参加させてもらう……戦闘を中止しろ！ 今すぐだ！」

「は、ハッ！」

あ、ああ！ 戦闘が終わるのは良いんですが、僕を置いて話が進んでしまっている！

なんですか、これ！ 少し前の雑賀衆とのやり取りみたいです！ この置いてかれてる感じ！

「ふむ。しかし我が行っても長宗我部は信じぬであろうな……虎の姫よ、その辺りはお前に頼んでよいか？」

あ、あつ……ええい！

「任せときなさい！ この僕が！ 完璧に説得してやるわよお！」

「……何故泣いておるのだ？」

嬉し涙ですよ、馬鹿野郎！

く真田雪の極秘ファイル……という名の日記？く

「佐助！ 佐助！」

「ん？ なんだい、真田の旦那」

真田の旦那が元気良く……訂正、暑苦しく走ってきた。
全く、雪様がいなくなった時は目に見えて元気が無かったから心配してたけど……心配いらなかったみたいだな。

「これを見るのだ！」

「ぐお！？　だ、旦那！　押しつけないで！」

ぎゃ、逆に元気過ぎて困る！　雪様はどうやってこの暴れ馬を手懐けてたんだ！？

「ああ、もう！　……って、これはなんだい？」

「今朝姉上の部屋を掃除していたら出て来たのでござる！」

そう言つて旦那が見せてくるのは年季がかった巻物。
てか旦那、雪様の部屋を掃除してんのか……それは流石にどうなのよ。

「で？　その巻物がどうしたって？」

「うむ。ここを見てみよ」

巻物の周りに……ん？　なんか書いてあるな、どれどれ……？

「『真田雪の極秘ふぁいる……』という名の日記」？ ふぁいるって一体……というか日記で良いじゃん」

しかし題名？からして雪様が書いたんだろうけど……なんか嫌な予感がプンプンするなぁ。

「ど、どうするべきだろうか、佐助！ それがし 某としては姉上が何を記していたのか気になるのだが、逆に見ていいのか。という気持ちもあるんだ！」

成る程、確かにこんな怪しい（妖しい？）物見つけたら読みたくもなるだろうが、理性が旦那を踏みとどまらせてるってわけか……うーん、だったら……お！

「おーい、小山田の旦那！ 少し来てくれないかい？」

「む。如何なされた、猿飛殿……おや、幸村殿も」

「どうしたのですか？」と言いながら近寄ってくる小山田の旦那。ふっふっふ、これで大丈夫だぜ、旦那！

「大混戦、みんなで行けば怖くない！ さあ、読んじゃおうぜ、幸

村の旦那！」

「い、良いのであろうか……いや、これも姉上のことを知るため。姉上、御免！」

「……何を言っているんです？」

よっしゃ！ 雪様の秘密を暴いてやるぜ！

うーみーは広いーな……お茶が美味しい！（後書き）

無駄にイケメン、元就さん。キャラ崩壊し過ぎだなあ……つてもこの作品でそういう謀略的なのは無理です。そんなの書けないので元就さんをオクラにしました。文句は無いだろ……すいませんでした！

さて、アニメBASARAが終わる前にいけるとこまでいきたいな……というか三期フラグ立ちましたね！自分はテンション上がり過ぎて（自重

では、また次回で会いましょう！

うーみーは広いーな……巫女さんが現れた！（前書き）

いつもより遅れたちくしょう！すいませんっした、筆頭！（え

えー、しかもおまけも今回お休みです。理由は単純に書く気力が無かったからです……次回にはやりますので、楽しみにしてください（あ

キャラ崩壊警報発令！

とあるキャラのキャラ崩壊があります！というか作者がキャラを把握出来ていないのでキャラ崩壊というレベルを超えている可能性があります！ご注意ください！

うーみーは広ーな……巫女さんが現れた！

どうも皆さんこんにちは。

【虎の姫】真田雪です。

いやー、本日はお日柄も良くて、絶好の……。

「千歳イジメ日和ね」

「う、うう……吐く、吐ける……！ うう……」

元就さんから貸してもらった（元就さんは『やる』と言っていた。太ッ腹過ぎます）船の上で悶えている千歳をゲシゲシ蹴っている僕。おそらく現代の日本なら僕は即捕まるでしょうが……今は戦国時代。警察なんか怖くないぜ！

「酔ってる人間を蹴るって、人としてどうなんですかあ！ ……うつぷ。叫んだら吐き気が」

「大丈夫よ。こんなのもう日常の中の1コマじゃない。みんな穏やかな笑みを浮かべてスルーしてくれるわ」

「みんなって誰ですか……あ、時が見える」

なんか千歳が昇天しかかっています……まあ、直に戻ってくるでしょう。

千歳が戻ってくるまでの間に、何故僕たちが二人で元就さんから貸してもらった……もう貰ったで良いですかね？ コホン、貰った船に乗ってるかを説明しますかね。何故か僕は毎回キングクリームゾーン！的な感じで始まる人が多いですから。

「そう、それは元就さんが対織田連合に入ると言った時のことよ……」

「適当に喋って説明終わらせるくせに、回想始まるみたいな導入しないください……ムギユ」

なんか千歳がいらないこと喋ってたから、千歳に馬乗りしながら説明することにします……この絵を最初に見た人は何を思っただろうね。

で、何故こないいつも通りの茶番（笑）を繰り広げているかという……その時の台詞だけ抜粋しましょうか。はい、台詞ドン！

『それじゃあ僕は行くわね……確認するけど、他意は無いのよね？』

『当然であろう。我はお前が気に入ったから対織田連合に参加することにしたのだぞ？ もう少し我を信用しろ』

『いや、その前に『利用』って単語を聞いて信用しろっていう方が無茶じゃない？』

『……私も長宗我部のことは買っている。実は、今まで我と戦ってきた奴が、我のことを一番良く理解しているやもしれぬな』

『え、無視？ 何故勝手に話が『元就様！』進んでえ！ 何よ！ 殺すなら殺しなさいよお！ どうせ僕は世界に置いていかれる程度の存在なのよお！』

『一体どうしたというのだ……？ それで？ 何があつた？』

『いえ、曲者がいたもので……港に』

『『港に？』』

『はい、こやつです』

『きゆう……うう、べ、別に溺れてしまっても構わ……ぐふっ』

『……虎の姫？』

『……とりあえず、ごめんなさい』

……といった感じです。

まあ、これだけで分かった人はいないでしょう。たったこれだけの情報で、僕が元就さんの所から帰ろうとした時に海で溺れた千歳が毛利兵さんたちに運ばれてきたとは誰も分からな……え、バレバレ？

「……しかし、まさか毛利が対織田連合に入ってくれるとは夢にも
思いませんでしたよ。雪様、なんてマジック使ったんです？」

「いえ、マジックと言うか、なんていうか……というか元就さんが
対織田連合に入ってくれたことがそんなに凄いことなの？」

「凄過ぎですよ！　なんで雪様はそんな落ち着いて……ああ、B A
S A R A 知りませんでしたね。それじゃ仕方ないですね、まったく」

しきりに「仕方ないですねえ」と連呼する千歳……ああ、両手が勝
手に鉄虎と白虎に。

もう良いですね？　僕は我慢しなくても良いんですね？

「まったく仕方ないですねえ。良いですか？　毛利元就っていうの
は、部下を捨て駒として扱う冷酷な男で………」

自慢げに説明していた千歳の動きが止まった。

ふふふ……良く分かりませんが、チャンスです！

「くらいなさい！　怒りと怒りとほんのちよつとの哀しみのお！
シャイニングフィンガーソー……！」

「雪様！　なんかあそこに入っぱい何かが浮かんでいますよ!？」

「ドオオオオオ……お？」

僕が鉄虎と白虎を振り下ろした瞬間、千歳が甲板から身を乗り出して、僕の渾身の一撃を偶然避けた……標的を失った鉄虎と白虎に引つ張られて、僕はそのまま海に……ぬおおおおお！？落ちる、落ち……ええい、一人で落ちるものですか！

「道連れよ……！」

「あれ？雪様何故そんなところにiiiiiiii！？」

海に落ちる直前に両脚を千歳の首に絡めて、海に落とす！

……あ、千歳を落とす時に千歳と立場が逆転して船に戻れました。流石は僕ですね、どんな逆境も乗り越える！ヤバイ、僕かっこいい……。

「ちょ、ちよつと雪様！なんで人を海に落とすという満足そうな顔をきやああああ！？鮫、鮫が出ましたあ！」

「そつえばさつき千歳が人が浮かんでるやら何やら……あ、あれかしら？」

「無視！？従者が命の危機に瀕しているっていうのに無視ですか！？……ちょ、マジでヤバイです！私まだ死にたくありませんええん！」

ああ、本当に人が浮かんでますね。船の破片によっかかってます…
…ん？

「巫女さん、ですって……！？」

「きゃああああ！？ も、もう良いです！ 相討ち覚悟でやって
やりますよ！ 今日のご飯はフカヒレですこの鮫野郎！」

船の破片の上には、巫女さんの服を着た黒髪の女の子がいました。
どうやら気絶しているみたいですが……何故こんなところに？ い
え、今はこの子をどうするかですね。

みこふくのおんなのこがあらわれた！

コマンド！

↓たたかう

どうぐ

にげる

もんすたーぼーる

ぐへへ、よいではないか、よいではないか

……………。

ピッー

↓ぐへへ、よいではないか、よいではないか

「さて。ロープはどこにあるのかしら」

「雪様！ なにか邪な波動を感じたんですが！ …… って、ええい！ しつこいですよ、鮫！」

てーい……よし、ロープかかりました。引っ張りますよ、ぐへへへ。

「むう。中々起きないわね、この子」

「というか私と鮫の激闘なんで描写してないんですか？ 私凄く頑張ったんですけど」

とりあえず千歳の戯言はスルーです。ヌルーです。

「おーい。起きなさい。じゃないとぐへへ、よいではないか、よいではないかしちゃうわよー？」

「……何をする気なんですか？」

「にゃんにゃん」

「自重してください」

千歳の目が犯罪者を見る目だったので、流石に自重することにした。いや、目がマジで怖かったんで……たまに思うんですけど、千歳って僕の従者ですね？ 実は立場が逆とかありませんよね？

「う、ううん……？」

「「あ」」

千歳と馬鹿なやり取り（自覚はあります）をしていたら、女の子が起きました。ふむ……仲間ですね。

「雪様？　なんでその子の胸を見た後に私の胸を睨むんです？」

「今からスターバースト・ストリームをあなたの胸に叩き込むけど、覚悟は良い？」

「何故！？　私の胸を何等分する気ですか！？」

「32」

「正直過ぎます!」

ああ、恨めしい。ああ、恨めしや。デカπや。

五七五……になってませんね、僕としたことが失敗しました。いえ、後悔は後です。今は全世界のまな板の敵を「あ、あの……」はい？

「私を助けてくれたのは、あなたですか？」

女の子が何故か身構えながら聞いてきた。

なんで身構えて……ああ、鉄虎と白虎を持ってるからか。そりゃ警戒するのも当たり前ですね。

とりあえず鉄虎と白虎を手早く背中の中の鞘に収める。

すると女の子は、僕に敵意が無いと分かってくれたのか、警戒を緩めてくれた。ふう、やっと話が出来ますね……無駄話してたのはお前だろ？ 上等です、叩き斬ってあげます。

「……と。また脱線しかけちゃった。えーっと、漂流してたあなたを助けたのは僕よ。最初に見つけたのはそっちのメロン」

「どんどん扱いが雑になってませんか……？」

気のせい気のせい。

「そうだったんですか……。あの、ありがとうございます」

「ああ、いいのよ、お礼なんて。助けたくて助けたんだから」

「……ぐへへ、よいではないか、よいではないか」

「千歳。うるさいわよ」

女の子の信頼を勝ち取ろうとしているところを、千歳が邪魔しようとしてきました。

全く何がしたいんですか、千歳は。帰ったらさやかからマシンガンを借りましょうそうしましょう。

「ッ！？　また寒気が……！？」

「それで？　あなた、名前はなんていうの？　それと、どこから来たの？」

漂流してたのにどこから来たのって聞くのはおかしい気がします。

「えと、私は鶴姫って言います。『伊予河野』って場所で巫女をやっているんです」

伊予河野……？ 聞いたこと無いですね。まあ、後でさやか辺りに聞けば良いでしょう……さて。僕も自己紹介をしますかね、名前を聞いたら自分も教えなきゃ失礼というものです。

「良い名前ね。僕は甲斐は武田の【虎の姫】真田雪よ。よろしくね？」

握手のために右手を差し出す。

……あ。今思うと改めて自己紹介するのって初めてかもしれません。何故か僕って地味に有名みたいですから自己紹介する前に相手が知ってるんですね。全く。僕は大了たことしてないのに「……あなた、あの【虎の姫】？」……はい？

「あなたがあの、日の本一の美貌を持つと言われ、多くの猛将たちを従えているという、【虎の姫】真田雪様なのですか！？」

鶴姫……ちゃんがとても興奮した様子で僕に詰め寄ってきた……え？ 僕ってそんなことしてたんですか？ 猛将たちを従えてるって……。

『がつがつばくばくひよいぱく』

『ん？ 腹減ったのかい、夢吉？』

『おい、雪。千歳が私の飯を勝手に食べたんだが……撃っていいか

「？」

「……え、だってこの人たちは猛将じゃなくて猛将（？）って感じだ
と思うんですが。」

「あー、あなたは多分勘違いを……」

「ずっとお会いしたかったです！ お姉様とお呼びしてもよろし
いですか！？」

「……もう、勝手にしなさい」

「こういう場合は何を言っても無駄だと今までの経験が叫びます……
……ああ、四国に来てから色々といイベント起きすぎて意味が分かりま
せん。」

「僕って、人を引き寄せる何かでもあるのかしら……？」

「この前の悪寒もまだ感じるし……私はいつ死亡フラグとおさらば
出来るんですか！」

「ふっ、苦勞人ですね、僕たち……不幸のベクトルが違う気がします
が。」

うーみーは広いーな……巫女さんが現れた！（後書き）

颯爽登場、鶴姫！

……プレイ動画も見ずに鶴姫出していました。馬鹿ですね、自分。

いや、まあ、見れば解決なんですが……長時間パソコンの前にいると親の目が第六魔王でして……↑マジです

鶴姫こんなキャラじゃないだろ！って人はこの駄作者に鶴姫がどんな感じが教えてくれると嬉しいです。鶴姫は今後も出ますので。

……そろそろ皆さん筆頭に飢えてるんだろうか（汗

うーみーは広いーな……ネタ尽きた（前書き）

相変わらず鶴姫のキャラが掴めない……だからもう自重しないことに（ry

そしておまけ復活です。今回は特にカオス&自重無しなので、苦手な人はスルー推奨。

うーみーは広いーな…… ネタ尽きた

どうも皆さんこんにちは。

真田の紅一点、【虎の姫】やら呼ばれてる（らしい）真田雪です。

とりあえず、皆様にご報告しなければならいことがあります。
ああ、いえ。まあ、大したことではないんですがね？

「あのあの！ 雪お姉様は刀を一振りするだけで敵をズバツと吹き飛ばすって本当なんですか！？」

「……遠からずも近からずね」

「いや、的中じゃないですか」

「凄いです！ 尊敬します！」

妹が出来ましたー

……ああ、待つてください。そんな危ない奴を見るような目で僕を見ないでください。

あれですよ？ 確かに自分でも変わってると思いますが、決して危ない奴なんかじゃありません。僕の危険度は精々ギル。メッシュレベルです……滅茶苦茶危ないですね。

「くう……墓穴を掘ったわ……」

「……急にどうしたんです？」

「いえ。これからは一人称を『僕』から『我^{オレ}』に変えようかと思うのだけど……どうかしら？」

「馬鹿ですか？」

「蹴！？ もっと悩んでくれてもいいじゃないですか！

「いちいち雪様の低レベルなギャグに付き合ってたらキリがないです。鶴姫ちゃん。雪様を尊敬するのはいいですけど、尊敬する部分は慎重に選んでくださいね」

「？ 良く分かりませんが、千歳お姉様の言うことですから、従います！」

ビシッと見事な敬礼を見せる鶴姫。

チラッとパンツが見えました、クマさんパンツです……前々から疑問に思ってたんですが、何故戦国時代にパンツが？ まあ、僕も穿いてるんですけど。あれですか？ 深く考えたら負けってやつですか？ それなら仕方ないです……え？ ブラジャーはどうしたって？ 死にたくないならその話題は金輪際口にしないことです。僕とキミとの約束です。要塞【富嶽】で僕と握手。

「それにしてもお姉様と千歳お姉様はとっても仲がよろしいんですね！ 凄く羨ましいです！」

「まあ、なんだかんだでやってきてますしねえ……」

「確かにね」

仲が良いのベクトルが違う気もしますが。

「すつごく、すつごく羨ましいです！」

ああ、なんかもう鶴姫の笑顔が眩しすぎます。基本根暗な僕には眩しすぎます！

……道すがら聞いたところによると、この子は【伊予河野】って所で巫女をやってるらしいです。今まで外の世界を知らずに過ごして来たらしいのですが、外の世界への興味が天元突破して遂に脱走。しかし脱走に使用した筏が先程まで繰り広げられていた長宗我部vs毛利の戦いに巻き込まれ大破、漂流していたところを僕たちが助けたと……何故筏をチョイスしたんでしょう、この子。そこらへんもやっぱ世間知らずが影響してるってことですかね？

あ、ちなみに何故千歳もお姉様と呼ばれているのかというと。

僕〃お姉様

千歳「僕の従者」鶴姫にとってはお姉様も同然

といったことになっているらしいです。

まあ、お姉様って言われることに抵抗は無いんですが……。

「あなた。その【伊予河野】って所に帰らなくて良いの？ 外の世界を知らないってことは、相当大事に育てられてきた、ってことじゃ……」

「良いんです！ 外に出してと言っても出してくれないあそこにも何の得もありません！ それに、前に【伊予河野】の目の前で暴れてた人もバシッと懲らしめないとイケませんから！」

暴れてた人？

「どういうこと？」

「どうしたもこうしたありません！ 【伊予河野】の目の前で知らない男の人が鯨と戦ってたんです！ お陰で大きな津波が【伊予河野】を襲ってきて、大変だったんですよ！ あー、もう！ 絶対許しません！」

「……」

プンス力怒っている鶴姫を視界に収めながら、僕は考える……とい
うか考えるまでもなく『あいつ』なんです。何やってるんですか、
あの野郎。僕たちだけに飽き足らず、大勢の人たちにまで迷惑を…
…これは許しておけません。

「安心しなさい、鶴姫。僕も一緒に懲らしめてあげるから」

「お、お姉様！　ありがとうございます！　一緒に悪を懲らしめま
しょう！」

「ええ、殺^やりましょう。悪・即・斬しましょう。新たに習得した牙
○で貫いて見せるわ」

「……字が違います。というか雪様、牙○使えな「おーい、雪ちゃ
ん！　千歳ちゃん！　無事かい？」あ、慶次さん」

慶次の声が聞こえた方向に顔を向けると、こちらに向けて手をブン
ブン振っている慶次と、銃の手入れをしているさやか、甲板に突き
刺した大剣に背を預けている直親……ふむ。

「牙○！」

「ぬおおおお！？　いきなりなんだ、この野郎！」

直親の胸に向けて突き出した鉄虎を、直親は咄嗟にしゃがんで避け
る。

チッ！ 中々良い反応速度です。ですが、まだまだ甘い！

「鶴姫！」

「はいつ！ お姉様！」

「あ？ 誰だ、お前「ていや！」ぐぼお！？」

船から飛び立つた鶴姫の華麗な飛び蹴りが直親の顔面に直撃した！

N i c e k i c k ！

「よし、ボコるわよ。よくも投げってくれたわね、この野郎！ 結果的には良い方に傾いたけど、滅茶苦茶怖かったんだからね、このアツ。アもどき！」

「よくも【伊予河野】を荒らしてくれましたね！ 【伊予河野】の巫女である私がズバツとビシツと成敗してくれます！」

「ちよつと待て！ せめて説明止める殴るな蹴るんじゃねえ！」

ゴチャゴチャ言ってる直親をゲシゲシ蹴ったり殴ったりする僕と鶴姫。

あははははは！ なにかも全てあなたが悪いんですよ！ 自身の生まれの不幸を呪うんですね！

「牙。本当に使えたんですね……」

「なあ、千歳ちゃん。誰だい？ あの子」

「…… やつと帰って来たと思ったら、相変わらず賑やかな奴だ」

「—— 成程。毛利も対織田連合に協力するってか。…… あの野郎、何考えてやがる」

「元就さんは良い人だと思うわよ？ 信用しても良いと僕は思うわ」

やつと帰ってきた要塞【富嶽】の一室で、元親さんに毛利にいた時にあったことを説明する。

うん、まあ、利用って単語がチラツと聞こえた気がしますけど…… 多分平気でしょう。もしかしたら里謡を歌いたかったのかもしれないかもしれません？ …… それは無いかな。

「ふむ…… 今度一回会ってみるか。俺も一度あの野郎と腹あ割って話してみたかったな。…… そういや、俺は返事したっけか？」

「？ 対織田連合のこと？ …… そういえばまだだったわね。返事を聞こうとした矢先に、戦が始まったから」

「ああ、そうだったか。…… まあ、俺の返事は分かってんだろ？ 虎の姫」

そう言っつてニヤリと笑う元親さん。

ふふ、意地の悪い人ですね。わざわざ僕に言わせるなんて。

「ええ、もちろん。これからよろしくお願いするわ、長宗我部元親殿？」

「俺は堅つ 苦しいのは苦手だ。さつきみてえに元親さん…… いや、元親で良い。その代わりに、俺もお前のことは雪って呼ばせて貰うとするぜ」

「あら、新手の求婚？ 元就さんといい、この辺りの人は命知らずね」

「へっ、なんだいなんだい。お前さん、あの野郎に目えつけられたのかい？ そりゃあご苦労なことって」

むう、それはどういう意味なんですかね？ そこはかとなく嫌な予感がします。

「……で、雪。お前に一つ聞きたいことがある」

「…………何かしら？」

元親の声が重く、引き締まったものへと変わる。

……真面目な話ですか。やはりこれからのことでしょうか。織田に
対してどう行動するか、それが重要になってきますからね……さあ、
ドンとこいです！ 正直戦略とか練るのは大の苦手ですがやってみ
せましょう！

元親は数瞬目を閉じた後、カッと目を見開き、口を開く。

「——さつきからずっとお前の後ろから俺を睨みつけてきてる嬢
ちゃんは誰だ？」

「な、なんですか！？ 何か文句があるんですか！？ まったく、
これだから海賊は……！」

「いや、海賊関係無いだろうが」

僕の背中からひょこつと首だけ出した鶴姫が元親に反抗する。

ふむ、遂に僕はスタンドを手に入れましたか。名前はさしずめ【ツ
ルノオングーエシ】と言ったところですかね……微妙です。

「まあ、この子は僕の妹みたいなものよ」

「お前さんは戦が始まってからの数時間で妹が出来るのか？ それ

とお前らの後ろで泡吹いて倒れてる直親は……」

「悪は滅びるのよ」^{んです！}

「そ、そうか……」

僕と鶴姫の見事なコンビ技に思わず後ろに後ずさる元親。

……まあ、今の対織田連合と僕の状態は随分と流れに身を任せた結果ですけど。最終的に良い結果に収まったからよしとしましょう。

「よし、じゃあ僕はこれから千歳を餌に釣りをするけど……鶴姫はどうする？」

「駄目ですよ、お姉様！ 千歳お姉様が可哀想です！ 餌ならそこにデカいのがあるじゃないですか！」

泡を吹いて倒れている直親を指差す鶴姫。

やだ、この子天才じゃないですか？ 画期的過ぎます。

「そうね。これならデカいのが釣れる筈ね。それじゃ元親。ちよつと行ってくるわね……隣の部屋で休んでる千歳に安心してたら寝首搔かれるわよって言うておいて」

「シュバツと大きい獲物を釣りましょう、お姉様！」

「……何がどうなったってんだ」

Let's Fishing! 盛り上がってきましたよ! これ
が俗に言う修学旅行夜のテンションってやつですね! ……え、違
う?

「真田雪の極秘ファイル……という名の日記?」

「よし、開けるぜ……?」

「うむっ、よいぞ、佐助!」

「あの、何が始まるのですか?」

雪様の秘密日記を開ける前に、真田の旦那と小山田の旦那に確認を
取る。

へっ、二人とも覚悟は良いみたいだな……。

「それじゃあ開けるぜ! 何が出ても驚くなよ!」

「姉上すみませぬ。だがこれも姉上の為……！」

「だから何が始まるのかの説明を……」

「どりゃあ！」

ひと思いに日記を開ける！

……こ、これは！

名前：ユキンザム

神様（♪）がマジでウザい。

そろそろ本気で抹殺を考えた方が良いのかもしれない……ですが、もし幸村にバレでもしたら、星にされちゃいます……保志だけに、ププツ。

名前：幸村LOVE

雪様。全然上手くないです。寧ろ読んだこつちが悲しくなりました……というかなんですか、この日記。雪様の部屋を掃除してたら見つけてしまいました。

名前：乱れ撃つぜ

む、千歳。人の日記に勝手に書き込むとはどういった見？ 事と次第によってはその無駄にデカいπを切り落とすわよ。

名前：はやてマジヒロイン

毎日切り落とそうとしてるじゃないですか……それで？ 神様（♪）を懲らしめるんですか？ 私も協力しましょう。最近槍兵さんの槍が使えるようになったので。

名前：将来の夢は秘剣燕返し

ダウト。槍兵さんの槍使えるようになったとか、あるわけないじゃない。それ以前にもしあったとしても、お館様なら普通に弾き返しそうじゃない？

名前：幸村様マジ幸村様

それは確かにありそうですね……。というかこの世界の人たちはみんな神秘の塊みたいなものですからね……。

名前：かすがマジエロい

ああ、そうそう。僕この前あのバ神様（♪）が山に逃げたのを捕まえに行った時に、かすがっていう凄いエロい忍者と会ったのよ。あのエロさはヤバいわね、騎兵さんに匹敵するわよ。しかもそれに加えてツンデレなのよ。反則よね、その二つを合わせ持つって。

名前：全てを司る神様に、私はなりたい

あ、かすがさんの話ですか？ ♪ 私も混ぜてくださいよ ♪

名前：ユイにゃん ♪

デストロイ。

名前：うんたん ♪

ふあつく。

名前：唯にゃん ♪

酷い！？ ♪

俺たち三人を沈黙が支配する……。え、えっと……。

「幸村の旦那。元の場所に……戻そうか」

「……そうだな。俺は、触れてはいけない物を取り出してしまったのだろう」

「結局何がどうしたのです？」

へっ……流石雪様。あなたは俺たちの何歩も先を行ってるんだな……
…内容半分以上分からなかったけど。

「……無視ですか？」

うーみーは広いーな…… ネタ尽きた（後書き）

仲間がどんどん増える雪勢力。後一人ぐらい増やしたいなあ……髪
の毛が鳥の嘴の人とか（マテ

それは駄目だろう！ という人は感想に。特に異論が無ければ駄作
者は完璧に自重を外します（え

パーティー更新

【天覇衝刃】 真田雪

【?????】 猿飛千歳

【絢麗豪壮】 前田慶次

【煙鳥翔華】 雑賀孫市（さやか）

New！ 【轟天爆碎】 長宗我部直親

New！ 【天衣無縫】 長宗我部元親

New！ 【詭計智将】 毛利元就

New！ 【純白可憐】 鶴姫

ザ？ ザ……ざるそば？（前書き）

アニメ終わっちゃいましたね……しかし劇場版キター！！！！

今回は千歳回。そして衝撃のラスト……結末は貴方自身の目で確かめてください↑そこまで衝撃じゃないかも

ザ？　ザ……なるそは？

どうも皆さんこんにちは！

【虎の姫】こと真田雪の従者をやっている武田の精鋭（これ重要）
忍者、猿飛千歳です！

……と、まあ。前置きは程々にしておきまして。最近私には悩み事があるんです。

ほら、雪様には【虎の姫】ってかっこいい異名があるじゃないですか？　幸村様は【虎の若子】って呼ばれてますし、お館様は【甲斐の虎】、謙信公は【軍神】、筆頭（昔からそう呼んでます）は【独眼竜】、元親さんは【西海の鬼】……皆さんかっこいい異名ばかりです。

……え？　なんで急にこんなこと言い出したのかって？　やだなあ、ただの気紛れですよ。

決して前々から『異名で呼ばれるなんて、雪様良いなあ』とか、『かっこいい異名欲しいなあ』とかこれっぽっちも、これつつぽちちも思ってますからね？　本当ですよ？　本当なんですからね？　私が本当って言ったら本当なんですからね？　ジャイアニズム改め千歳ニズムに逆らえる人は誰もいません。

「——と言う訳で、皆さんに私の異名を考えて欲しいんです！」

「……なんで俺らなんでい？」

「さあ……？」

少し高い台の上で腰に手を当てて宣言した私の真下で正座した長宗我部軍の兵士さんたちが、口々に疑問を零していく……し、仕方ないじゃないですか！

「こんなこと雪様たちに相談出来るわけがありません！ 笑われるか馬鹿にされるか胸を斬られかけるかして終わりです！」

「……千歳の姐さん、苦労してんだなあ」

「いつも雪の姐さんのお相手、ご苦労様っす」

「けどおかわりは控えて欲しいっす」

皆さん……何故か目頭が熱くなってきました。これが人の温かさってやつですかね……おかわり？

あーあー聞こえませんか聞こえません。私は何にも聞いてません聞こえてません。

「しかし異名か……。いきなりそんなこと言われてもなあ」

「大体千歳の姐さんは忍者じゃありませんか。忍者ってえのは『忍

ぶ者』って書いて『忍者』なんでしょう？」

「忍者って偵察とか暗殺が主な任務なんだから、異名なんてもんがあっても名乗る機会が無いんじゃない……」

「うぐっ」

や、やりますね、兵士さんたち。まさかここまで頭が切れるなんて…… 転生前の人生で幸村様使って烈火で突きまくったこと、謝らせていただきます…… ゲームの中の話ですが。

まあ、ともかく。忍者である私がいきなりこんなこと言い出したのにはちゃんとした理由（建て前とも言っ）があるんです。

「雪様と一緒に旅してる時点で忍者なんてものの有能性は無くなってる…… というのは分かりますか？」

「？ それは一体どう……」

「碇、分かるか？」

「いや、皆目見当が着かない。冬月、お前は？」

「分からないから聞いたんだが」

「……そうか」

私の言葉に、床に胡座で座り、段ボールに肘をついて口元に手を当ててサングラスをかけた兵士さんが……雪様。あなた既に長宗我部軍の兵士さんたちをその毒牙にかけていたんですね……。

「とにかく。有能性が無くなったというのは、あんな目立つ人とずっと一緒にいた私は、当然の如く名と容姿は知られているはずなんです」

「まあ、確かに」

「というか前の戦の時、自分から姿を晒しに行ってたような気が……」

なんだか私の立場が悪くなってきた気がします。

おかしいですね、私は自分が正しいことを証明しようとしただけなんです。

「ええい！　つまり私が言いたいのは、もうバレてるんだからとことん目立ってやる！　と言うことです！」

「ほう。つまりは開き直りってことかい」

「平たく言つとそんな感じ……きゃあああああ！？」

「うおっ！？　急にデケエ声出すんじゃないねえ、心臓止まるかと思っただぜ」

いきなり私の背後に現れた元親さんが左胸を押さえながら話し掛けてくる。

あ、それはどうもすいませんでした……って、そうじゃなくて！

「い、いつからそこに？」

「いつからって聞かれてもな。ついさっき毛利から帰って来て、したらお前がうちの舎弟どもと何か話してるからよ。つい聞きこんじまったぜ」

「だ、だからその……どこから聞いてました？」

「どこからか？ 雪には言えない、ってどこからだな」

「最初からじゃないですかあ！？」

もう嫌だ！ このまま私はネタにされ続けるんだあ！ ……いつもとそう変わらない気も……い、いや！ やっぱりネタにされるのは嫌です！

「お願いです、元親さん！ このことは雪様たちには言わないでくれませんか！？」

「ず、随分と必死だな、おい。別に言いやしねえぞ？」

「本当ですか？ 信じてますよ？ もし言ったら私はあなたを今生

……いえ、来世まで怨み続けます！」

「そこまで嫌なのかよ………だったら最初から異名なんざいらねえんじゃないのか？」

むう。分かってませんね、元親さんは！ 異名とはその人物の人柄その他諸々を表すもの………大変重要なものです！ 良いでしょう、元親さんに異名がどれだけ重要か思い知らせてあげましょう！

「良いですか、元親さんには【西海の鬼】という立派な異名がありますよね？」

「まあ、確かにそう呼ばれちゃいるが………」

「そこで！ もし【西海の鬼】ではなく【西海の鬼っぽい男】って呼ばれたらどうします！？」

「……嫌って言ったら嫌だな」

「でしょう！ これで異名が重要なふあくたーだと言ったことが分かってくれましたか！」

自慢げに大きく胸を張る！ どうですか！ これで皆さん納得してくれましたよう！ ふふふ、我ながら完璧だという自負があります！ エッヘン………あれ？

「そういえばさつき毛利に行つて来た帰りとか言つてましたよね？
どうして毛利に？」

私がそう聞くと元親さんは何故か石のように固まっていて、やっと私の声に気付いたのかハツと顔を上げる……ああ、私の演説に聞き入つてたんですね。それじゃあ仕方ないです。

「……………お、おう。そのことか？ 雪が毛利の野郎も対織田連合に加えてきたじゃねえか。ちょうど良い機会だから一度話をしてみようと思つて行つて来たんだが……………」

「だが？」

「野郎がいなかったんだよ。奴さんの家臣が言うにやあ、突然いなくなつたらしいが……………あの野郎が国を空けるなんてよ。雪でも降るんじゃないか？」

……………毛利元就さんは安芸の国の安寧がまず第一、っていう人だったはず。それが国を空けた？ うーん、なにか嫌な予感しますね。

「まあ、奴さんのことだ。直に帰つて来るだろうから、話はそん時に改めてするとすつかな。それじゃ俺は行くからよ。雪にも言っておいてくれ」

「あ、はい」

そう言つて元親さんは去つて行つた……さて、それじゃあ！

「私の異名を……誰もいない!?」

「千歳の姐さん！ 俺ら仕事があるんで！」

「またの機会でお願ひするっすー！」

ドタバタ去つていく兵士さんたちの背中を見送る私……うう、酷いです。

「一人じゃ思い浮かばないから皆さんに相談したのに……。仕方ないです、こうなつたら雪様たちに……」

「あの、千歳の姐さん」

「はい？」

後ろから掛けられた声に振り向くと、先程の人たちとは別の長宗我部軍の兵士さんたちがいました。

おお！ 一緒に考えてくれるんですかね!? 感激です！

「あの……」

「皆まで言わなくても良いです！ 私はちゃんと、全て分かってますから！」

ええ、本当にありがとうございます！ どんな異名が来るかワクワクワクワク！

「あ、そうですか？ でしたら……」

ワクワク……あれ？ いつの間にか囲まれてるんですけど……あれ？ 一体どうして……。

「ザビー様の下で愛を学びましょうー！」

……はい？

ザ？ ザ……やるそば？（後書き）

導入編といったところでしょうか……悪夢へのWWW

y 地味に嫌なフラグも立ててます。ええ、元就ファンの皆様には（r

ツツコミ不在「僕無双! ……え、違う? (前書き)

アニメが終わりましたが弟は真田幸村は通常運転でやっていきます。

まあ、簡単に言つと兄貴カツコイイよつてことです(え

筆頭と兄貴のコンビは最高ですb↑小説版読んだのでその影響もあり

ツッコミ不在「僕無双！ …… え、違う？

どうも皆さんこんばんは。

織田を倒すために対織田連合を作ろうと奮起していたら、いつの間にか勢力が異様に拡大していた【虎の姫】真田雪です。

正直ここまで勢力が大きくなるとは思ってもみなかったですからね、ビビってます。自分にこんな大きな軍を動かす技量があるのかどうか、そもそもこんな年端もいかない女なんかについて来てくれるのだろうか、という不安が僕を苛みます。

このまま僕が対織田連合を指揮して良いのか。
このままの僕ではいけないのではないだろうか……そう思った僕は。

「千歳ー。出て来なさい。良い子だからー」

千歳に指揮権を丸投げすることにしました♪ テヘッ♪

……え？ さっきまでのシリアスな雰囲気からして修行編に入る雰囲気だっただろって？ 僕が修行なんてするわけがないじゃないですか。大体何の修行するんですか？ 心の中の世界的なところで、擬人化した鉄虎と白虎と戦ったりするんですか？ そんなことした

ら漫画で例えたら十話ぐらいいきますよ？ カルピスで薄めることになっちゃいますよ？ それだけは絶対に避けましょう、藍。編みたいになってしまいます。……そういえば藍。どうなったんでしょうかねえ、せめて正解が出来ていると良いんですが。

「千歳！ 出て来ないとアレよ？ アレするわよ？」

アレってなんなんでしょう。自分でも分かりません。

「ハア。本当にどこに行ったのかしら。今までは呼んだらすぐに現れたのに……」

忍者って凄いですよね。呼んだらすぐに来るんです。

子供の頃は用も無いのに呼んで、佐助に呆れられてましたねえ……。ああ、そういうえば幸村たちは元気でしょうか。そろそろ武田に戻ってみますか……。まあ、その前に千歳に指揮権の譲渡を……。ん？

「元親！」

前の廊下から現れた元親を呼び止める。

確か安芸——元就さんの所に行ってたんですよね？ どんな話をしたのか聞いてみなければ。……ああ、後もしかしたら千歳がどこにいるのか知ってるかもしれせんし。

「ん？ おう、雪か。どうした、こんなところで。てっきりお前さんは慶次辺りとふらふら彷徨ってるもんだとばかり」

「元親の中の僕のイメージはどうなってるの？」

「自由奔放でヤンチャなお姫様だな」

そんなイメージを持たれていたなんて……いや、案外合ってるんですか？

ああ、そうそう。何故元親が慶次のことを呼び捨てで呼んでいるかという……まあ、普通に二人の気が合ったってだけなんだけれどね。仲良くお酒を飲んでいるのを確認しました。

ちなみに僕は普通に酒飲みます。千歳は飲んだら大変なことになるらしいです、自分で言っていました……忍者にデカπにドジっ子（？）に幸村LOVEに酒で酔ったら何かが起こる、今考えると千歳は随分と属性を持っていますね。……………。

：真田雪

まな板、僕ッ子、チート（弱）、姉

……………。

「総合能力的には勝っている……？ いいえ、やっぱり胸の有無の差は如何とも……………」

「……何言ってんだ、お前は？」

「ああ、ごめんなさい。ちょっとトリップしちゃったわ。……そう
だ、元親。千歳見てない？」

元就さんのことを聞く前に千歳です。あれを早く見つけて責任……
ごほんごほん、指揮権を譲渡（押しつけるとも言う）しなければ……
……後、ちよつとイライラしてるんで、千歳を弄らな……。

「あん？ 千歳の奴、お前のとこに来てねえのか？」

きや？

「え？ 来てないけど……何？ 千歳と会ったの？」

「ああ、安芸で何をしてきたかをお前に伝えてくれって言ったんだ
が……会ってねえか？」

「会ってないわ。……どうしたのかしら、千歳」

……何か嫌な予感がしますね。これは早いとこ手を打つといた方が
良いかもしれません。

「元親。千歳を探「ああ、兄貴に雪の姐さん！」ん？」

僕の言葉を遮った声が聞こえた方向を向くと、そこには長宗我部の兵士さんがいた。いたんですが……。

「さあ、お二人とも。私たちと一緒にザ「ていつ！」ビイイイイイ！？」

なんか気持ち悪いから蹴りました。どこを蹴ったって？ 目の前で兵士さんが両手を下の方に股の辺りを押さえて呻きながら蹲ってるって言えば分かりますか？

「……って、雪！ お前、俺の可愛い子分に何してくれてんでい！？」

「いえ……なんか凄い気持ち悪かったから……つい」

「つい、で男の魂を蹴るんじゃない？ おい！ 大丈夫か！？ まだ魂はあるか！？」

元親が魂をやられて傷ついた兵士さんを抱き寄せる。

あんまり魂魂連呼されるとアレですね……アレな気分です。アレはアレですからツッコミ禁止です……というか千歳シズナがいませんでした。これは保つんでしょうか？ 色々と。

「あ、兄貴……」

「おう！ 俺はここだぞ！ 魂は無事か！？ まずはそれを確認……」

「私と一緒にザビー様の下で愛を学びませんか！？」

「ふんっ！」

「ぐぼお！？ ……ガクッ」

なにか言った兵士さんの腹に元親はすぐさまボディーブロー。
うん、正しい判断ですね。しかし全部言わせてしまったのは頂けません。『ザビー』って単語聞いた途端寒気がしたんですけど。

「うおおおおお！？ す、すまねえ！ つい手が出ちゃった！ 大丈夫かあ！？」

「駄目ね、死んでる寝てる。彼はもう駄目よ」

「なんだと……！？」

「……二人して道の真ん中で何してんだ？」

直親がログインしました。ああ、ちょうど良かった！

「聞いて、直親！　そこで伸びてる兵士さんが『ザビー』なんて気味悪い言葉を言おうとして……」

「……ザビーだと？」

「？　なんだ、直親。『ザビー』ってのがなんなのか知ってんのか？」

「あ、ああ、まあ……知ってるちゃあ知ってるんだが、まさか……」

頻りにまさか、と呟き続ける直親。
なんです、なんです。ちゃんと言葉にしてくれないと分からないじゃないですか。

「直親。一体『ザビー』って「た、大変だあ！」ッ！」

「うおおおい！？　ゆ、雪の姐さん！　いきなり何しやがんですか！？」

背後から現れた兵士さんに咄嗟に拳を振るう。が、それを兵士さんは紙一重で避ける……ハッ！？

「あ、ああ、ごめんなさい。……どうやらあなたは正常みたいね」

「正常ってなんですかい……？　って、そうだ！　大変なんですよ、兄貴い！」

「……今度はなんだ？ 何があった？」

若干辟易しながら元親は兵士さんに訊ねる。

……さっき異常に嫌な予感がします。僕の本能がさっきから警鐘を鳴らしてるんですよね、『その先は聞いちゃいけない』って……いや、マジで。

軽く諦めムードの僕に……いや、僕たちに、兵士さんは決定的な言葉突き付けた。

「千歳の姐さんがザビザビ言ってるうちの奴らに連れてかれたんでさあー！」

「「……なんですって？」」

「……やっぱか。最悪だ……ハア」

「——さて。千歳&兵士さんたち救出作戦開始よ」

「待て、雪」

崖の上に立ち、眼下に聳^{そび}える金ぴかの豪華な建物を見て、決意を新たにする僕にさやかが待ったをかける。む、なんですか。

「なんですか、じゃない。いきなり連れ出されたと思ったら……なんだ？ あれは」

さやかは眼下に聳える金ぴかの豪華な建物を指差す。さやかの後ろにいる慶次は興味深そうに建物を見ていて、鶴姫は……露骨に嫌そうな顔してますね。

「なんなんですか、あれ！？ 雪お姉様、あれなんなんですか！？」

「凄いなあ、金ぴかじゃないか。どんぐりの金をかけてんだろうなあ？」

「……で？ ちゃんと答えろ、雪。あれはなんだ？ 見ているだけで気分が悪くなってきたんだが」

三人が口々に不満と疑問を口にする。

……あれえ？ 言ってませんでしたっけ？

「あそこにいるザビーって奴に千歳が連れ去られたから取り返しに

行くのよ」

「さやかお姉様！ あの忌々しい建物をドカンと破壊してください！ 千歳お姉様を助けるんです！」

「千歳ちゃんが捕まってるってなると、俺もジツとしちゃいられないねえ」

「……私は正直あの建物に近寄りたくないんだが」

おお！ 千歳、皆があなたのために力を尽くしてくれるみたいですよ！ 忍者の癖に人望まであるんですか！ 死ねばいいのに！
…無論冗談です、55%ぐらい。

「雪。そういえば元親と直親はどうした？ あいつらのカラクリ兵器があれば楽に攻略出来ると思うが……」

「あー……、なんか千歳を連れ去った兵士さんたちに軽並み持って行かれたらしいわよ。で、それに憤慨した元親さんが急ピッチで富嶽を動かそうとしてるらしいわ。遅れるから先に突入してろって」

「……富嶽まで出すとは、それだけ怒っているのか。あいつは」

そりゃあそうですよ！

「どこの世界に！ 子分たちが『ザビザビ』言ってるのを見て喜ぶ

主がいるのッ!? さやかも雑賀衆の兵士さんたちがみんなして『ザビザビ』言ってるのを想像してみなさい!」

「……すまん、私が悪かった」

結構本気でヤバいと感じたのか、さやかは重々しい音を立ててロケットランチャーを両肩に構えた。

そうです、それが当然の反応です。僕だってさっき千歳が『ザビザビ』言ってる姿想像して軽く気絶しかねましからね……よし!

「それじゃあ行きますよ! 千歳を取り返して指揮権を譲渡するために!」

「千歳お姉さま! 待っていてください!」

「ザビーってどんな奴なんだろうなあ?」

「安心しろ。お前が出会っ前に私が吹き飛ばしてやる」

……マズイ。ツツコミ不在が地味に響いている気がします。

ツッコミ不在!! 僕無双! …… え、違う? (後書き)

次回、ザビー教団の中で旋風が巻き起こる! はず! 多分!

あの人が出ます。アニメでまさかの登場^{復活}を果たしたあのお方が出ます…… 分かる人には分かっちゃいますねwww

掃討……げふん、殲滅戦です……変わってない？（前書き）

十日振りの更新です……更新出来なかった理由を平たく言うと、受験が近いこともありますが、単純にスランプ……あ、すいません、調子乗りましただから石（ry

相変わらずの千歳がないクオリティ。これが意味することはツッコミがないことにより巻き起こるカオス……あ、いつも通りですね（え

掃討……げふん、殲滅戦です……変わってない？

「イエス！ ザビー！」

「あなたもザビー教に入りませんか！？」

どうも皆さんこんにちは。

最近自分が地味にチートなのではないかと思いつつある【虎の姫】
こと真田雪です。

「グレエエエト！ ザ！ グレエエエト！ ザビイイイ！」

「俺がサザビ……ザビーだ！」

「ザビー教でザビー様と握手！」

……えー、今僕はザビー教の信者（洗脳？された長宗我部軍の兵士
さんたち）に連れ去られたらしいデカπアホ丸出しデカπ忍者、猿
飛千歳を助けにザビー教の悪趣味な教会？ に慶次にさやか、鶴姫
とともに侵入……間違えた、カチコミしています。

「イツツ・シヨータイム！　大きいオー呼んじやいますよ！」

「ザビー教を敬えたまえ、ザビー様を讃えたまえ……」

「アイ　シャル　リターン　ザビー！」

大人数で行くと危険——洗脳的な意味で——と判断したので、僕たち四人の少数精鋭で敵を引つ掻き回し、後から来る元親たちが【富嶽】や長宗我部自慢のラクリ兵器で大打撃をくわえ、敵が浮き足立った隙に千歳&兵士さんたちを救出するという作戦をさやかが考案し、現在それを行っているんですが……。

「ザビー教に入ればもれなくこの可愛いザビー人形が付いてきますよ！」

「朝に眺めて癒されるもよし、昼に眺めて癒されるもよし、夜に眺めて癒されるもよし！　目覚まし機能も完備です！　美しい歌声で爽やかな朝を演出してくれますよ！」

「このザビー人形、なんとザビー教に入信頂けたら無料で差し上げます！　タダですよ？　タダなんですよ？　お買い得ですよ！？」

とりあえず帰っていいですかね？

「聞いてない……聞いてないわ。まさかここまでだなんて……ここ

までのウザさだなんて……」

さつきから頭頂部がツルツルの修道服着た若者やおっちゃんたちがザビ―ザビ―言いながら突っ込んで来るので、僕の精神がマツハでピンチです。僕に足りないのは速さではありません、ゆとりです。それにこの信者たち、なんか斬るのが憚られます……いえ、哀れに思っただけで斬りたくないというわけではなく、いくら剣越しても触れたくないという意味です。まあ、倒さなきゃ前に進めないので斬らなきゃいけないのは仕方ないんですが……。

「てい」

「ザビイイイイ!?」

「ああ！ 時が見える！」

斬る度にするさくてうるさくて……ストレスが溜まる一方です。さつき倒した信者なんて、以前さやかたちを助ける時に倒した織田軍の兵士にいた気がしますし。なんなんですか？ ここには全国の兵士たちが集まってるんですか？

「……雪」

「……何？ さやか」

「ザビ……ち、違う。おらが好きなのは、おらが愛してるのは……」

！　いつ　き　ちゃぎゃああああ！？」

修道服の上からピンクの法被を羽織った男をさやかがりボルバーで吹き飛ばし、僕が両手の鉄虎と白虎で床に叩きつける。

……　なんでしょう、理由は分かりませんが、なんだか良いことをした気分です。この世の毒を一つ潰したような、そんな感じがそこはかとなくビンビンと。

「私としてはすぐさまここを立ち去りたいんだが……」

「いや、まあ、僕も同感だけどね？　流石にこんな場所に千歳を一人残しておくつてのは……ねえ？」

「ザビー様を信じれば道は拓けます！」

「レッツ　ザビー！」

「……そうだな」

目の前にウジャウジャ集まっているザビー教の信者たちを見て、さやかは軽く頬を引き攣らせて、どこからともなくマシンガンを二丁取り出す……　あ、そんなに嫌でしたか、この状況。いや、僕も同じ気持ちなんです。あつ、そうだ。

「慶次と鶴姫は無事「お姉さまあ！」うつ！？　……ど、どうしたの？　鶴姫」

何故か涙目の鶴姫が僕のお腹にダイレクトタツクル。

正直物凄く痛いですが、物凄く汗が出ていますが……我慢です。心配させちゃ……いけませんよね？ ガクッ。

「お、お姉さま！ あの人たち怖すぎ……あれ？ お姉さま？ お姉さまあ！？」

「寝るな」

「ゴフッ」

そのまま狸寝入りに洒落込もうとしたら、さやか of 冷酷無比な蹴りが先程鶴姫にタツクルされた場所に見事に突き刺さった。

くっ、何故バレたんですか……！？ というか今の蹴りのせいで狸寝入りじゃなくてマジで眠りたくなっただんですが！ この怨み晴らさで「雪」はい？

お腹を押さえて蹲る僕の左肩に、僕の目の前にしゃがんださやかが右手を置く。

そしてさやかは穏やかな笑みを浮かべ、告げる。

「お前だけ楽にはさせん。苦しみはともに味わってこそ……戦友だろう？」

「さ、さやか……！」

「ゆ、友情です！ 戦場で芽生えた尊い友情です！」

何故か分かりませんが、僕とさやかの周りに百合の花っぱいのが舞っている気がします。なんですか、この幻覚……ああ、鶴姫が散らしてたんですね。納得納得。

……え、止めてください。僕、ノーマルなんで。オールドタイプなんで。まだファ。ネル使えないんで。

というかなんでしょう、騙されている気が何故かするんですけど。この拭いきれない違和感、どうにかありませんか？ いや、マジで。

「さあ、雪。さつさと済ませて帰るぞ」

「私も同感です！ 早く千歳お姉さまを助けましょう！」

「あ、うん。でもね、ちょっと気になることがあるんだけど……」

「【煙鳥翔華】 雑賀孫市……死にたくない者はそこを退け！」

「【純白可憐】 鶴姫！ ズバツと撃ち抜きますよ」

「え、ここで決め台詞？ というか無視なのね、そうなのね」

「……暴力ではなく、愛で語りましょおお！？」

僕を無視して二つ名を名乗った二人は、各々の武器を振るって……いや、乱射してウジャウジャいる信者たちの悉くを吹き飛ばす。

……まずは千歳を助けてからですよ、そうですね。

心の中で自己完結を終えた後、さっさと帰りたいのか先へ先へとグングン進んでいく二人の背中を追いかける。僕も敵を斬りながら進んでいるから歩みは遅いのだけど、それを差し引いても二人は速い。どんだけ早く帰りたいんだって話です。

「——ん？」

大広間らしき場所に差し掛かった瞬間、前を進む二人がピタッと止まった。

どうしたんだろう、と思い、動きが止まった二人の頭の間から顔を出した僕の視界に入ってきたものは——。

「がっはっはっは！　そうかそうか！　そりゃあ面白そうじゃのう！」

「だろう？　まずは日の本の全ての人と会って、その次は日の本の外だ！　どんな景色が広がっているのかなあ……！」

「ふうむ、そうじゃなあ……ま、ワシは酒さえ飲みゃそれで良いんじゃない！　がはははははは！」

「あはは！　爺さんらしいなあ！」

「……あ、愛が足りない……」

大広間中に倒れている信者たちの真ん中で、床に置いた太刀の横に座っている慶次と、その横で直親の大剣に勝るとも劣らない大きさの、地面に突き刺さった大剣に背中を預けている大きなお爺さんが、楽しそうに笑いながらお酒を飲んでいる光景だった……え、いやいや。

「……誰？」

「「……さあ」「」

「あはははは！」

「がーっはっはっはっは！」

啞然とする僕たちの前で、二人は笑い続けた。

……もう流れに身を任せることにしましょうそうしましょう。

掃討……げふん、殲滅戦です……変わってない？（後書き）

島津義弘どん登場！ □調が分からない！（汗

次回にはこのザビー教編が終わります。それと同時に瀬戸内編も終わりです……そろそろ奥州です。やっとですwww

サンデーよりジャンプ派の人、拳手……いえ、特に意味は無いです（前書き）

十四日振り！　これはいけない！　遅筆にもほどがあるぜ！

というわけで楽しみにしてくださっている方々、遅れて申し訳ありませんでした。やっとスランプ（笑）から脱出出来たので投稿です……未だに終わらないザビー編！　ザビー編なのにまだザビーが出ない不思議！

サンデーよりジャンプ派の人、拳手……いえ、特に意味は無いです

「ほう！ お前さんがあの【虎の姫】かい！ 噂は儂が住む薩摩にも届いちよるが、まさかこんな目も眩むような娘っ子とはのう！」

「爺さんもそう思うかい？ 俺も初めて雪ちゃんを見た時は驚いたさ。まさかこの世にこんな綺麗な女の子がいるなんて思わなかったからさあ！」

「全く……二人とも？ そんなおだてても何も出ないし、あげないわよ？」

「あははは！ なんか前も聞いた気がするなあ、それ！」

……あ、どうも皆さんこんにちは。

異様に肥大化しつつある対織田連合の一応の、一応の指揮官であり【虎の姫】真田雪です。

今僕たちは、連れ去られた僕の家臣こと間抜け忍者の猿飛千歳を助けるために、ザビーとかいう奴が教祖を務めているザビー教の教会に侵入……突貫しました。

とりあえず面倒なので、立ち塞がる敵は全てサーチ&デストロイしながら進んでいたら……。

「がっはっはっは！ 飲んで飲んで飲みまくれい！ まだまだ酒は
仰山あるからのう！」

「よっ！ 爺さん太っ腹あ！」

「そう寝るでない、前田の！ ぐびっぐびっぐびっ……かあゝ！
旨い！」

何故か薩摩を収める【鬼島津】こと島津義弘さんとエンカウントしてしまいました……いや、敵ではなかったのでエンカウントではないんですが。遭遇？ 草むらから飛び出してきた？ テレテレテッテッテ？ ……これはレベルアップでした。いや、酔いの耐性は上がってますがね。現在進行形で。

「おい、雪」

「……何かしら、さやか？」

「何故島津義弘がここにいる？」

「いえ、寧ろ私が聞きたいのだけど……」

【鬼島津】の名前と異名ぐらいならこの時代に転生してから何度か聞いたことがありますしね。巨大な刀を一振りするだけで兵士を何十人も吹っ飛ばしたり、一喝しただけで敵を怯ませたり、終いには海

を二つに割ったり……最後のは嘘でしょうけど、そんなとんでもない豪傑なんですよ？ そんな凄い人がどうしてこんなところにいるんですか！？

「あつ、そういえば爺さんはなんでここにいるんだ？」

「「「ッ！」「」」

慶次の何気ない一言に、僕とさやか、鶴姫に電流走る！

ナイスです、慶次！ 酔ってるっぽい島津さんにものを尋ねる度胸は僕にはありませんでしたからね！ 下手なこと言ったら斬り殺されそうですし……いや、勝手な想像ですがね？

「……ぷはあ。ここにいる理由？ いやあ、上杉どんと手合わせするために越後に向かったたんじゃが……途中で道に迷つてのう。途中で出会った若者に道を尋ねて案内してやると連れて来られたのが、ここじゃ」

「へえ。じゃあなんで俺が来た時、刀振り回して暴れてたのさ？」

「仕方ないからここで一休みするかと酒を呑もうとしたらこのう？ こいつらがうるさくてうるさくて敵わなかったから、一発かましてやったわ！ がっはっはっはっは！」

……ザビー教の信者の皆さん。とりあえず冥福をお祈りいたします。安らかに眠りください。

「お姉さまお姉さま？」

「ん？ どうしたの、鶴姫」

「早く千歳お姉さまを助けに行きましょう！ ズバツと！ ササツと！ もう一分一秒もこんな変な場所には居たくありません！」

鶴姫は身体を震わせながら懇願する。

果たして鶴姫の中では千歳を助けることが最優先なのか、それともここから早く出たいというのが最優先なのか……どっちなんでしょうか？

「雪。早くここを出るぞ」

ロケットランチャーを肩に担いださやかが鶴姫に続く。

さやかは正直で良い人だと僕は思いますが、正直過ぎるのもどうかと思います。

「ん？ そろそろ行くのかい？ ……っと、爺さんはどうする？」

「儂か？ そうじゃのう……充分休息も取れたし、上杉どんのところにゆつくりと向かうとするかのう……そうじゃ、その前に景気づけに一発かましてやるわい」

「は？ あの島津さん、一体何を……」

島津さんは床に突き刺していた太刀を手に取り、肩ぐらいの高さで構える。

そんな島津さんの目の前には巨大な扉……あ、なんか気持ち悪いロボットみたいなのが出て来たんですけど。お腹の辺りの歯車がギョルギョル回ってるんですけど。

「見ておれ、虎の姫。これが示現流じゃ……チェストオオオオオオオオオオ！」

「ピピーガガガッガガガガガ！？！？」

島津さんが振るった太刀が、扉の前にいた気持ち悪いロボットを扉ごと真つ二つに両断する。

両断、する……された……何が？ 扉と気味悪いロボットが……ふう。

「いやいやいやいや！ 何よ、あれ！ 人間ってあんなこと出来るものなの！？」

「……お前が言うとお洒落にしか聞こえんな」

「さやかは僕を何だと思ってるのよ！？」

流石にあそこまで突飛なことは出来ませんよ！ それ以前に試したことも無いですし！

「え？ てつきりお姉さまなら出来るものだ……」

鶴姫の純粹な視線が痛い！ 胸に刺さります！ いくら僕が超絶チート（らしい）だからって扉を真つ二つにするなんて出来るわけないでしょう！？ 鉄虎と白虎は確かに神様（♪）から貰った名剣ですけど、某大きなゼンガーさんの刀みたいに自由自在に大きさが変わるってわけじゃないんですから！

「え？ 出来ないのかい？」

「……ぐ、ぐれてやるう！」

慶次まで！ ここには僕の味方はいないんですか！？

「ち、ちくしょー……」

「あ、お姉さま！？ どこに行くんですか！？」

「千歳がいないと誰もあいつを止められないな」

「千歳ちゃん、苦勞してたんだなあ」

両手に握った鉄虎と白虎を適当に振り回しながら、島津さんが真つ二つにした扉の先に進む。

僕の目の前に立ち塞がる信者たちは吹っ飛ばして、斬りかかろうとした信者たちは斬り飛ばして、頭上から落ちてきたトゲトゲの何かはぶっ壊して――。

「止まれ、侵入者よ。ここから先へ通すわけにはいかぬ」

――そう、目の前にいる元就さんも吹っ飛ばして……。

……ん？　なんでしょう、何かがおかしい気がします。こう、凄い違和感を感じます。ここにいてはいけない人物が目の前にいるような、そんな気がします。

OK、OK。まずは落ち着きましょうか、僕。落ち着いて状況を確認するんです。えーっと、僕の目の前にはオクラみたいに緑色の服を着て、フラフラみたいなの刀を天高く翳して決めポーズをとっている元就さんが……。

元就さんが……。

毛利元就さんが……。

クールなイケメンで、安芸の国を治めている毛利元就さんが……
…ふむ。

「何やってるのよ、元就さん！？　こんなところで！？」

何故かいた元就さんに向かって叫ぶ！

絶対おかしいでしょう！　一番ここにいてはいけないですよ、この人！　日の本で一番ここにそぐわない人ですよ！？

「何を言っているのだ、娘。我は元就などと言う名前ではない。我の名は……」

そこまで言うとな元就さんは僕に背中を向け、チラツと顔を僕に向け……言い放った。

「戦略情報部隊長サンデー毛利……サンデー毛利よ！　侵入者よ、大人しく捕らえられるがいい！」

ビシィッ！　と、元就さん……いえ、サンデー毛利は僕に刀を突き付けた。

……え、何これ怖い。

「も、元就さん？　一体全体どうしたっていうの？　日頃のストレスでも溜まっていたの？」

「全ては日輪とザビー様の導きの下に。娘よ、貴様もザビー教へ入

信しろ」

……か、会話が成り立たない！　なんですかこれ！　どうしたって言うんですか、元就さん！

「愛を知れ。愛さえあれば一万年と二千年前からでも心は通じ合うのだぞ」

とりあえず無視して何故元就さんがあんなってるか考えましょうそうしましょう。

えーっと多分元就さんもザビーって奴に洗脳されて……ああ、大して考えることなく結論が！　もう現実に向き合わなければいけないと言っの！？

チラッと元就さんを見る。

「愛。愛愛愛愛愛愛愛愛」

病んでる！？　あれ洗脳というか病んでますよねえ！？

ま、まずいですよ。こんな文字通りの暴れ馬、僕だけで対処出来るわけがありません。ここはさやかたちが到着するのを待つて……ん？

視界の端に見覚えのある何かが映った気がしたので、振り返る。

そこには、壁に隠れながら僕に向かってサムズアップしている三人の姿が………こほん。

「薄情者おおおお！」

「さあ、娘よ！ 我の愛を貴様に伝えてやろう！」

「お断りよお！」

刀を振りかぶって襲いかかってきた元就さんから逃げる！
イジメよね？ これって絶対イジメよねえ！？

サンデーよりジャンプ派の人、拳手……いえ、特に意味は無いです（後書き）

サンデー！ サンデー毛利の可愛さは異常（え

未だに千歳不在が続いています。しかし次回には千歳が復活！ それと同時にザビー編も終わり……ようやく筆頭が見えてきました。とりあえず筆頭が出るまでは初期の更新ペースとまではいきませんが、同じぐらいの投稿速度に戻したいです！

ちなみにアンケート（？）を。

千歳と直親の過去話を番外編でやろうと思っています。具体的に言うとか千歳は神様（♪）との出会い、雪に出会う直前まで。直親は神様（♪）との出会い、雪たちに出会う直前です。

前者の主な登場人物は佐助、後者の主な登場人物は元親にソードマスターチェストとなっております……読みたいと思った人は拳手をお願いします！

ザービザビザビ……ハッ、洗脳されてた（前書き）

ツッコミ復活&ザビー登場の巻。

とりあえずザビーの喋り方分らないです。変な片言とか無理。

ザービザビザビ……ハッ、洗脳されてた

どうも皆さんこんにちは。【虎の姫】真田雪です。

貴重なツツコミ……げふんげふん、全然忍んでない忍者であり優秀かどうか甚だしく疑問ではありますが、多分優秀な部類に入るのである家臣でもある千歳を、ザビー教とかいう胡散臭い宗教集団かどうかすら疑わしい連中から助け出すために――。

「どうした侵入者よ、何故動かぬ？ ……そうか、我が日輪に恐れを為したか？ ふむ、だがそれも詮無きこと。日輪とともに輝くザビー様から賜った愛の力の前で、我に恐れを為さぬ者などおらぬのだからな！」

僕は！ 今すぐにでもこの場から逃げ出したいという感情を鋼の意志で必死に抑え込み、鉄虎と白虎を握る両手の震えも抑え込みながら、元就さん改めサンデー毛利さんと相対していますっ！

オーケーオーケー……少し取り乱しちゃいました。落ち着きましょう僕、落ち着きましょう真田雪………あ、やっぱり無理です、とりあえず泣いていいですか？ いいですよ？ というかもう誰の許可もいりませんし知りません。僕は、僕は泣いて泣いて泣きまくってこの状況から目一杯目を逸らしてやりますよ！ もう知りませんよ、僕は。後は、後は皆さんに！

「よし！ 後は任せたわよ！」

「嫌だ」「嫌です」「俺も嫌かなあ」

「即答！？ お願いだから助けてよ！」

「だが断る」「だ、だが断る！」「本ツ当にごめん……だが断る」

僕から少し離れた壁からひょっこりと頭だけ出したさやかに鶴姫、慶次の三人が僕が発した救援要請を見事なまでの人間三重奏で拒絶しました。

くっ！ 何故こういう時だけ無駄に息が合ってるんですか！ 戦いの時はみんな単独で俺TUEEE状態……一人無双状態で協力など欠片もしていなかったと言うのに！ どうせなら戦いの時にこの団結力を発揮してほしかった！ いや、発揮しなくても充分強いんですかね！？

「だったらせめてそこから出て来なさい！ このままじゃ僕が文字通り得体の知れない何かの重圧に押し潰されちゃうわ！」

「ふむ。平たく言うとこのままでは自分が危険だから、誰でもいいから生贄寄越せ……ということか？」

「と、遠からずも近からず……って、違うわよ！ ぼ、ぼぼ僕がそんな狡猾いことを考えるわけがないでしょう！？」

「……………」

ああ！ さやか の視線が僕の破裂寸前な心を撃ち貫いてく！
……し、仕方ないです。サンデー毛利さんは僕が担当して、彼よりも確実に厄介であるだろうザビーって奴を後ろの三人に担当してもらいましょう。ええ、決めた決めました。そうと決まれば！

「サンデー毛利……いや、元就さん！ 僕はあなたを正気に戻したら速攻で帰るわ！ 覚悟しなさい！」

「良いだろう、我が日輪の光の前にザビーするがよい！」

元就さんがフラフラプみたいな刀を僕に突きつける。

面倒だから一瞬で気絶させます！ 多分本気で首筋叩いても死にませんよね？ 今まで僕が出会って来た人たちはみんなバケモノみたいな強さですから平気ですよね！

「……………」つかあいつ、千歳はどうする気なんだ？」

……………無視！

「いくわよー！」

「ザッビザビにしてくれるー！」

「雪お姉様、だんだん壊れてきてませんか？」

「今の雪を見て対織田連合の大將だと信じる者はいないな、確実に」

「案外雪ちゃんはそのを狙ってたりしてな」

「それもない」

うわわわっ！？ フラフラップから太陽光があ！？

……十分後。

「勝った！ 勝利！ win！ 僕は勝者！」

「ば、馬鹿な……」

激しい激闘の末、僕の足元には傷だらけの元就さんが倒れています……え？ 気絶させるだけに留まらせるんじゃないのかって？

太陽光で燃やされかけたら誰でもキレてタガが外れるってもんです。ええ、だから月牙天衝もどきやマヒヤドもどきを全力で放ってしまったのも仕方ないんです。うん、仕方ない。

「ざ、ザビー様から愛を賜った我が、このような場所で、このような輩にいいい……」

マズイ、元就さんから小物臭がプンプンと！ このまま放っておいたら普段の元就さんが言わないであろう台詞をバンバン言っちゃいそうです！

「正氣に戻りなさい、元就さん！ 普段のあなたはどこへ行ったの！？ 対織田連合に入るって言った後に僕の目の前で本当は利用してやるつもりだった、って言ってたあの時のあなたはどこへ行ったというの！？」

「お前、よくそれでそいつ信用したな」

「根は優しい人だから平気よ！」

「ザ、ビー……」

「……多分！」

床に這いつくばってザビザビ言ってる姿を見て慌てて訂正。
あれは駄目です。僕には今の元就さんを元就さんと思い、信じるこ

とが出来ません……太陽光浴びせられましたし。

「ま、まあ、とりあえず！ 元就さん……サンデー毛利は倒したんだから、早くそこから出て来なさい！ そして早く千歳を助けに行きなさい！」

僕の後ろで隠れていた三人に向けて叫ぶ。

後は三人に任せて僕は帰ります。無責任？ そんなこと知りません。もう僕はここにいたくないんです、精神崩壊寸前です。ジ・○にスイカバーで突っ込んだ人みたいに精神崩壊しちゃいそうです。

「だ、だって雪お姉様の後ろの扉の先にはそのサンデー毛利さんを従えてた人がいるんですよ？ だったら雪お姉様がズバツと倒してきてください！」

鶴姫の反論も言い分。

だったらってなんですか。だったらって。どうせあんたなら出来るでしょう？ みたいな言い方ですね！ サンデー毛利との激闘（のはず）で消耗した僕には彼より上であろうザビーって奴と戦う力は残されていません！ 正直無理です！

「それだつたらさやかでいいじゃない！ さやかなら銃とかでパパツと殺^やれるはずでしょ！？」

秘技・だつたら返し！ さあ、どう出ますかさやか！ 流石のあなたもこれには反論出来な――。

「それもそうだな……では、そうするとするか」

「はえ？」

ガシャコン、という重々しい音が聞こえたと思ったら、さやかが右肩に乗せたロケットランチャーを僕の後ろ……つまりは扉に向けていました。

……え？

「ちょ、ちょっと待ちなさい、さやか。何する気？ いえ、何する気かは分かってるけど、扉の前には僕が……」

「これが一番手っ取り早いだろう？ それに、早く帰りたいと言ったのはお前じゃないか」

「た、確かにそうは言ったけど！ あれよ、物事には秩序ある行動を……ね？」

僕はさやかを刺激しないように出来るだけ穏やかな声で説得する。するとさやかは分かってくれたのか、右手に持っていたロケットランチャーを下ろし、左手に新たなロケットランチャーを……駄目だ！ 全然分かってないです、この人！ 数増やせばいいってことじ

やないんですよ!?

「では撃つぞ」

「タイム! まだ僕が扉の前に……きゃああああ!？」

僕の制止も虚しくロケットランチャーの引き金が引かれ、放たれた弾が僕の後ろの扉を木っ端微塵に破壊した。

破壊された扉の破片が飛び散る中、僕は自身に飛んでくる破片を必死に鉄虎と白虎で弾いていた……それはもう死に物狂いで。

「だから駄目だって言ったじゃない! 死ぬ! 捌き切れなくて死ぬ……ん?」

鉄虎と白虎を振るっていると、木っ端微塵になった扉の向こうに何かが見えた。ここに来るまでに倒してきた信者たちと似た服を着て両手に大きい筒のような物を持った大男。多分お館様や島津さんよりも大きい。

な、なんですか、あの人。まさかあの人がここに来るまでに度々耳にしたザビー教の教主、ザビー……?」

「オーウ! ワタシたちの努力の結晶が! 塊ガー!」

……なんかキモいしました。

「どうだ、雪。こっちの方が楽だろ、う……？」

「千歳お姉様！ どこです、か？」

「うわ、でつかいなあ、あいつ。島津の爺さんより大きいんじゃないか？」

木っ端微塵になった扉を通ってきたさやかに鶴姫がザビーらしき人物を見て固まり、慶次は相変わらぬ能天気さを發揮してザビー（もう確定です）を興味津々な様子で見ている……ふう。

「やっぱり帰れば良かったわね……」

「あ、雪様！ 助けてくださーい！」

「む、千歳？」

そういえば僕は千歳を助けに来たんでした。忘れてましたよ。

千歳はザビーの横にいました。何故かこの誰とも知らない信者が振りかぶってきているハサミを両手で必死に抑えています。

……何やってんですかね？ 新しいプレイ？

「これがプレイに見えるんザビか！？ 雪様、遂に頭爆発しちゃい

ましたか!？」

「なっ、誰が頭が爆発しちゃった馬鹿貧乳よ! ええい、せつかく助けに来てやったのに……ザビ?」

「へ? どうしたんザビか? ……あれ?」

なんか千歳の口から『ザビ』って聞こえるんですけど。ですが見たところ洗脳はされていないみたいですし……一体何が?

「アア、ミネルヴァ猿飛! アナタモヤツとザビー教の素晴らしさが分かって来マシタカ!」

「な、なんザビって?」

ザビーって奴が嬉しそうに小踊りを始める。ミネルヴァ猿飛ってなんですか? サンデー毛利の『サンデー』と同じようなものですか? ……というか、『なんザビって』↓『なんですって』ですかね? どうやら『です』の部分が勝手に『ザビ』に変わってしまうようですね……全く。

「なんでそんな中途半端なのよ。どうせなら言葉全部『ザビ』にするぐらいしなさい。大体あなたがミネルヴァ? はん、あなたなんか『オツπ猿飛』で充分よ。身の程を知りなさい」

「雪様!?! いきなりなんなんザビか!?! この状況で私への罵倒

を始めるんザビか！？ 色々とおかしいでしょう！ ……あー！
ザビザビしつこいザビ！ むああああ！」

「さあ、ミネルヴァ猿飛。大人しくザビー様と同じ髪型にしましょう。抗ってはいけません、流れに身を任せるのです」

「うるさいザビよ！ さっきからしつこいザビ！」

「げえっふザビイ！？」

どうしてもザビザビになってしまい、堪忍袋の緒が切れたっぽい千歳がさっきからハサミを持って迫って来ていた信者の腹へコークスクリューパンチ。ああ、あの信者は千歳の髪をザビーヘア……なんかも力つくから河童ヘアで……改めて、河童ヘアにしようとしてたんですね。あれ、というか千歳が信者をボッコボコにしてるんですが……千歳一人で脱出出来たんじゃないですか？ あれえー？

「ネエネエ、そのアナタ」

「は？」

「ザビー教に入りマセンカ？ 今ナラこのザビー目覚まし時計もツイテクルよー！」

そう言っただけ目覚まし時計を差し出してくるザビー。

……………え、何こいつウゼエ。あまりのウザさに口調が変わっちゃうぐらいウゼエ。

「ふんっ」

「アアアア！ 何するノ！ ザビーが夜なベシテ作ったノニー！」

「夜なべ！？ ふざけんなあ！ あんたが夜なべなんて百年早いんだよ！ 世界中のお母さんに謝れ！ 子供のためにマフラーを編んでるであろうお母さん方に謝れえええええ！」

自分でも何言ってるのか分からなくなってきましたが、言いたいことは言っておく！ これが僕のジャスティス！

「……やっぱり雪お姉様壊れてますよね？」

「いや、元々あんな感じだったろう？」

「流石に違くない？」

「よし、良いだろう。ここまで来てやったんだ、あんたをボッコボコのバッキバキにしてやらねえと気が済まねえ！ おら、いくぞ！ 僕の剛剣受けてみるやあ！」

「オー、暴力反対ネ！ 漢ナラ拳で語りまショウヨ！」

……ピキッ。

「誰がペツタン胸の男野郎だ、てめえ！」

「ソウダ、アナタの洗礼名はペツタン……ソウイエバ名前が分力リマセン。教えてクダサーイ！」

「誰が教えるかボケが「突撃いいいいい！」きゃああああ！？」

聞き覚えのある声が聞こえると同時に、ザビーの後ろの壁から何かが突っ込んできた！

な、なんですか！？ おかげで頭が冷えて言葉遣いが直ったことには感謝しますが、一体誰ですかこんなことする人は！ 今度は部屋が木っ端微塵……別に良かったです、ここザビー教の教会ですし。

「……って、あれは……」

完膚なきまでに破壊された壁の方を見ると、砂塵の向こうに何やら見覚えのあるでっかい碇と大剣が見えます……ああ、あの二人ならやりかねませんよね。

「おうおうおうおう！ ザビーって奴あどこだい！？ 子分たちは返してもらっぜえ！」

「大人しく出てこい……お、雪じゃないか。ザビーはどこだ？ 落とし前つけてやらなきゃいけないからな！」

砂塵の向こうから碇をブンブン振り回しながら元親さん、大剣を肩で担ぎながら直親が現れました。

どうやら随分とお怒りの様子です。僕も人のこと言えませんが…ザビーの居場所？

「そこ」

「は？ ……あ」

「ド、ドイテクダサイ。重いデース……」

直親に踏み潰されているザビーが蛙が轢かれたような声を出す。そんなザビーに僕は無言で歩み寄って……。

「オオ、ペッタンなんとか！ 助ケツテエ！？」

「……げ」

……股と股の間を蹴り飛ばしておきました。

ザービザービザービ……ハッ、洗脳されてた（後書き）

次回でザービー編終了！ 同時に武田へ帰還……そして遂にあの方が
！ ひゃっはー、盛り上がってきたぜえええ！（え

さらばサンデー……じゃない、四国（前書き）

不定期更新、ここに極まれり……いや、本当すいません（汗）

さらばサンデー……じゃない、四国

ひっく。

……あ、間違えました。どうも皆さんこんにちは。
ザビー教とかいう蝶……超胡散臭い宗教集団を潰し、日の本どころ
か世界を救った（はず）の【虎の姫】真田雪です、ひっく。

「く、くううう……我は、我はあああ……」

「ザビって、ザビって……いくらなんでもザビって……」

ひっく。えーつとあの後……あ、あの後って僕がザビーの男の勲章
を蹴り飛ばした後ですよ……おえ、思い出さくないこと思い出し
ちゃいました、吐きそうです……水、水。

「全く……ほら」

「あ、ありがとう、さやかのお姉さん」

「急にどうした」

ゴクツゴクツ……プハア。では、あの後から今現在までの間に何が起きたか説明しましょう……ひつく。

「この毛利元就、一生の不覚……ッ！ 我はこれから先、どのような顔をして生きていけば良いのだッ！」

「あう……あうあう……あうあう……千歳は、千歳はもう幸村様のお嫁さんになれませえええん……あうあう」

ザビー教の信者になってた人たちは何故か長宗我部軍の兵士さんたちのアニキコールで洗脳が解けて、今では立派な長宗我部軍の兵士となっっています。

……え？ それこそ洗脳じゃないのかって？ 私たちは（正確には長宗我部軍の兵士さんたちが）悪の、あくの組織から救ってあげたと言うのに、それを洗脳だなんて言う阿呆がいるわけないでしょう。ええ、いるわけありまひつく。

で、ザビーですが……酒樽に詰めて海に流しました。めでたしめでたし。

流石に人を海に流すのはどうか、という意見が出ましたが、そんな人たちには顔の1cm手前辺りまでザビーの顔を近づけてやりましたよ。そうしたら皆さん素直に僕の言うことを聞いてくれました。あっはっは、みんな根は良い子なんですよひつく！

「——というわけで。直親、お酒」

「何がというわけで、だ！ お前もう十瓶以上空けてんぞ！？ 後

あの二人をどうにかしろお！」

「ぬうああああ……我は日輪の申し子、決してザビー教などには屈しは……ぐああああ」

「あはは、あははははは。子供は何人がいいですかねえ？ あ、でもその前に男の子か女の子かを……え？ ザビー？ 幸村様一体何を……嫌です！ ザビーだけは、ザビーだけはあ！」

直親が酒を貰うために差し出した僕の手を弾き、元親さんの横で呻いている元就さんと頭を押さえて苦しんでいる千歳を指差す。

……あの二人を？

「嫌。面倒なもの……ういゝ、ひつく」

「お前そんなんでいいのか！？ お前のキャラの方向性、あっち行ったりこっち行ったりだぞ！」

「ふっ……それが【虎の姫】、それこそが真田雪なのよ。鶴姫、お酒」

「はい！ グビツといっちゃってくださいっ」

「それで誤魔化せると思ったら大間違いだ！ そして鶴姫はそいつの言うことを聞くなあ！」

「黙っててください、ツツコミ」

「仕方なくやってるだけだ！ ていうか辛辣過ぎるぞ！？」

鶴姫がグレてる気がします。これはいけない、一体誰の影響を受けたんでしょうか……？ あ、そうか。

「さやかね」

「お前だ」

僕の隣でチビチビとお酒を飲むさやかが恐るべき反応速度でツツコミをかましてきました。

失礼だと思う。僕のせいで鶴姫がグレただなんて。確実にさやかの影響を受けている気がするんですが、あの辛辣さとか。主にザビー教攻めた時とかザビー教攻めた時とか。

「おのれ、おのれえ……！ 何故我にザビー^奴を殺させなかったのだ、長宗我部え！」

「お、落ち着けよ毛利。確かにあいつあとんでもないことをしでかしたとは思うが、俺の子分たちもお前さんも無事帰って来たんだし、何もそこまですることあねえだろ。樽に入れて海に流しまでしたんだぜ？」

「ふっざけるなあ！ あの潮の流れでは石垣原に辿り着いてしまうではないか！ あそこの坑道の奴らが拾ってしまうかもしれんぞ！

？ 奴が、奴が生き延びて…… ええい、酒だ！ 酒を持って来い、捨て駒ども！」

「おつ、あんたもイケる口かい？ ほれ、一献」

「つて、待て慶次…… ハア、仕方ねえ。付き合つてやるか」

溜息を吐きながらも元就さんのやけ酒とそれに便乗する慶次に付き合つてあげる元親さん。流石海の男、氣前が良いですね…… お酒の貯蔵量的な意味で、ひつく。

……ふむ。四国^{ごく}は居心地の良い場所でしたが、そろそろ。

「甲斐に戻つても良い頃かもしれないわね」

「すぐ戻りましょう！ そして幸村様に会いましょう！ 私に癒しを齎してください、幸村様~~~~~！」

「よし、分かった。天にいる雑賀衆の歴代頭領たちに会わせてやる」

僕の言葉に、先程まで異様に落ち込んでいた千歳がとんでもない速さで反応し、そんな千歳にさやかが銃を突き付ける…… いやいやいや。

「待ちなさい、さやか。確かに今の千歳はウザさがMAXになっているけれど、これは一時的なものだから。流石にザビーみたいな悪

夢を見た後はこうなるのは当たり前だと思うから。お願いだから銃を下ろしてあげて」

「チッ」

さやかは渋々銃を下ろす……やっぱり鶴姫がグレかけてるのはさやかが原因なんじゃ。

「雪お姉様雪お姉様。甲斐にお戻りになられるんですか？ でしたら私も——」

「あー、そうだ鶴の字。伊予河野の奴らがそろそろ帰ってこい、つて文を寄越してきたんだが——」

「……………え？」

元親さんが懷から取り出した文を見て、鶴姫が固まる。

あー、そういえば家出的なことをしてきた！ とか言っていましたからね、この子。追手（？）が来るのは当然か。

「ゆ、雪お姉様あ！ 私、お姉様たちと離れたくないです！」

「……でも、仕方ないんじゃない？ 鶴姫はその伊予河野って場所の人たちに相当大事に育てられて来たんでしょ？ 元気な顔見せてきてあげなさいな」

「雪様がまともなことを言ってる！？ 明日は雨……いや、コロニー。ザー……いいえ、地球外金属生命体が……」

しばらく出番が無かった分の鬱憤でも溜まってるんでしょうか。

「う。うう……分かりました」

鶴姫は少し悩んだ後、伊予河野に戻る決意をしたようです。

まあ、そんなに落ち込まなくても大丈夫ですよ。

「甲斐で佐助辺りに聞けば僕たちの居場所が分かるだろうから……都合が良くなったら追って来なさいな？」

「雪お姉様……はいっ」

「……………あれ、オチは？」

無いに決まってるでしょう。

「まあ、そんなわけで元親さんに元就さん。対織田連合の話……改めて、受けてくれてありがとう」

「気にすんじゃない。俺たちの協力が欲しい時はいつでも言いな」

「……対織田連合ではなく、対織田・ザビー連合にせぬか？」

元就さんのザビーへの恨み度が半端じゃないんですが……気にしないことにしましょう。

……幸村、元気にやってるかしら。お館様に侵食されてなければ良いけど……あつ、そうだ。甲斐に戻った後は奥州にいるらしいギ・デインを使うつて人に会いに行かなきゃね！ 僕のマヒャ。とどちらが上か勝負です！ ……勿論、対織田連合への勧誘も忘れてませんよ？

「……暇だな」

オレの愛刀である六爪の手入れも終え、遂にやることが何もなくなつてしまった。

Shit……ちよつと前までは奥州統一の為にやらなきゃいけないことは大量にあったのに、統一したらしたで暇過ぎて仕方ねえ。退屈過ぎて死んじまいそうだぜ。

「武田か上杉辺りに喧嘩でも吹っ掛けてくるか？」

「そうですね。そうしましょうか」

「ッ！？　って、なんだ小十郎か……！？　ま、待て小十郎！　オレは別に勝手に抜け出そうとしていたわけじゃ……what？」

オレの背後に立っていた小十郎が言った言葉に俺は疑問符を浮かべる。

『そうですね。そうしましょう』だと？　オレが喧嘩を吹っ掛けに行くのを小十郎が止めねえ、ってことは……。

「……武田と上杉が派手なpartyでもやらかすのか？」

「流石政宗様、察しが早い。近々武田と上杉が川中島にて戦を繰り広げるらしいです」

「……解せねえな。さっきはああ言ったが、武田と上杉が戦^やり合う必要がどこにある？　噂じゃ武田の秘蔵ツ子の【虎の姫】ってえ野郎が織田を倒すために対織田連合なんてbigなもんを作ってるらしいじゃねえか。【甲斐の虎】と【軍神】なら、織田を倒すために協力するんじゃないのか？」

オレあ生憎【甲斐の虎】と【軍神】、どちらとも会ったことは無いが、そんな無駄なことをするような奴らじゃないと思うんだが。

オレの疑問を察したのか、小十郎は「だからこそですよ」と返事を

返す。

「今まで幾度も雌雄を削り合つて来た両雄が突然戦いを止めてしまつては、織田に『何かある』と気付いてくれと言っているようなものでしょう。武田と上杉はお互いにそれを分かっているんです……ですがまあ、手加減など一切しないんでしょうがね」

「成程、大体は分かった。b u t……それでなんでオレたちが横槍を入れる理由になる？」

「ふつ、それこそ愚問ですよ政宗様」

「A h？ ……へえ」

そう言うのと小十郎は、部屋の襖を勢いよく開けた。その先に広がる光景にオレが思わず感嘆の息を漏らすと、小十郎はニヤリと笑いオレに告げる。

「——余裕ぶつてる武田と上杉の度肝を抜いて、奥州に伊達あり、と言つことを思い知らせてやりましょう」

「『筆頭！』！』！』！』」

襖が開かれた先には、兵たちが戦支度を整えて庭に並んでいた。……H a。ただ単にお前らが暴れただけじゃねえのか？ 血気盛んな奴らだぜ。

「Are you ready guys!？」

「「「Yeah!!!」」」

——オレも人のことは言えねえがなッ！

「OK！ 良い返事だ、てめえら！ 対織田連合？ Ha！ そんなもん知るか！ どの道織田はオレたちが倒すんだ！ 甘ったれたこと考えてる奴らに、竜の力を思い知らせてやれ！」

さあ、楽しいpartyの始まりだ！ 武田に上杉……精々オレを楽しませてくれよ？

さらばサンデー……じゃない、四国（後書き）

鶴姫が一時離脱。一応理由はあるので鶴姫好きの皆さん怒らないで！

筆頭出陣！ 小十郎が非常に短絡的過ぎる気もしますが、彼も奥州を統一した後暫く刀を振るってなかったから鬱憤が溜まってたんでしょう、そうに違いはない（え

帰る姫、ぶつかる竜虎……まだぶつかりませんか？（前書き）

何ヶ月ぶりだろう……やっと更新出来ました。今まで内容が浮かばなかったのに、今日ポツと頭に浮かんで、書き上げました。やれば、出来るじゃん……↑ちよつと嬉しい

とにかく！ タイトルに竜と書いてあるのに筆頭が出ないタイトル詐欺（次回に出ます）ですが、久しぶりの弟は真田幸村、よろしく願います！

帰る姫、ぶつかる竜虎……まだぶつかりませんよ？

どうも皆さんこんばんは。

お久しぶりです、【虎の姫】真田雪です。

……え？ お前誰だつて？ 嫌ですね、いくら更新が停滞していたからといっても主人公の名前を忘れるなんて……更新ってなんなんでしょうか。

「雪様。いくら更新が停滞していたからってそれをネタにするのは卑怯だと思います」

「ああ、ごめんなさい……って、だから更新って何よ？」

「そりゃ更新って言ったら……あれ？ なんでしたっけ」

僕と千歳は馬の手綱を握り締めながらも、うーんと唸って考える……が、いくら考えても答えは出ない。

ふむ……ここまで考えて思いつかないとなると、何か神秘的な力が働いていると見るべきじゃ……神秘と言えばあの神様（♪）。今頃どうしてるんでしょうか。しばらく前に♪を卒業して（シリウスが終わったらすぐ戻りましたが）、天界（笑）に帰ったんでしたっけ？ 懐かしいですねえ、神様（♪）……。

.....。

「神様（♪）のせいでよくないかしら？」

「奇遇ですね。私もそれでいいと思ってました」

「お前ら何言ってるんだ？」

お互いの神様（♪）に対する認識を僕たちが確かめ合っていると直親……間違えた、アックアもどきが訝しげな視線を向けてきた。

「どうしたのよ、アックアもどき。あなたも仲間に入りたいの？
いいわ、あなたもあの神様（♪）のアレさを知ってる一人なのだから、問題はないわ。さあ、ドンときなさい」

「おう。色々と言いたいことがあるが、とりあえず一つ。俺はアックアもどきじゃねえ！」

「とうかついに。で隠すことすら止めたのか！」とアックアもどきが叫ぶ。

なんなんですか、もう。久しぶりの更新だからってはやぎすぎです……って、だから更新って……ええい！ 神様（♪）、次現世（？）に來た時殺す！

《そんな理不尽な！？》

「待て。というか何故直親が私たちと一緒にいて、前田慶次はいなくなっているんだ？」

「さやかさん……今更過ぎるぜ……もう何日も一緒に旅してきたじやんか……」

さやかの純粹な疑問に、直親はガツクリと肩を落とす。

む。それは以前に説明したはずですが……あ、まったくしてませんでしたね。これは失敗。

「えつとね、さやか。分かり易く言う……直親は元親さんに『お前ここにいても海で暴れまわるだけなんだから、世の中つてもんを見てこい』と言われたので僕たち同行。慶次は加賀の近くを通り過ぎようとした時、『久しぶりにまつ姉ちゃんの飯が食いたいから先行つといて！』と言ってどっか行つたのよ」

「見事なまでに二人とも分かり易い理由だな。前田慶次ぐらい清々しいのならばともかく、直親。お前は……アレだな」

「アレって何だよ！？ さやかさんまで変な言葉使わないでくれなかなあ！」

「……私のツツコミの負担が減りました。これは、私にボケろつていう神様の啓示なんです！ あ、でも神様つて神様（ゝ）なわけだから……ふう。なんだか急にテンション下がりました」

「ええい、めんどくさい！　なんだお前ら！　色々と元気過ぎるわ！」

ふうー、ふうー……と、直親が暴走したE。Aみたいな息を吐いています。ヤバいですね、アックアもどきな直親に暴走されたら僕たちの手に負えるかどうか……なんとなくさやかが一蹴しそうな気がしますけど。

というか今気付いたけど、鶴姫が抜けて慶次がまつさんのご飯欲しさに抜けた現状……転生者三人に武器庫女頭領のグループというわけですか。ふむ、中々にシニールですね……ああ、そういえば雑賀衆の皆さんも後ろに――

「ッ！　大佐殿に、敬礼！」

「「「サー、イエッサー！」」」

……何も見てません。僕は何も見ていませんというか後ろに振り向いてすらいません。全ては気の迷い、神様（♪&笑）のせいなんです……。

《『笑』が増えた！？　ちょっと雪さん、私の扱いが酷過ぎませんか！？』》

やつぱり疲れているみたいですね。さっきからちよくちよく神様（♪&笑）の声が聞こえてきます。これはいけない。さつさと甲斐

に帰って幸村分を補充しなければいけない「待て」はい？

「さやか？ どうしたのよ？」

さやかが馬から降りて、僕たちの前に立ち、右脚のホルスターからリボルバーを取り出し、近くの木に向ける。僕の疑問に答えずに、さやかは告げる。

「出てこい。どこの者かは知らんが、織田の手の者だとしたら……容赦はせんぞ」

「——おいおい、勘弁してくれよ。俺様を織田の忍者なんかと一緒にしないでほしいね……いや、忍者なんてみんな同じようなもんかな？」

さやかの人も殺せそうな鋭い声が響いて数秒後、さやかがリボルバーを向けていた木の上から、迷彩服のような服を着た男が下りてきて……って。

「佐助じゃないの。久しぶりね」

「兄さん！ 生きてたんですか！」

「いやあ、雪様。久しぶりですねえ。しばらく見ないうちにこれまた美人に……なあ、千歳。お前の目には俺はどう映ってんの？」

相変わらずの飄々とした雰囲気を身に纏いながら、千歳の兄であり武田家の忍者——猿飛佐助は僕たちの前に現れた。

……なんか久しぶりとか言ってるけど、どっかの陰から僕たちのこと見てたんじゃないんですかね？ お館様の命令とかなんかで。まあ、別に悪い事じゃないんですがね……覗き見ですか。

「幸村に、佐助にお風呂に入っているとこを覗かれたって言うたらどうなるのかしら……よし。帰ったら言ってみましょう」

「ちょ、雪様！？ それはマジで勘弁ですって！ そんなこと言われたら旦那だけじゃなくお館様にも殺されちゃいますよ、俺！……って、こんなことしてる場合じゃなかった。雪様、ちょっと急ぎで甲斐……いや、川中島まで戻ってきてほしいんですよ」

「川中島？ どうして？」

未だに佐助が誰か分かっていないさやかがずっとリボルバーを向けているのがちょっと気になるけど、今は佐助の話を聞かないと。

「織田に怪しまれないようにと、武田と上杉が戦を始めたんです」

「あ、そうなの？ まあ、確かにそれは急がなきゃいけない気がするけど、そこまでじゃない気がするわよね。僕がいたらどうにかなるものなの？」

僕が帰って来るのが遅いから起きた戦なのかもしれないけど……
その代わりに僕は前田（慶次のみ）に雑賀衆、長宗我部に毛利とい
った仲間を作って来たんだから、それぐらいは大目に――

「……雪様。お館様に旦那の二人が、頭では分かっているけど、手加
減が出来ると思えますか？」

……………。

「無理ね！」

「完璧に無理ですね！」

「ヤバいわ！ このままじゃ最後の最後までやっちゃうかもしれない
じゃない！？ みんな、さっさと川中島に行くわよ！」

「せっかく同盟の戦力を充実させてきたっていうのに、上杉がボロ
ボロになったら意味がありませんよお！」

千歳と二人、急いで駆け出す！

馬、頑張れ！ 間に合ったらあなたのことを風雲再起と呼んであ
げます！

「……武田というところがどういうところなのか、分からなくなっ

てきたぞ」

「大丈夫だ、さやかさん。元々イメージがあつた俺でも想像以上過ぎて分からなくなってる」

「変わらない……のかねえ、あの二人は」

「うおおおお！ 俺は無敵の一番隊！ 直――」

「火焰車ああああ！」

「無敵なのにやられたああああ！？」

両の手に握った二槍を持ったまま、まるで独楽「マ」のように回転し、
某それがしの周囲に群がっていた上杉の兵を吹き飛ばす！

人が木の葉のように吹き飛んで行くのを視界に収めながらも、某は回転を止めない。全ては、全てはあ！

「お館様のためでござ」このつ、馬鹿もんがああああ！」「ぶべらっ！？」

再び上杉の兵が密集している箇所へ突撃しようとした瞬間、某の頬を巨大な衝撃が襲った。殴られたのであるう……某は殴られた勢いのまま地面をゴロゴロと転がり（周囲の兵を巻き込みながら）、

二十回転したところで止まる。

ぐっ……こ、この拳、この気迫は……！

「お館様！」

地面から起き上がり、顔を上げた先には、某が尊敬する【甲斐の虎】こと武田信玄公——お館様が巨大な戦斧を片手で担ぎながら立つておられた。

お館様は戦斧を軽く振るい、地面に突き刺すと、某に視線を向け。

「幸村あ！ お前はこの戦の意味を分かっておるのか！？」

「こ、この戦の意味で……」ございますか？」

うつむ……某たち武田軍は、姉上が対織田連合を結成するために動いているのを極力隠すために、武田と上杉が手を組んでいないと——実際、『今』はまだ手を組んでおらぬが——思わせる為に、こうしていつも通りに川中島で戦を行っているわけだが……。

「それが一体どうしたと言っているのでありますか？」

「阿呆が！ 確かに僕は織田の密偵に怪しまれぬよう手加減はするな、と言った。だがそれにも限度があるだろうが馬鹿ものが！ これでは来る織田との決戦で上杉が力を発揮出来ぬやもしれぬではないか！」

「ハッ！ それは確かに……む？ ですがお館様も先程から豪快に斧を振るっておられていたような……」

「……………」

某が漏らした疑問に、お館様が黙り込む。突如訪れた沈黙に、某も思わず黙り込む。

……………。

「お館様、幸村殿。何やら北から迫りくる一団があると報告が――」

「幸村！ 儂と謙信の真剣勝負は誰にも邪魔されてはならぬ！ その一団とやらを見事食い止めてみせい！」

「承知いたしましたお館様あ！ 小山田殿、馬をお借りしますぞ！ ハア！」

「あ、ちょ、幸村殿――！？」

背後から小山田殿が呼ぶ声が聞こえるが、某には聞こえん！ お館様と謙信公、お二方の真剣勝負を邪魔しようとするものは断じて許さん！ 決して、決して沈黙が苦しかったわけではないんだ！

「うおおお、不屈き者ども！ 某が成敗してくれるううううう！」

姉上！ 某に色々と力を分けてくだされえええ！

帰る姫、ぶつかる竜虎……まだぶつかりませんか？（後書き）

幸村とお館様が書くの楽し過ぎて楽し過ぎて。あの二人のやり取りだけで頑張れば一話……無理ですね。

あ、あと皆さまと一緒に。

直江南無（マテ

帰る姫、ぶつかる竜虎……やっとうぶつかりましたよ（前書き）

復活！ 長らくお待たせしてすみません、弟は真田幸村ここに復活です！

更新が停滞していたのは、最後まで收拾つければいいか悩んでたのが原因でして。しかし！ 劇場版戦国BASARAを見に行つて悩みが解消しました！ ありがとう、天海！（え

では、久しぶりの弟は真田幸村。雪と千歳はまったくと言っていいほどいつも通りでございます。

帰る姫、ぶつかる竜虎……やっとうぶつかりましたよ

どうも皆さんこんにちは。

純白可憐、清廉潔白を信条にしようかと思っている【虎の姫】
と真田雪です。

「雪様。いきなりそんなこと宣言されても意味が分からないんです
けど。」

……もしかして、どこかに頭でもぶつけました？」

「気分よ。気にしないでいいわ、デカπこと猿飛千歳」

「あ、新規読者のための紹介ありがとうございますー……………心配
して損しました」

千歳が不服そうに両頬を膨らませてそっぽを向く。

最近異様に僕に対して辛辣だったからやり返してみたんですが、
どうやら予想以上のダメージだったみたいです。これはいけない、
従者からの信頼（元からあったかは知りませんが）を失うことは主
にとっては死と同義！ここはどうかしてフォローしなければ！

「ごめんなさいね千歳、悪気はなかったのよ。ただのちょっとした
お茶目心」

「そ、そうなんですか？」

千歳が涙目ながらも少しだけ声を弾ませて振り返る。よし、このまま優しい言葉を叩き込んで信頼を取り戻す！

「ええ。僕が本気で千歳のことをデカπだなんて蔑むわけじゃないじゃない」

「そうですよね！ 雪様がそんなこと言うわけ……あれ。でも私、何回も雪様にデカπデカπ言われながら胸斬られかけた記憶がいっぱいあるんですけど」

「ですよ？ と腕を胸に寄せて、デカπを歪ませながら聞いてくる千歳。

僕はその無駄にエロい胸を凝視した後、千歳の質問を無視して自分の胸に両手を当てる。そこにあるのは、見事なまでの絶壁。更に言うのなら断崖絶壁。もう一つ加えて言うのなら、僕が転生前から長年付き合ってきた宿敵^{とも}。

……………ふっ。

「所詮僕の胸は、野菜を切ることしか能のないまな板よ。転生前は『最近すごい肩が凝ってるのよね』『それ胸のせいじゃねーの？』『ッ、馬鹿！ 何言ってるのよこの変態！』って感じの男女間のやり取りを夢見てたまな板乙女連合の筆頭だったのよ！ うわーん！」

「……………うわあ。それはなんと云うか……………うわあ」

「やめて！ 僕をそんな憐れんだ目で見ないで！ くう、世の中は無情だわ……………！」

かわいそうな人を見るような目で見つめてくる千歳に背を向け、僕は体育座りをして両膝の間に顔を埋めて世界の残酷さを呪う。

一体、一体なんだって僕と千歳にはこんなに戦力差（胸囲的な意味で）があるんですか！ 食べてるものは同じだったんですから、量の差？ ……いいえ、これはもう世界の修正力ですね。きっと僕の胸が大きくなったらもう絶世の美女なんてレベルを軽く超えてしまっからあの神様（♪）が何かしやがったんです！ そうです、そうに違いありません！

「……………千歳。無事に甲斐に帰れたら焼き鳥が食べたいわね」

「きゅ、急にどうしたんですか？ まあ焼き鳥は美味しそうですから是非とも食べたいですけど」

「決まりね。……………ふふふ、生きているのなら神様（♪）だって殺してみせるわ……………」

「あ、私も狩るの手伝います」

千歳が普通にツツコミを放棄して神様（♪）討伐隊に加入した。流石忍者、素早い変わり身です。

……………ふう。さて、そろそろ。

「現実逃避は止めましょう、千歳」

「……はい。そうですね雪様。私たちは、現実に立ち向かわなければいけないんです」

千歳とともに、今までの会話の最中必死で顔を背け続けていた方向に顔を向ける。

「Ha！やるじゃねえか赤いの！オレとここまで戦^やり合えたのはお前が初めてだぜ！褒めてやるよ！」

「それは光栄！だがしかし！某^{それがし}は赤いのなどと言う名ではござらん！某の名は、真田源次郎幸村でござる！」

「上等だ、真田幸村！そう簡単にGive upしてくれるんじやねえぞ？」

「その言葉！そっくりそのまま返させてもらう！ゆくぞ、伊達政宗え！」

僕たちの視線の先——森を抜けた先にあつた開けた場所では、僕が愛してやまない実弟である真田幸村と、三日月の兜を被って右目に眼帯を着けている男がとんでもない速さで互いの武器を振るいながら、楽しそうに戦っていた。

幸村の二槍と男の振るう刀がぶつかり合う度に物凄い衝撃波が巻

き起こり、周囲の木を薙ぎ倒す。……これはもう、なんと言っているのやら。

「幸村、Give upの意味分かってるのかしら……」

「そこですか？ もっと追求すべき箇所がありますよね？」

まあ幸村様は愛すべき馬鹿ですから分かってないと思いますが、と千歳。何気に辛辣なことをサラリと言いましたよ、この忍者。

と、それよりもまずは状況の整理ですね。ここにたどり着いた途端目の前の面倒そうな光景から目を背いて、近くの藪に隠れたものですから何が起きているのかを把握しなければ。

「えーっと、千歳？ 幸村が戦ってるのは……伊達軍の大將かしら」

「はい。【独眼竜】こと奥州筆頭伊達政宗です。ネギ……じゃない、小十郎もいますね。」

武田と上杉が戦っているところに割り込む途中で、幸村様と鉢合わせたみたいですね。……ああ、でも二人の最初の対決が生で見れるなんて……私、長年の夢が一つ叶いました」

何故か目をこれでもかと輝かせて、二人の対決を悔いるかのように凝視し続ける千歳。

むう、なんですか？ 千歳にとって幸村と伊達政宗の対決は何か意味があるものなんですか？ こういう時に神様（♪）がいれば解説してくれるんですけど……まったく、肝心な時にいないんですか

ら。

《……そんなこと言って、いざ私が現れたら焼き鳥にするために捌く気なんでしょう？ 自ら死地に赴くほど私は馬鹿じゃありません♪》

「WAR DANCE！」

「筆頭が六爪を！？」

「野郎、抜かせやがった……！」

……流石神様（♪）。人の心を読むのはお手の物ってことですか、さつきからバリバリアピールしてた気もしないでもないですけど。

しかし、相変わらず唐突に反応してきますね、あの神様（♪）はちゃんと神様の仕事してるんでしょうか………六、爪？

不意に聞こえてきた聞き慣れない単語に、視線を戦いの場へ。そこには、幸村の二槍と指に挟んだ六本の刀で斬り結んでいる伊達政宗の姿が。

「……ふう。どうやら僕は疲れているようね。そうよ、そうに違いないわ。だって、指に刀挟んで振るうなんてそんなこと出来るわけ——」

「あ、筆頭が六爪流使ってる！ うわー、生で見るとやっぱり迫力があります！」

「……六爪流って名前なのね、あれ」

隣で爛々と目を輝かせながら千歳が漏らした言葉で、目の前の非常識な光景は現実だということを強制的に認識させられた。

いや、でもいくらなんでもあれはおかしいでしょう。人差し指と中指で真剣白刃取りをするぐらい有り得ないです。

「非常識にもほどがあるわよ」

「月牙。衝もどきとマヒャ。もどき使える人が今更何言ってるんですかって、幸村様危ない！ 頑張って！」

「……」

僕に辛辣なツツコミを入れた後、観戦に戻る千歳。ふつ、僕は良い部下を持ったものです。大食いでデカπでツツコミきつくてデカπですけど。

「火焰車あ！」

「PHANTOM DIVE！」

幸村が回転すると同時に二槍の切っ先に焰を纏わせて放った一撃と、伊達政宗の雷を纏った六爪の一撃がぶつかり合う。二人は互いの技を弾き返して距離を取ると、もう何度目か分からないぶつかり

合いを再開する。

……忘れかけてましたけど、僕たちつて幸村とお館様が暴れ回るのを止めるために来たんですよね？ それなのにどうしてここで大人しく観戦してるんでしょう。馬鹿みたいじゃないですか。

「千歳、そろそろ出ていくわよ。戦いを止めないと」

「えー、どうしてですか？ もう少し見たいです」

「……あなたね、僕たちの目的を忘れたの？ 武田と上杉の戦いを止めなきゃいけないのよ？ 幸村が上杉本陣に行つてなくて良かったけど、こんなところで油売られてても困るのよ。それに少ししか見てないけど、伊達政宗は強い。幸村を信じてないってわけじゃないけど、万が一ってことも有り得るわ」

ここで助けに入ったら幸村は怒るかもしれないけど、僕は幸村に死んでほしくない。これ以上家族を、たった一人の弟を失うのは御免です。

そんなことを考えていると、千歳が何やら驚いたような顔で僕を見ていた。意外そうに、とも言えるけれど。

「何よ千歳。何か言いたいことでもあるの？」

「いえ、あの……雪様がシリアスつて、珍しいなあって思つて……」

「……失礼ね。僕だつてやる時はちゃんとやるわよ」

本当に失礼極まりない従者だ、このデカπは。これだからデカπは困る。栄養が全部胸にいつてるんでしょう、だからこんな失礼なことを平気で言えるんです。まったく、本当に困ったデカπです。

「デカπデカπ連呼するのやめてくれませんか！？ 流石の私も堪忍袋の緒が切れますよ！」

「ふん、本当のこと言って何が悪いのよ。デカπはデカπでしょう、このデカπ忍者」

「だ、だからデカπって言うのやめてって言ってるのに……！ もう我慢なりません！ そのまな板みたいな胸に私の恐ろしさ、思い知らせてあげます！」

そう言ってステイレットを懷から取り出し構える千歳。……まな板。今まな板と言いましたか、この無駄乳は？

僕は無言で鉄虎と白虎を鞘から抜き、千歳に突きつける！

「いいわ！ ここで決着を着けましょう！ まな板とデカπ、どちらがこの世界を支配するに相応しいかを！」

「世界規模の争いだったという事実は何気に驚いていますけど……そんなことはもう関係ありません！ いきますよ雪様！ 私がただの胸がデカい女ではないということを思い知らせてあげます！」

「おい、てめえら。そこで何してやがる？」

「何って、女の意地を懸けた戦いを……あれ？」

ふと聞こえてきた声の方向に顔を向けると、そこには眉をしかめ
厳しい表情をし、左手に刀を携えている小十郎という男。

そして彼の背後では、どこぞの暴走族みたいな恰好をした兵士た
ちが僕たちを凝視していた。幸村と伊達政宗も戦いを止めて、僕た
ちを見ている。

「……ゆ、雪様？」

隣に立つ千歳のとてつもなく不安そうな声。恐らく今の『……ゆ、
雪様？』は『……ど、どうしましょう？』という意味だろう。
いや、どうしろと言われてもこの状況は……よし！

「——どうも。その真田幸村の姉をやっております、真田雪です。
好きな食べ物焼鳥です」

とりあえず自己紹介をして場を和ませる作戦に出してみました。さ
あ、皆の反応は！

『……………』

「……Ah？ 真田雪だあ？」

「……雪様の馬鹿」

「姉上……！」

中々に冷たいものでした。というか千歳まで僕に冷たい視線を浴びせてきます、理不尽です。

……というか幸村、その真っ直ぐな目で僕を見ないで。恥ずかしくなるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5770m/>

弟は真田幸村

2011年8月5日00時55分発行